
紅炎があかるすぎる～青鷗大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅炎があかるすぎる～青潟大学附属シリーズ中学編

【Zコード】

Z6789E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

水鳥中学生徒会は現在、ふたりの副会長によつて運営されている。その副会長、関崎乙彦と総田幸信は犬猿の仲だつた。学校祭を前に互いの自主企画「座談会」と「フォーグダンス」を持ち寄り激しく対立する。ふたりを冷静に見つめる、乙彦の親友佐川雅弘。不器用だがひたむきな乙彦を慕う一方、幸信の才知にも惹かれていく。やがて雅弘はひとつの策略を試みる。それぞれの恋心もからみながら学校祭最終日を迎えるとしている……。

おとひつちやん。そつ僕は呼んでいる。

放課後に突入するやいなや、夏の黒く硬い影を廊下になびかせながら、教室から飛び出す影、あれが関崎乙彦こと、おとひつちゃんだった。

夏服の白いワイシャツを、しつかり襟まで閉め、職員室の方に向かっていた。職員室まで来ると少し足音を忍ばせる様子だった。もう八月の末だというのに、まだ衰えない夏の暑さで、汗がにじむ。僕がここにいるのを気付いてか気付いているんだろうか。

タバコの煙が田の前まで白くたたつていた。軽くむせている様子。おとひつちやんは乱暴にと職員室の引き戸を開け、生徒会顧問の先生がいる机へと向かっていこうとした。

そこで僕は初めて声を掛けた。

「あ、おとひつちやん？」

僕は学習委員だ。チョーク入れと教科書を先生から預かっていた。授業が終わると、必ず学習委員が職員室まで、授業道具を持ち運ぶことになつてこる。

煙が僕の頭の上を流れているのがわかる。たゞこくへくなつやつだ。

「雅弘、これから生徒会室に来い

おとひつちやんは咳きこみながら、僕にささやいた。

「なにかいい」と、あつたみたいだね、おとひつちやん

「ちょっとばかり、おもしろいことになつやうなんだ

「舞い上がっているつて感じだもんなあ

「やう見えるか？」

おとひつちやんは、学生帽を右に左にと持ち替えてつぶやいた。

「俺、完全に舞い上がっているだろ」

言い残し、おとひっちゃんは社会の先生のもとへ向かつた。生徒会顧問だ。

言葉どおり炎がなにか、燃え立つてゐるみたいだつた。

心臓から、夏の陽炎のように、わやわやと。

僕は国語の先生に教科書とチョークを渡した後、すぐに生徒会室に向かつた。南京錠がまだかかつてゐた。おとひっちゃんも、時間を食わなかつたら、すぐに来るだろ。

一階、図書館の隣。

倉庫とみまちがえそな細長い部屋がそこだつた。

誰もいな生徒会室。

おとひっちゃんにとつて、もつとも氣楽でいられるところ。
そう、らしい。

生徒会副会長に当選してから、おとひっちゃんは同じ組の連中と遊ぶ時間が減つてゐるようだつた。そのせいだらうか。僕を付き合わせ教室ではしゃべることの出来ないようなことを話してくれたものだつた。

「まだ、誰も来てないよ」

「まったく、たるんでるしな」

おとひっちゃんは鍵をはずした。

「だいたい生徒会室に鍵がかかつてゐるなんて、ほんとはあひっちゃんないことなんだ」

さつと口を開け放つた。むせ狂つたような空気が鼻についた。

「本当は、できるだけ役員が待機してて、他のみんなが気軽に入ることのできる、そんなところにしておくべきなんだ」

入り口からは真つ直ぐ見える大きな窓ガラス。跳ね返つた光がまぶしすぎた。眼の中を刺しそうだつた。痛い。涙が出そうになつた。調度品は古めかしく、黒光りしている。先に入つたおとひっちゃんはその逆光を浴びてゐた。なんだか、影絵芝居の登場人物のようだ。

後光が差している。

窓際から伸びている、長めのテーブルに、平行四辺形の反射光が白く光った。おとひつちやんはその明るい部分にノートをぽんと置いた。

「なんかさあ、俺、この日のために副会長やつてきたんだなあって氣、すごいするんだ」

いつになく、おとひつちやんはよくしゃべった。

「荻野先生から、噂は聞いていたんだけど、今日正式に決定したんだ」

「何がや」

「今年の学校祭」

そういう時期なんだ。

夏休みが終わつたばかりのせいか、まだピンとこなかつた。

「期間が三日間あるだろ。そのうち最初の一・二日間は学校行事いろいろな講演会とか、プラスバンドの発表会とかで、動かせないものばかりだつて」

そりだそりだ、去年は三日ともそりごう感じだつた。

「今年はなんと、第三回を生徒会の自主計画に任せてもらえるんだ！ 俺たちの手で動かせるんだ！」

おとひつちやんは窓から身を乗り出した。僕も側に寄つておとひつちやんの表情を眺めた。アカシア、ななかもど、花も実もない木々が、緑葉だけつややかに輝かせているのが見えた。ずっと奥にはグラウンド。サッカー部の練習だらうか。こまごまと動き回つている。そのまわりを、円を描くように陸上部の連中がゆつたり、走つている。

「弁論大会がいやだつていうんじゃないんだ、俺。ああいう真面目に一生懸命やることつて、すげえ好きだよ。でも、先生の手が入るだけ入つているのを、みんな読み上げているだけだろ。本当に言いたいことは全部削られたつて、先輩も言つていたんだ。だから、去年は三日目弁論大会だったのを、俺たちにその時間、ぐださいつて

頼んだんだ。ちゃんと理由も言ったよ。そうしたら、荻野先生も話を通してくれたみたいでさ。今日、やつと〇〇さん

水鳥中学校祭恒例の弁論大会は、三日目に行われるはずだった。よくぞ撤回できたものだと思つ。新企画を立てるまでにこぎつけるには、おとひっちゃん一年がかりの「憤」が種になつていて。あまりにもひどい、ひどすぎるとおとひっちゃんは血を上らせ、学級日誌を二日分使って、抗議していたらし。同じ組でないから直接見てはいけれど、友達から詳しく述べた。

去年の学校祭直後は、おとひっちゃんの熱弁に悩まされたものだった。よく覚えていい。

去年も一応、生徒企画のものはないわけじゃなかつた。

ただ、内容がひどすぎると言われてもしかたのないものだつた。テレビクイズ番組の真似ならばまだ参加できるからいいけれど、先生たちの脚本を押し付けられた民話演劇にはみな、眠くなる一方だつた。それに繋がるブーリング、やじ、途中退場。それに対決を挑む先生たち。終わつた後に残るのは、関わつたものだけの自己満足だつた。僕たちに残るものは、ほとんどなかつた。

おとひっちゃんが怒りまくるのも、僕は決してわからないわけじゃない。

「俺がもしやるとしたら、いんなくだらない学校祭なんてやらない。もつと、楽しく、祭りの後にも何かが残ることをしたいんだ」

もちろん敬語を使つていてるだろ。先生達には。

きっと啖呵を切つたんだろうな。おとひっちゃん。

先生達には、おとひっちゃんの発言がイコール、『次期生徒会出

馬表明』として受け取られたらし。

一年が経つた。あと一ヶ月でおとひっちゃんの任期も終わる。長かつただれ。

おとひっちゃんは両手をぱしつと、テーブルに下ろした。

「それなりにさ、俺も必死こいてきたつもりだよ、でも、やっぱり、

「でも、お俺つて無力だよなあ。ちつとも変わんないでやんの」「ちひっちゃん、やつてきたこと、すごいよ」

「俺がやればやるほど、他の奴は逃げるしね。」
「さればすぐ生徒会のせこにされてしまつただ

おとひつぢやんば物憂げに

おとひっちゃんは物憂げにグラウンドの群れを田で追つた。

「でも、学校祭は俺たちのお祭りだろ。生徒会まかせにしておいていいと思つか？ 学校祭は、一部の奴の義務なんかじやないんだ。

もつともつとも、樂しこもののはずなんだ」

僕の答えを待たず、強く頷いた。テーブルにしたノートを広げた。僕の前に差し出した。

第一行には、右に跳ね上がった筆圧の強い字が並んでいた。

水鳥中学校祭 第二日目生徒会自主企画書

一年生徒会副会長 関崎乙彦

僕は学校祭代三日目自由企画に「教師VS生徒」による本気本音の座談会を提案したい。テーマは後ほど決定する。今まで、先生たちの圧力などで押しつぶされてきた意見などがたくさんあるはずである。それを公の場でぶつけあい、あとあとまで残るものにしたい。

「座談会?」

「早い話、先生たちが思つても見なかつたようなことを、アドリブで言つてやつて、へこまくらうつて魂胆なんだ」

「ふうん」

すぐに「い」とは言い切れなかつた。

おとひっちゃんの情熱だけがなんだか熱かつた。

「でも、一歩間違つたらけんかにならないかなあ。そんな企画、簡単に通してくれないとと思うよ」

「大丈夫、さつきちらつと匂わせてきたんだ。そしたらおめでたいもんでも。『それはいい、ただの遊びで終わるのではないかと思つていたけどな、そうか、生徒の自主性を活かせる企画になりそうだな』なんて、にこにこしながら言つてたぜ」

「それなら、それでうまくいくんではないの」

僕は、声が裏返つたような感じで答えた。

自分でも少し、無責任っぽく聞こえた。

本音なんだから仕方ないのかな。

「おとひっちゃん、来年もあるんだから、そうあせらなくたつても二年のうちに全部やつくなんて思わなくたつていいのに。」

次期改選も近い。おとひっちゃんには明日がある。

なのに、なんだかおとひっちゃんにはせつぱつまつたものがある。

「来年はないんだ、雅弘」

おとひっちゃんは口を一文字に結んだ。

「俺はこれが成功したら、生徒会を引退する」

すつと笑みを隠して、言つた。

僕は思わず声を上げ、おとひっちゃんを指差してしまつた。

「おとひっちゃん、どうこつこと?」

この時まで、ずっとおとひっちゃんは次期副会長かもしくは生徒会長に立候補するものだと思っていた。毎年そうだけれども、生徒会経験者が一年でやめるなんてことは、普通絶対ない。

大抵、現在の副会長あたりから生徒会長が立つ形になるし、会

長にまでならなくともなんらかのポストに残るのは約束だった。

「冗談を言つているつもりなのだろうか。

でも、おとひつちゃんの顔にはなんとなく、はにかんだようなやさしい笑顔が浮かんでいた。めつたに、他の奴らには見せない、やわらかい表情だ。ずっと小さなころから、僕をかばつてくれた時、泣かされていたときにかばつてくれた時、

「雅弘、俺はお前の親友だからな」

と言つてくれた時。僕には見慣れた表情だつた。

窓辺から来る弱い夏風。頬を撫でさせている。でも不意に部屋の方を向いた。日焼けしてうつすらと染まつた顔。目鼻口、硬くつややかに焼かれ、顔に埋められた陶器のように、見えた。ただ硬いだけではなく、ぶつけるとこわれそうなもろさが同居している。時がくれば夏の日焼けも消えるだらつ。皮がむける時。落とせば碎け散る破片。その下からおびえたように震える肌が現われるだらつ。

おとひつちゃんの本質を、僕は十三年かけて、見つけてきたつもりだつた。 陳腐な言葉だけど。言つてしまつ。

『純情』なんだよな、おとひつちゃん。

「そんなもつたいないよ、せつかくここまできたのに、おとひつちゃんす」く苦労していたの、俺は知つてゐるよ。なのになんですか」おとひつちゃんは軽く伸びをして僕に顔を突出した。

「俺は生徒会長なんて柄じゃねえよ。もともと上に立つてまとめるなんて、出来ない性格なんだ。俺が生徒会に入つた理由つて、一にも二にも、学校祭をやりたかつただけだしさ。前代未聞の生徒一丸学校祭を作り上げて、華々しく引退するつて、最初から決めていたんだ」

「俺にはそんなこと、一言も言わなかつたじゃないか

「言つたら、選挙に落ちるに決まつてるだらつ。そのくらいの計算は、俺だつて働いていたよ」

肩をすくめて、おとひつちゃんはちらりと窓辺に目を向かつぶや

いた。

「来年は受験生だしや」

未練だ。でも、気持ちはわかる。

どうしても行きたい学校、あるんだよな、おとひつちやん。

おとひつちやんが黙ると、窓の外、図書館、廊下からさまざまなおわめきがなだれうつて聞こえた。合唱団の歌声、家庭科室から足踏みミシンの緩やかな響き、階段を駆け上がつてくる派手な足音。

「あいや、佐川と関崎、またホモだしひつじ、してるつで」

いきなりがらりと開いてのけたのは、水鳥中学生徒会、もうひとりの主だ。そつだゆきのぶ総田幸信。同じく生徒会副会長。

「そういう言い方やめろ」

おとひつちやんはきっと見据えて怒鳴り返した。

「だつてえ、そういう雰囲気だつたんだもおん」

顔色変えず、口調だけなまめかしく答えた。

なんだかいやな予感がする。過去の経験からも明らかだ。僕はそろそろ退散することに決め、学生帽に手を伸ばした。

しかし、僕に対しては田代とこおとひつちやんだった。

「雅弘、ちょっと待つてろ」

かばんを引き寄せたとたん、おとひつちやんの止めが入った。

言いたいことはわかる。

おとひつちやんと総田を一人つきりにするな、そつ言いたいのだ

る。

しまった。家の手伝いがあると、最初に言つておけばよかつたな。今日は暇なんだと、答えてしまつたのは大失敗だ。

しかたないや。水鳥中学生徒会毎度恒例『関崎くわいVS総田』のこうみ合いに立ち会わなくてはならなによ。

広げっぱなしのホールを開じ、おとひつちやんは総田の第一声を待っていた。

「なにそれいらっしゃんだよ。つたぐ、おとなげねえの。わあったよ。わいならするよ」

総田は顔を一瞬ぐの字のに曲げ、背を向けた。本気で帰る気はなさそうだ。ポーズだポーズ。

戸口で立ち止まり、

「なんか、俺に言いたいことあるんだろ」

数テンポ遅い口調で振り返った。さつきひとせ一気にけりつひとわやかな笑顔である。正面相総田と、ひそかに僕は呼んでくる。余裕があるように、見える。

「学校祭のことを聞いたのか」

反対におとひつちやんは重つたるい声で答えた。どすが利いている。

「ああ、学校祭三日田のことだろ」

「総田は、どうするつもりだ」

どすとさわやか声の対比がばらばらだ。かえつてそれが怖い。お互いに自分のテンポを崩そとしないのだから。

「どつするもこつするも、俺たちがやるしかないだろ。好きなようにやれつて言われているんだからわ。やりたいよつてやればいいんじゃないの」

うん、たとえば、と首をひねりながら、総田の足は僕とおとひつちゃんの立つている方に向かった。結局、生徒会室の奥に来たかつたんじやないか。白い光はたらたらとしたたつていた。その光を浴び、総田はまぶしそうに目を細めた。細い隙間から外を眺めやり、「たとえば、グラウンドを利用するつてのは」

「運動会でもやるつもりか」

「そういうのは関崎のお得意だろ。俺、総田幸信はまつぱり、全校生徒の皆様にご奉仕しなくてはならないと思つわけあります」

「それとこれとどう関係があるんだ」

「まあそつせな、アイドル歌手の「ンサートやるとかわ」おとひつちゃんの心によぎつた言葉を、僕はかなり正確に読み取れる。

「一言、狂氣の沙汰。

「こんなもんじゃないかな。

「からかうのもいいかげんにしろ」

それでもあえて声を抑え目にしているのは、おとひつちゃんも一年でかなり、辛抱強くなつたしるしだ。本人もきっとそういう思つてゐに違ひない。僕からしたら、尻尾丸見えなんだけれども。

「冗談でもできるわけない」というな。」」」は学校なんだぞ

「良ぐ」存知で。俺もよく知つてゐるぜ」

ちゃんとおとひつちゃんの出方を計算していのだ」」

「大体、常識つてものがないんかよ」

素直ないやみじやない総田のつっこみ。」」」のが一番、おとひつちゃんの苦手なところなのだ。ストレートに文句をいつなら、爆発して怒鳴るなり殴るなりできるだろ」」。でも総田は決して、そういうわかりやすいことをしない。もし手出ししたら、一発でおとひつちゃんが悪者になるようなシユチューニッシュンに持つていぐ。挑発にひつかることもあれば、うまくやり過」」してくれたことも逢つた。いや、気付かないことも多かつたと言い換えた方がいいんだろうか。おとひつちゃんは、都合のいいことひうで鈍感などいろもあつたから。

総田の声がいきなり跳ね上がつた。

「関崎、お前こそ、同じ年の連中が持つ常識つていうのが、わからぬのかよ」

おとひつちゃんの方がぴくつと動いた。何かを言おうと口を「あ」の形に開けた。それを押しとどめるように、

「お前の考えは、今さつき荻野先生から聞いてきた。なあにが座談会だよ。思いつきり笑つちやうつて。せつかくも、俺たちにバトンを渡してくれて、好きなようにやれつて言つてくれたんだ。その好

意を無駄にしちゃ困るぜ」

腹式呼吸を使っているに違いない。腹の真中をほつほつせと二回膨らませて大笑いしてみせた。お居がかつていて、良くな響いた。負けるわけないと思つてこるのだろう。さらに続けた。

「まあ、関崎の言つ風に座談会とやらをやつしてみたとするわ」「とやらつてのはなんだ！」

「まあまあ、したら、どうなると思つへ？」

「なんだと？」

腰に手を当てすりくと立ち上がつた。つかつかと近寄り、にらみつけているおとひつちやんの鼻先に人差し指を突きつけた。一步たじろいだ様子のおとひつちやん。

「考えたくないだろうが、去年の焼き直しさ」

ただでさえ大きな目がさらに見開かれている。

「つまり、あんたの発想つていうのは、先生たちと全く変わらないつてことだ」

「なんだと、もう一度言つてみろー。」

一年前のおとひつちやんだったらいで総田の襟首を引っつかんでいただろう。少なくとも、怒鳴り散らしていただろう。でも今聞こえた声は、からうじて普通にしゃべる響きのままだつた。おとひつちやん、成長したよな。ひそかに僕は感心した。

おとひつちやんと総田との中は決していい方とはいえない。

去年、生徒会役員選挙で初めて顔を合わせた時から、たぶん誰もが気付いていただろう。僕だって、生徒会室の雰囲気がここまで険悪だとは思わなかつた。共通点といえば、唯一、ずばぬけて成績がいいということくらいだろうか。もつとも一年の頃からおとひつちやんは学年トップを守りつづけていて、それをじつにへ追つようになつた。総田がひつづいていりといった構図だ。

服装が一番、見分けやすいんじゃないだろうか。

あくまで標準の学生服そのまんまに着こなしてこおとひつちやん

ん。ただし今は八月なのでワイシャツのみだけれども。それでも三十度を越す暑さの中、乱れぬようワイシャツの襟を止め、隙間なくベルトを締めている姿にくらべて、総田はまさに「乱れる」という言葉がぴったり来る。

ベルトからして目立つ。蛇腹の黄色いしろものに、太め感たっぷりの学生ズボン。一年前からはやつていた幅だつた。足の短い奴がはくと非常にまぬけだけれども、たつぱのある総田はだぶつかないように着こなしている。髪は「天然パー・マ」と申告しているので注意されることもないが、僕はこつそり聞き出した。中学入学式前日にしつかりかけてきて、それ以来三ヶ月に一回はきつちりと形を整えてくるのだそうだ。学校側にはばれていらない。秋になれば、裾に竜を刺繡した学生服を羽織り、生徒会室に乗り込んでくるであろう。もちろん服装検査の前には普通のものにするという。先輩からのもうい物だといって、去年さんざん見せびらかされたものだった。

こいつらが本当に同じ、生徒会副会長なのか。

そう思われても仕方ない。

またに、座談会とコンサートの違いと一緒に
合い通じるものを探せといわれても無理だろう。

「総田、もう一度聞く。どうこうことだ。どういう意味だ」

おとひつちゃんの口調は震えている。必死に理性で押さえている様子だ。限界のメーターはそろそろあぶないところまでさしかかっている。知つてか知らずか、総田はふふっと笑いを漏らしながら続けた。

「あんたを抜かして考えるとすればだよ。まず、『普通』といわれる中学生たちが、こんな真面目なイベントに乗つてくるもんかね」
口をひらきかけたおとひつちゃんを今度は平手で封じた。もちろん鼻の前。さわりはしない。ストップのポーズだ。

「たとえば、テーマを『校則』にしたとする。先生たちを真中に十人くらい置いて、代表参加の生徒たちも同じくらいの数にすると。

後の連中は体育館にずらつとならんで、安座して、言いたい時に手を上げて発言するつてわけだ。三百人の全校生徒が体育館に集まるつてわけだよな。まずは、そいつら全員に目が届くと思うのかよ」「だから、思うことを直接手を上げればいいんじゃないじゃないか。みんなに参加意識をもつてもらえば」

少しうつむき加減に、田線は総田の方へ向けたまま、おとひつちやんは低く答えた。

「参加意識を、どのくらいの連中が持つていると思うかねえ。それ以前に、『座談会』なんかにどのくらい参加したいと思っている奴いるか？ 大抵はさっさと切り上げて、おんもに行つて、ゲームセンターあたりでうるうるしたいとぶつくさ言つているはずだぜ。または寝まくつているか。尻が痛いなあ、いいかげん終わらねえかなあつて、あくびかみ殺しているだけだぜ」

「だから、そんならないようにするのが生徒会の仕事だろー！」

「さらに言つ。俺とかならともかく、他の連中が先生達の言い分をひっくり返せるとと思うか？ どうせ言いくるめられるに決まっていると、みなあきらめてるぜ。ここでいいたいことを言つたとしても、あいつらには全く、利益なんてねえんだからさ」

「利益は自分の中にたまつていくものだ。割り切ることなんてできるかよ」

「と、思つてるのは、関崎、お前だけじゃねえの。参加意義を強く感じているあんたの気持もわからんではないけれどな、あんたとおんなじことを、俺たちや他の生徒たちに求められたつて溜まつたもんじやねえ。知つてるか？ やつぱり、学校つてつまらんな。生徒会？ ひまだなあ。『苦勞さん。学校祭？ わつとふけよつぜ。ばつかでないの、とこんなもんだ』

身振り手振りも華やかに、総田は言つてのけた。

別に演劇部でもないつていうのに、「不良」と呼ばれるみなさまのポーズを三種類くらい取つてくれた。通称「ヤンキーすわり」で膝を広げてしゃがみ、タバコを吸うように一本指。投げキッスに似

ている。かと思えばポケットに手を突っ込み口をぎゅっとひりこて鼻の穴を見せつけるポーズ。

リアルだ。本当に、そう思う。

口八丁手八丁のパフォーマンスに説得された連中が今までどれだけ多かつたことか、つぐづぐ思い知らされる。

出来そうにないおとひつちゃんはあきれたような表情で唇を曲げ、吐き捨てるようだ。

「そういうのを、『見てきたようなうそをいつつ』『いつていつた』舌打ちしながら答えた。

「人間の第六感が優れないとでも言つてほしいな」

「総田の予知能力がもし完璧だとするならば、じゃあ、生徒つて一体何をやりたがつてると思うんだ。それをまずは説明してみるよ。つまりそれがコンサートなのか？　言つておくけど、学校側は一日を使うことを許してくれたけれども、予算はそんなに使えないんだ。第一、誰か有名人、呼べると思うのか？　いくらなんでも、俺たちに任されているつたつて。ここでしぐつたら、また来年から不毛な先生たちのおしつけ行事に戻つてしまつ……」

つつかえながらもおとひつちゃんは一気に言い放つた。

言葉が上手に出でこない。

唇の端で総田がせせら笑つてゐるのがちらりと見えた。

おとひつちゃんが気付かないわけがない。真つ赤になつてゐる。

「そうか。やっぱり、関崎の発想はそこまでか」

夕暮れの色、甘い朱色が光に少しづつ溶けていった。窓に当たる反射光にするすると混じつていつた。風が温もりを飛ばして、冷ややかに吹いていた。

部屋の湿つた空氣が冷え、僕とおとひつちゃんたちを囲む光も斜めに薄れている。こういう時は、そろそろ会話を打ち切らなくてはならない。今日は四時までしか残れない。校内放送が、下校の案内を告げている。

「じゃあ、どうこう発想だつたらいいつていうんだ」

「遊び慣れてねえやつって、困るよなあ。教科書以外の外を見ろよ
総田は囁み碎くような口調で説明をし始めた。

馬鹿にしている。おとひっちゃんが気付いているかどうかはわからなくとも、小学生に話しかけるような言い方はまずいんじゃないだろうか。

「だから。なにも。コンサートに必ずしもプロを呼べとは言つていいだろ。世の中にはアマチュアバンドつていう、無料でいろいろ演奏してくれる人たちだつているんだ。そこまでいかなくともさ、学校の中でバンド組んでいる奴つてたくさんいるだろ。『JUGJUG』
るぞ。何グループから集めて、『水鳥中学アマチュアバンドコンクール』とくれば、ただで、問題ほとんどないイベントができるさ。大成功すると思うな。これこそそつちの学校の連中が求めていたイベントだからなあ。みんなで一丸となつて盛り上がるんだ。ただし……そのまま提出したら、あんたさんは発狂するだろうな。後始末を佐川に任せるのはちょいとかわいそうだ」

計算が透けて見えた。

おとひっちゃんの頬が夕日で真つ赤に染まつていた。

「あたりまえだ、誰だつてそうに決まつてるだろー！ 誰もがバンドをやりたがつてゐわけじゃないだろー！ 僕は別にバンドを嫌つちゃいないが、でもやりたくない奴だつているだろー！ 先生たちだつてロック系統を嫌つてゐる人いるつて知つてているだろー。一部の有志だけで盛り上るのはもうたくさんなんだ。だから僕は！」

再び腰に手をあて、片手でおとひっちゃんの鼻先に指を刺した。

「交換条件といきましょか

「どうこうことだー！」

「交換条件さえ飲んでくれれば、俺は喜んで座談会とやらせて、協力してやるぜ」

「だから、とやうつて言つて方はやめろー！」

総田は続けた。

自信を積み上げたという顔で。

「フォークダンスと、ファイヤーストームつていつのま
おとひっちゃんの田がさらに見開かれた。

「フォークダンス、つて、おい」

「マイムマイムだけじゃない、オクラホマミキサー、トロイカ、と
にかく男女ペアで踊ることのできる奴を選曲しまじゅうや
男女ペア、という言葉に力が入っていた。ねばつこい。

「おい、まさかだろ」

「ちよいと生きのいい学校ならよくやつてることだろ」「ひ

大げさかもしないけれど、おとひっちゃんの様子、明らかに凍
り付いていた。思い当たる節がある。おとひっちゃんの場合、「弁
慶の泣き所」といえる部分が、丸見えなのだから。僕も、無駄だと
知りつつ、じうじうしかない。

「おとひっちゃん、落ち着けよ
見るに忍びないものがあった。

「よく、そこまで言えるよな、総田。お前だけの感覚で、物を簡単
に決めるなよな」

説得力なし。隠すこともできずに、ただおろおろしているなんだか
ら。おとひっちゃんのそういうところを、純情と取るのか、それと
も不器用と取るのか。難しいところだ。

別に、フォークダンスくらい、たいしたことないのに。
僕だったらそう思う。

手を握るつたつて、せいぜい数秒程度だろうに。

おとひっちゃん、そんなに動搖することないのこ。

それに第一。 もつきたんとかならず、手を握る」とになるな
んて、ことないんだからさ。

全くおとひっちゃんは、やつたひめつたら、神経質だよな。
女子の「ひとひこてはわ。

さらにつつこみを続けるんじゃないかと思つていたのだが、どうも收拾がつかなくなつてしまつたらしい。電池切れといった方がいいんだろうか。総田の様子をうかがうと、ふいと天井を見上げて、鼻歌を歌つている。言葉を返さずに、なにせら時間稼ぎしているらしい。かかとをつけたままリズムを取りつつ、ふふふふんと軽くはもつている。

僕はしばらく総田の方をじっと見つめた。妙なことを考へているわけじゃない。ただ、なんとなく、ひつかかつただけだ。おとひつちゃんからしたら、きっと

「余裕かましてみせて俺を怒らせようとしてるんだ」

と思つているんだろう。でも、僕からしたら、なんだか自分で何をしたらしいのかわからなくなつて、大至急計算しなおしていの風に見えてならなかつた。僕が思いつくくらいなんだからおとひつちゃんも、もっと気付けばいいの。僕よりはずつと、頭がいいんだから。

「総田、どうしたんか」

僕は、なにげない表情をつくりて尋ねてみた。

「なんだか、困つているようだけども」

はつとしたように総田は僕の方を、まんまるい目で見返した。

「困つてなんかねえよ。たださ、思つたより衝撃がでかかつたのかな、つて思つたわけだよ。佐川の親友がさ」

「いいかげんにしろ！ 言いたいことがあればはつつきり言えよ、雅弘を通したりなんかしないでさー！」

「もういいよ、おとひつちゃん。あのさ、総田。フォークダンスのことつてまだ、先生には通していないんだ。だつたら、これからゆつくり考えればいいよ。もうそろそろ帰らなくちゃならないしさ、俺、閉じ込められたくないから、先に帰るね」

タイミングを計つていたのに気付かれたくない。おとひつちゃんはたぶん気付かないだろうけれど、総田にはわかるだろう。まあい。僕はかばんの柄を握りなおし、おとひつちゃんに笑顔を向けて

ドアを開けた。総田にも軽く頷いた。

「おい、雅弘、ちょっと待つた」

「思い出したんだ、今日父さんに、配達するより頼まれてたんだ。ちょっと遠いところだから、早めに帰るね」

「今日は暇だつて言つてただろう！」

「うん、そのつもりだつたんだ。でも香弥かひの方まで行く用事があつたんだよな。明日雨かもしぬないから、今日のうちに片付けておきたいんだ」

はたして、納得しているかどうかなんて僕には知ったことじゃない。

僕の家は書店を経営している。大抵放課後は僕が、自転車で定期刊行物や注文の書籍を配達することが多く、あまり居残りができるない。明日までに配達しなくてはならないところがあつたのを、都合よく、たつた今、思い出した。早いうちに片付けておけばいいんだから、嘘を言つていいわけじゃない。

「佐川、ちょっとあとで話がある。頼む」
すれ違い際に総田が、耳もとでささやいた。振り向くと、親指を立てて、にやりと笑つていた。頷き返し、僕は一瞬、しまる直前の生徒会室を目に焼き付けた。

おとひつちゃんは、何も言わず、ただ凍りついていた。

僕にはすべてが読めてしまった。

総田の計画におとひつちゃんが乗せられただけの話だつた。もし僕が総田の立場だつたら、最初からフォークダンスで企画を打ち出すなんていう、単純なことはしないだろ。いきなりだつたらおとひつちゃんの拒否反応がどう出るか想像つかなくて、通るものも通らないだろ。そこで、ショック療法を施そつと思つ。

最初に

「コンサートをやるか

と打撃を「え、頭を麻痺させる。

「ふざけるな！」

と激怒するおとひっちゃんをひとりでわめかせておこてから、次に妥協案を出す。

フォークダンスだ。

おとひっちゃんは一度ガンとやられると、一回田からはわりとおとなしく頷くタイプだ。口では文句をぶつぶつ言っていたとしても、あきらめて自分なりのことをしていくやうとするタイプだ。この一年、何度も試して成功していたのだろう。

そこまでは正しい。僕もたぶん、総田だったりやうするだらう。しかしながら、まだ甘い。

おとひっちゃんを総田はまだ、知り尽くしちゃいな。

こんな初步的な間違い、誰が犯すかって。

おとひっちゃんにとつて、フォークダンスとこうのは決して、妥協案になるようなことじやないのだ。もちろんお金のかかる「コンサートなどを行うところ」は、「生徒会」の立場として、できるだけ避けたいことだらう。ただ眺めているだけで終わりたくない、と思っているからだらう。おとひっちゃんが望んでいるのは、「全校生徒が一丸となつて、企画に参加してくれる」ことであり、それゆえの「座談会」なのだから。もちろん総田の指摘通り「みんな退屈して結局同じこと」というのもその通りだと思うし、僕も「教師VS生徒」の対決がうまくいくなんて思つちゃいな。

そななんだ、つまり、生徒会副会長として、コンサートとこう行事が許せないだけだ。

しかし、フォークダンスとなると、副会長ではなく、関崎乙彦としての激しい抵抗がもろに出てきたんだらう。僕にもその辺の思考回路がどうなつているのか想像つかないけれど、おとひっちゃんはとにかく、女子の顔をまともに見られないところがある。何も悪いことしてないくせにだ。小学校五年生あたりから、妙に女子としゃべることを嫌がりだして、僕をひつつてはいつも男子同士で遊ん

でいた。決してはじめたり、悪口を言つわけじゃない。基本的には自分から手伝つてやつたりするし、

「おとひっちゃんはあまり女子としゃべらないから、やめることね」と言わわれている。

その傾向は続いているのだらう。

おとひっちゃんと同じクラスの奴に聞くと、相変わらず女子とは最低限しか話をせず、何かからかわれるといきなり真っ赤になってしまつたりするという。

そんなおとひっちゃんが、「女子と手を握り合ひ」ようなフォーケダンス案をすんなり飲むとは思えない。総田に「自分と同じ感覚で物事を決め付けるな」と言つけれど、それはおとひっちゃんにも言えることだ。おとひっちゃんは、全校生徒がみな、おとひっちゃんのよみに女子としゃべつて真っ赤になるからフォーケダンスなんてやだと言つてはいる。しかし、僕は結構面白そうだと思つてはいるし、それ以前に、女子を見て真っ赤になんてなつたりしない。すべてが僕と同じなんてことはないと想つねえだ、そういう奴だつて、水鳥中學にはいる。

恋愛っぽい要素が少ない行事だつたら、総田のことだ、いへらでも思つていただろうに。

種をまいたのは総田だ。さて、僕としてはお手並み拝見といつが。

関崎副会長VS総田副会長。

学校祭二日目を巡る対決。

学校祭本番よりもそれを楽しませてもうおつかな。

水鳥中学生徒会がここまで風雲巻き起こる状態になつたのは、かつてなかつたのではないだらうかと思う。僕はあくまでも傍観者だから、おとひっちゃんや総田の動向を観察することにより判断するしかできない。でも、やっぱり、初めに問題ありき。

すべては生徒会長が立たなかつたことに諸悪の根源がある。

本来だつたら当时一年生現二年生の生徒会役員から立候補するのがすじだらう。

誰もがそう思つていたはずだ。

しかしながら内部事情でいろいろあつたらしく、次の選挙に一年生誰一人立候補しなかつた。生徒会は決して仲のよい連中ばかりでなかつたのだらう。想像はつくけれども、でも、立候補者が当时一年生現二年生のみという状況は、ちょっと異常だつた。

先生達が裏でいろいろ説得して、見所あると思われた一年生を無理やり立候補させた。というのが本当のことだ。おとひっちゃんだつて、最初は相当戸惑つていたはずだ。

「雅弘、俺なんで、いきなり生徒会副会長に立候補しなくてはならないんだろうなあ。俺はただ、学校祭があまりにもひどすぎるからつて、先生に言つただけなのになあ、話がいきなり大きくなりすぎてるよ。俺がもし、生徒会に入つたら、陸上もやめなくてはならなくなる」

当時おとひっちゃんは、陸上部で長距離を中心活動していた。中体連などではショットшуウ出走して、それなりにいい成績を修めていた。三年間続けるつもりでいただらう。

生徒会に入つてからおとひっちゃんは、無言で陸上部をやめた。

「とつてもだけどな、体力がつづかないもんな。勉強する気力がも

たねえよ

学年トップの座をなんとしても守りたかったのだと、僕は勝手に想像する。

おとひっちゃんは、同じ学年の奴らにくらべて妙に順位へのこだわりがあった。もともと成績は小学校時代から群を抜いていた。でもここまで必死にやるとは僕も思っていなかった。

現在でもおとひっちゃんは学年通して首席を守り続けている。

生徒会の内部事情を知らない奴ならば、きっと、おとひっちゃんが総田か、そのどちらかが次期生徒会長を務めることになると思いつこんでいるだろう。

僕だつて、疑つたことなかつたのだから。

信任投票という形になり、いやおうなしに副会長がとばっちりを受けた。

共に会長業務を担当するはめになってしまった。上に立つ一人が仲良しだつたら問題はないが、残念ながらそういうなかつた。

さらにも言つならこの一人、おとひっちゃんと総田。

出合つた時からウマが合わなかつた。

おとひっちゃんが言つには、総田の存在を知つたのは総合成績順位上位の一一番手にいつもくつついている、『総田幸信』という名前のみだつたという。部活にも入つていない、自由気ままにふらふらしているようだけれども、やることはきつちりやるし、クラスの信頼も厚いらしい。

さらに言つなら全学年の女子から人気も相当なものがある。彼女になりたがる女子は下級生から上級生にかけて切れたことがないとか。そんな噂もあるくらいだ。

女子受けは非常によい。

おとひっちゃんがどこで反感をかつたのかはわからない。

ただ、お互いに話せば話すほど、性格の不一致に鳥肌が立つばかり。

「俺のどじが悪いんだって言つただよ！」

口癖のようにおとひっちゃんは、僕につぶやいていた。

「俺のどじが悪くて、みんなは総田のことばかり言つて聞くんだよ！ 雅弘、いつたい何処が悪いんだよ！」

僕には大体わかるけれども、答えられない。

……答えるわけ、いかないじゃないか。

……おとひっちゃん、もう少し感情を隠してへらへらした方がいいのにな。

顔には素直に感情が表れるのに、口には出せない。
もつとまずいのは、自分で気付いていない。

つりあいの取れない表情で、まぬけなことを口走る。

男子女子問わず、分け隔てなく話すことのできる幸信は、からかうのが面白くてならなかつたらしい。総田は生徒会室で交わされたおとひっちゃんとの会話をすべて、クラスの連中に演技つきで説明したらしく。

嫌な奴、と思う前に、僕も観てみたかったと思つ自分がいた。

僕が総田を、おとひっちゃんの色眼鏡なしで知るようになったのは、ちょうど、服装規則改正問題の勃発した頃だったと思う。

一年の半ばといえば、まだおとひっちゃんのことを一番に考えていた次期だった。おとひっちゃんの持つモラルを疑うなんて思ったこともなかつた。総田に関するおとひっちゃんの態度で、うまくいつてないなとは思つていたけれども、直接話をしてみるまでは、なんとなくとつつきにくさの方が先行していた。

でも、一回、三回と話を交わしていくうちに、総田の持つている芯のようなものが見え隠れしてきた。ただのおちやらけ野郎ではなく、もつと僕達の本音にちかいところから、水鳥中学生徒会を見据

えているんじゃないか、そう思った。

総田は言った。

「服装検査を厳しくしたって、似合っているとおもっている限り、違反者なんてへらねえぜ。ばかばかしい追いかけっこを続けるよりも、校則を適当にゆるめてやつた方が、かえって先生たちも樂なんじゃねえの」

おとひっちゃんがたまたまいなかつた一年生の、秋、生徒会室。初めて一人つきりで僕は聞いた。

「おとひっちゃんは、先生たちの『うとおり、校則をきっちり守りてもらいうべく、生活委員会に協力してもらつて、服装検査をやろうつて、言つているけどなあ。どうしてそんな風に思つのかなあ。別に俺は、校則の格好だつて変だと思わないけれど、締め付ける必要なんてないのになあ」

「そうだよ、佐川。俺もそう思つ。関崎の考へていることはなんとなく、わかるが、でもなあ。今回先生が文句言い出したことついでうのは、『詰襟のホックを授業中開けたままにするのはやめよつ』とか、女子だと『スカーフは短く結ばないよつにしよつ。背中を風呂敷背負つたみたいな感じで、肩から出すのはやめよつ』とか、だろ。悪いけどそれを十センチ刻みの定規で確認してなんになるんだよ。女子は知らねえよ。でも、俺たちが詰襟をはずすのは、ただ咽が苦しいんだよ。まだ九月だつたら、暑いだろうしだ。ただそれだけなんだよ。別に俺は、ガクランを許せとかは言わない。最低限のモラルは認めるよ。でもな、どうでもいいことに神経を尖らせる必要はないし、生徒側に理由があれば、話を聞いてもらつといひまでは持つていけるんじゃないのか。関崎のようこ、先生の『うこ』とをそのまんま、頷くよりはずつとな

教師側からは、

「なぜ詰襟のボタンをはずしたまま授業に出るのか」

ところ、つるさ型の指摘があつた。生徒会側としても、生活委員会

を交えて話し合い、とりあえずは細かいチェックを朝行おうということになつた。また女子は女子で、スカートの丈、スカーフのリボンの広げ方などに注文がついた。

一時期、非常に厳しい検査が続き、学校内では少し余震が続いた。「確かに、俺もそう思うよ。総田。でもどうしてなんだろうね。おとひつちゃん、規則にそんなうるさいこと言つていないので、どうしてこちらの方ではおとひつちゃんが、先生側についている腰ぎんちやくつて言われるんだろう?」「

その頃僕にはわからなかつた。当時おとひつちゃんは、校則問題について意味不明な態度を取つていた。仲間内でも不思議がられていた。

服装検査を徹底させるべきだと言い出したのが、関崎副会長だ。

要はこんな厳しくなつた元凶は関崎のせいだ。

そういう噂がいつしか流れるようになつた。

一年、三年の先輩たちは直接おとひつちゃんに喧嘩をふっかけようとしたらしい。決してあいつは口に出さなかつたけれども、一方的に傷を負つて帰つたところを僕はなんどか見たことがある。

おとひつちゃんが一時期、休んでいた陸上部を正式に辞めるはめになつたのは、この事件がきっかけのはずだ。

「理由はわかるんだよなあ……おとひつちゃんの趣味は特殊だから」「見苦しい。きれいに見せるには、校則通りの服装が一番だ。そういつちまつたもんなあ。あいつ。ばかじやねえの」

「確かに、おとひつちゃんにガクランは似合わないと思つよ。眞面目な格好がきつちり似合つタイプだから。総田、だと、また話が変わるんだろうけど」

「俺はできれば、首がゆつたりしたまま、教室にいたい。たまつたもんじやねえよ。咽がかぶれて大変なんだ。俺これでも、肌が弱いんだ」

しなしなとお得意の女っぽさをかもし出し、僕は思わず笑った。

おとひっちゃんが一時的だか総田に勝つたよつて見えた。

先生方としては、おとひっちゃんの眞面目一方に見える意見に、満足していたのだと思う。総田のように、校則改正案なんて出されたら、学校の風紀なんてむけやくけやになるばかりだ、そう思つていたのだろう。斬新過ぎる。当然のことながら、第一回の『校則改正案』は却下された。一ヶ月くらい、厳しい服装検査の朝が続いた。僕だって、あまり妙なことをしていいのに、一回制服を忘れただけで思いつきり怒られた。おとひっちゃんにあとで、「どうして俺に言わなかつたんだ。生徒会室にかくしてあるのがあるから、俺が持つてきてやつたのに」ともう一度、怒られた。

しかし、総田はしづとい奴だった。
僕と話をした一週間後だつたろうか。

再び手を入れた『校則改正案』というか『嘆願書』を各クラスの代表ひとりずつに書かせて、直接生徒指導係の先生に手渡し、ふたりつきりで話し合いを持った。

その際には、カセットレコーダーを持ち、会計係の女子も引き連れて、切実に『男子学生服の襟』についての苦痛を訴えたという。「結局さ、服を着崩すとかそういうのではなくて、ただ、少しでも楽な格好を許してほしいってことを、直接つたえただけなんだけどな」

理由が切実なことをわかつてもらえたのだろう。

早速職員会議と生徒総会を経て、「男子制服の襟は、授業中に限り、はずしてもかまわない」

「女子も、夏に限つては自由な帽子（麦藁帽子含む）をかぶつてきてかまわない」

「ロングコートも華美でなければ認める」「などなど、細かな規則がだいぶ減らされた。

この事件により、総田副会長の株および生徒会執行部の評価は一気に上がった。同時に、ひとり教師の腰せんぎんせきやくと見られた関崎副会長の立場は、校内こうないで冷さたい視線にさらされたこととなってしまった。これぞ失策、と言われている。たぶん、当時の一年、三年の間でいざこざがあつたのは想像に難くない。おとひつちゃんの様子が一時期かなり、暗かつたのを覚えている。

「俺のどこがいけないんだよ、俺だつて別にいい子ぶつたわけじゃねえのに。俺は先生だつて、容赦ゆうしゃしないつもりでいたんだ。雅弘、よく見てみろよ。規則やぶつて着こなしている連中の格好。はつきり言って、見栄えすると思うか？ 襟えりをはずすくらいだつたらいい。俺も気持ちはわかるよ。でも、女子のスカーフなんてどこがいいんだ？ リボンだつたらもつとそれなりに結んだ方がいいのに。どうしてわざとあんな肩かたがつっぱつた風に見える着方をするんだろう？」

総田は言つよな。俺は先生たちの言いなりになつてている馬鹿野郎だつて。でも、俺は自分の感性を信じて、きれいだつたらきれい、見栄えいいといえば見栄えいい、そう感じのままに訴えているだけなんだ。雅弘、お前ならわかるだろ？」

その時は頷いた。それ以外なにができるだろう。

おとひつちゃんは潔癖きゃくすぎるんだ。

ただ、糊はが利きすぎている、だけなんだ。田先と激情に足をくわれただけ。やればやるほど、泥沼ねいじょにはまつてしまつだけなんだ。たとえ、関崎副会長の大失策として学校内こうがくないで散々ささやかれていたとしても、僕はおとひつちゃんの味方みがたでいてやりたかった。

ふんふんと頷いて聞いた後、僕なりの助言を一言添えた。

「おとひつちゃん。でもその言い訳、今は誰にも言わないほうがいいと思うな。俺はおとひつちゃんのことわかるから、いいけどさ。

他の奴らはきっと、言い訳としか思ってくれないよ。俺がわかつて
いればいいだる

「ありがとな、やっぱりお前は、俺の親友だよ」

「校則改正問題」が無事解決した、一年生の冬。

総田と再び僕は話をする機会を得た。もちろんおとひつちゃんのいない生徒会室でだつた。僕は学習委員だから、直接おとひつちゃん関係でない限り、めつたに生徒会室には行かないけれども、総田に呼び出されるのだつたらしかたない。誰もいない、生徒会室にひつぱりこまれ、僕は総田のパーマについての秘密を聞き出した。前からおかしいと思つていたからだ。天然パーマにしては、癖があるすぎると。

「そんなことどうして気付いたんだよ」

「いやあ、よくひつかからないなあと思つて。パーマ禁止だろ、水鳥中学は。なの、生徒会副会長のくせに。パーマかけてよく怒られないなあつて」

「それはな、実はな」

総田は窓をぴつちり閉め、ストーブの中を鉄箸でかき回した。

「入学式前日に、思いっきりきついパーマかけてくれつて、床屋でやつてもらつたんだ。ガキの頃から通つているところだつたから、一發で決めてくれてさ。最初のイメージがこうだと思つてくれればあとはなんとかなるもんだけ、先輩達にも言われてたしな。ま、今のところはばれてないし、ばれたって、言い訳はいろいろできるしさ。ちゃんと『天然パーマ登録書』は提出してあるからな。ま、わざやかな秘密つてとこさ」

僕をじつと見つめにやりと笑いかけた。

「だが、それを見抜かれたのは、佐川。お前が始めてだ

「わかるよ。見てたら誰だつて」

「いや、佐川つて、実は影でものすごい奴なんぢゃないかつて、思う。お前が気付いていないだけだつてな。たぶん、佐川の親友も、

「気付いてないな」

総田の言つことは、なんとなくわかった。

別にお高く止まつたわけではないけれど、僕はクラスの連中に比べて、やたらと細かいことに気が付きやすい性格らしい。総田のパーカーもそうだし、女子の体型が痩せたり太つたりした様子とかもそうだし、先生の体調が良くないことも早い段階で気が付いたりした。あの先生、具合悪そうだ。入院しそうだよね。そう誰かに話したりしたら、一週間後に入院、退職したという話を耳にした。また、クラスの女子と男子が付き合つていてることも、僕は噂になる前から気付いていた。

おとひっちゃんにはなんとなく話したけれども、極端に機嫌が悪くなるのでそれ以上は言わなかつた。

別に言つてもかわらないことは、言わないだけだ。

ただ、総田はそういう僕の感覚を、見抜いてくれた数少ない奴の一人だつた。

「あんな、佐川。お前本当のこと言つと、関崎を馬鹿にしてるところあるだろ」

「まさか、何言つてるんだよー。俺とおとひっちゃんは小さい頃からの親友だつて、聞いているだろ」

「関崎は一方的にそういうな。でも、なんか佐川からするとそんな感じじゃないような気、するんだよな」「

石炭を足しながら、僕に背を向けたまま総田は続けた。

「俺つてさ、もともと努力と根性つて嫌いなんだ。要領よく、うまくすりぬけていけばそれにこしたことないと思うんだよな」「

「それつて、ある意味でいやな奴だと思つよ」「

「関崎の親友だつたらそういうだらうな。佐川」「

怒る様子もなく、そのまま総田は僕に話し掛けた。

「そう、軽蔑するようなことこつくなよ。俺は決して、関崎のことを

馬鹿だとは言わないよ。たぶんそいらへんは、佐川と同じ考え方だと思つ。俺も一年からずっと、成績一番続きだったからなあ。あいつさえいなければ、学年トップ狙えたのにって思つよ。それは素直にす「ご」ことだと思つ

信じられないくらい真面目な総田の言葉に、僕は愕然といつ、黙つていた。

「たださ、なんで「校則規則」関係のどうでもいい、ほおつておいてもいいことにばかり、真面目になれるのが不思議なだけなんだ。あれも先生の言つことを無視して、つらつとしていればすべてが丸く収まつたはずだろ。生徒会なんて、どうせそんな面倒なこと考えなくたつて回つていくんだからさ。関崎が、『じゃあ、守らせよう』と言い出したのがすべての発端だぜ。結局俺は、学校の規則を緩めることに成功したけれど、関崎がわめかなければもつとすんなり、敵も作らないで話を持つていくことが可能だつたと思つんだ

「確かに。俺だつたら総田と同じこと、してたと思う

思わず口にしてしまい、僕はちつと舌を鳴らした。関崎乙彦の親友にあるまじき発言だ。

「やらなくてもいいことばかりやつてしまつて、自分を四面楚歌に追い込んでいく、どうしてああなるんだろうって俺は思うよ。あんなことばかり続けていたら、本当にやりたいことが見つかるまでに頭がオーバーヒートしてしまう。だろ。だから俺は

息を次いで、総田は振り返つた。火にあたりすぎて、紅潮した頬がまぬけだつた。民族系の人形顔していた。作りが濃い。

「いろんな出来事がこれから、生徒会では続くんじゃないかと思う。俺と関崎とだつたら、うまくいくわけないつてみんな、思つているだろうな。でも、できるだけ俺は、水鳥中学生徒会が盛り上がるようになつたといつ、本気だけは持つているよ。その本気をどこにぶちこむかっていうと、場所はほんのちょっとなんだ。本当に重要なつて思うことは、そのちょびつと。それを掴んだら、俺は関崎以上に、突つ走る」

総田の瞳にちらりと光つたものは、たぶんおとひっちゃんと同じものだろつ。僕にはなんとなくそんな気がした。よけいなことを言いたくなくて、僕は頷いた。

おとひっちゃんを僕の中で、冷静に分析するようになつたのは、このあたりからだと思つ。小さな頃から僕をかばってくれたおとひっちゃん。兄貴役と言われていたりした。でも、僕は総田と同じ色眼鏡をかけていることに、初めて気付いた。同じ度数だつた。総田と僕とは、同じめがねでおとひっちゃんを見つめている。楽しくて、話したくて、僕はおとひっちゃんのいない生徒会室にて通うようになつた。中学一年の冬からずっと。

九月。

夕闇がやたらと早く下りるようになり、下校時間も微妙に早くなったような気がする。でも居残りはまだ許される季節だった。学校祭が近づき、生徒会室もいろいろ忙しいらしい。おとひっちゃんも僕と一緒に帰ることも少なくなった。

もともとクラスが違うから、どういう状態のかはわからない。廊下ですれ違うと、僕が尋ねる間もなく、がむしゃらにまくし立てるのはやめてほしいと思う。今までのおとひっちゃんにはめったに見られないことだった。

僕はいつも頷き、とまどいつつ、それを聞いていた。

「テーマは、ちょっとありがちなんだだけさ。『校則』についてなんだ」

「すごい、ありがちだね。でもおとひっちゃんらしいけど」

「この前の服装問題と絡めてやろうとPsiで話しているんだ。あれ、まだ全校生徒の間に記憶として新しいだろ。結局僕が悪者になっちゃつたけれど、もつと話しあえば、僕が本当に何を言いたかったかがわかつてもらえると思うんだ」

「気持は、すぐわかるよ。おとひっちゃん」

「なぜ、先生たちは服装指導にいつもさく言うのか、もちろん理由はあると思うんだ。でも俺たちの方だつて言い分、あるはずだ。だから服装が乱れるんだし、それなりの理由があるからこそ、違反が減らないんだと思う。話し合いつていうか、行動に移すだけで全然、先生達に要求しない奴らに、思いつきり言いたいことを言つてもらうんだ。本音でだ」

「ふうん、そうなんだ」

僕はよく聞いているふりをして、頷いた。

「でもな、雅弘。結局は先生たち、『校則は守らなくてはいけない

もの』とこう結論に持つていきたいと思うんだ。それは俺が許さない。もつと本質につつこんでいかないとダメだと思うんだ。本当はさ、俺たち生徒会と先生たちとの間で、一回手ならしの討論会をやれたらいいんだけどなあ。今は三年生の実力テスト中だから、みんな手が離せないって断られたんだ。ちくしょつ、たぶんお流れだと思つ

先生たちからしたらたまたもんぢやないだらう。総田も含めた生徒会メンバーにつるされそうになるのは、おとひっちゃんだけだつたら、まだなんとかなるけれどもと、きつとひそかに思つてゐるに違ひない。先生達が恐れているのはたぶん、ひとりだけだ。

そのことに気付いていないおとひっちゃんはさうに続けた。

「だからせめて、生徒会側からの訴えかけでフォローしていきたいんだ。まずは、各クラスの学級委員を集めて、それぞれの意見を軽く言つてもらつて、クラスをそれぞれ盛り立てていってくれればいいんだけどなあ」

おとひっちゃん、明らかに間違つてるよ。僕はいえないけれど思つた。

学級委員を、重く見すぎているよ、と。

他の学校ではどうかわからないけれど、学級委員といつのは単に、授業前、授業後の号令をかけて、学級委員会に参加して、合唱コンクールでは男子の学級委員が指揮者になる、そのくらいのことしかない。僕のクラスにいる学級委員も、言ひちゃなんだけど『クラスをまとめよう』といつ意志は全く持つていらないだらう。おとひっちゃんだつて一年の前期は学級委員だつたのだから、その現状はよくわかつてゐるはずだ。いや、おとひっちゃんひとりだけは、かなり情熱賭けて走り回つていたのは知つてゐるけれども、あくまでも自分が例外だと思つていなうが、すごい。

「じゃあ、とりあえずまたな。三日田の行事が決まつたからまたなんだか忙しくつてさ。そうだ、雅弘、今度の中間試験用の予想問題、明日持つていくから、使えよな」

「ありがとう！ おとひっちゃん、助かるよー。」

実は、これが聞きたかっただけで、僕は話に付き合つたのだった。
おとひっちゃんの試験山掛け予想は、怖いくらいよく当たる。
ひそかにクラスの一部からは、貴重情報として大切に守られている。

おとひっちゃんはいつも黒いファイルに綴じ込んで、予想問題を持つてくれる。僕を含めた少数の友達に限り、という約束だ。
でも、僕とおとひっちゃんとの付き合いを知っている多くの友達は、試験になると必ず「コピーを申し入れてくれる。

当然、僕はこいつを見せてやることになる。おとひっちゃんには内緒で。

問題の第三回行事については無事決定した。

フォークダンスとファイヤーストームは、総田副会長と関崎副会長が討議した結果『円満』にまとまった。副会長一人が同意したことにより、無事、教師側の賛成も取り付けることができた。受諾理由としては、『第一部 校則をテーマにした座談会』をメインにするという条件が受け入れられたからだ。またフォークダンスもしよせん、オクラホマミキサー、マイムマイム、トロイカ程度の内容だつたら、体育の授業でもやつていいことだといつ、おおらかな意見が大多数を占めたからもある。火を用いる、ということだけは少々意見が分かれたらしいが、無事、もと山岳部の先生が責任を持つやつてくれると言け負つてくれて、そのところもまとまった。

学校側の最低限の規定と折り合わせ、できるだけ網の目をかいくぐつて派手にやることができるよう、生徒会では毎放課後の会議が繰り返された。いつも僕が生徒会室を見上げると、昼間なのに電気がこうこうとついている。きっと、『居残り届け』を出すかなにして、かなり遅くまでいるのだろう。

「なんだか相変わらずらしいよ

「なにが？」

「生徒会、おとひっちゃんと総田とのやりあいでさ」

「学級委員の友達が、ぼそつと教えてくれた。

「でも学級委員だつて、いろいろこれから大変なんだらつ」「大変じやないよ。やれつて言つているのはおとひっちゃんだけで、他の学級委員たちはつまらないつて顔してゐよ。俺とかだつたら、おとひっちゃんがすぐいい奴だつてわかつてゐからさ、少しさは手伝おうつて氣にもなるけれど、三年とか、一年とか、みんなまるつきり無視。かわいそうだよなあ。そうだ、雅弘、知つてゐるか」

僕は身を乗り出した。

「次期生徒会長、たぶんおとひっちゃんと総田との一騎打ちになつて言われてるけれど、総田の圧勝に終わるんじやないかつて」「どうしてだよ。おとひっちゃん、真面目だし、いい奴だつて」「おとひっちゃんのことを知つてゐるのは一年生だけだろ。でも、一年にとつてかつこいいつていうのは、総田のような日だつて先生にどんどん文句いつて歴史を作つてゐやつらの方だつて、思はれてるから。それにさ、三年にもおとひっちゃんにらまれてるだろ。例の服装検査。可哀想だよなあ。おとひっちゃん、絶対、あいつ、いい奴なんだつて思うんだけどなあ。お前わかるだろ、親友なんだからさ」

小学校一緒だつた連中なら、みなおとひっちゃんのことを嫌つたりしないと思う。もちろん好き嫌いはあるだろうが、僕はおとひっちゃんが僕を含めたクラスのみんなに對して、自分の正しいことを懸命に訴え、守つてきてくれたことを知つてゐる。僕が小学校の頃、なかなか仲間に入れなくて困つていたら、いつもおとひっちゃんが誘つてくれたし、手伝つてくれた。だれかれ問わず、困つている人がいたら、助けてやることが正しいと信じていた。

うちの親も

「関崎さん家のおとひっちゃんは、本当にいい子ね。頭もいいし、面倒見もいいし。雅弘も見習いなさいよ」

といひ。

もし、小学校の連中がみな、水鳥中学に持ち上がりつてきたのだったら、おとひっちゃんが生徒会長になるのは当然だと思つだひつ。

でも、運悪く総田の存在。

「でもなあ、あれはまずかつたよなあ。おとひっちゃん『服装問題』の一件で人気がつくり落としたよ」

「総田の方が目立つしな、人よんであいつのことを、『教授』と言つてるらしいぜ。総田派の連中は」

妙に頷ける。僕は思わず笑つてしまつた。

『教授』か。

「言いたいことはわかるような氣、するな

なにか気配がする。学級委員が僕を見て、軽く目配せをした。

「どうかしたんか」

「ほひ、おとひっちゃんだ」

僕は笑ひのをすぐにやめた。黙つて姿を探した。おとひっちゃんは大量のコピー用紙を抱えて、足早に通り過ぎていつた。僕達がいるのに気付かない様子だつた。当然だひつ。ずっと影に隠れていたのだから。

「あれなんだらひ。コピー大量にしていたみたいだね。学校祭で使うものかなあ」

「ああ、たぶんあれな。おとひっちゃんが座談会の前に、呼びかけのビラを配るつて話していだる。それだよきっと。全校生徒に配つて、学級委員が仕切つて、意見をまとめて、生徒会室に持つてくれるようだつてさ」

「うちのクラスもやるのかなあ」

「一応な。でも、みんなの考えてこる」となんてたかがしれてるだろ。どうせ、制服反対とかそんな話で済むだけだしな。おとひっちゃんのほじがつている話なんて出やしないよ」

おとひっちゃん、どんなこと書いているのかなあ。

僕は、知りたくて尋ねた。

「おとひつちゃんつてどうこと、書いているの」

「たぶん、『今、水鳥生が動かない』と、何も代わらない。初めて自分たちの手で動かすチャンスを生かさないでどうする。言いたいことをこの機会にすべて吐き出してしまえ!』とか、そんな感じだったと思つ。なんというかさ、おとひつちゃんつて、文章たくさん書くよな」

「うん、それはいえてる」

「それも細かい字でさあ。もつといろいろ書いているはずなんだけどさ、俺は読む気しなかったね」

「言いたいことは大体わかる。これがもし、テスト前の山掛けファイルだつたら、話は別だけど」

一人で頷きあつた。おとひつちゃんは決して字がつま一方じやないから、読解するのは骨なのだ。

「なんというか、情熱のみが空回りしてんのだよなあ」「道端にすぐ、ポイだらうなあ」

さつき通つたおとひつちゃんの髪の毛はぼさぼさに乱れていた。風が強いせいだらう。台風が近づいていると聞いた。学校祭にはぶつからないから大丈夫だと行つていたけれど。もつとも総田の方が何倍も好天を祈つているに違ひない。もし、雨が振つたら即刻、フオーラダンスは中止なのだから。

しばらく学級委員としゃべつた後、僕はその脚で生徒会室に向かつた。

おとひつちゃんを迎えていくつもりだつた。無理に一緒に帰ることはないけれども、一応は声だけでも掛けでおこうと思つた。南京錠はちゃんと外れていて、おとひつちゃんの理想どおり、『誰でも入れる』状態になつていた。あまり声が聞こえない。会議なんてやつてなければいい。

「『めん、おとひつちゃん、いないかな』

半分、戸を開けてのぞくと、会計の女子一人と、総田がゆつたり

と缶ジュークスを飲んでいた。模造紙とノートが散らばっている。長い机にポスター・カラーを使ってなにやら書いている。学校祭用の垂れ幕かなにかに使うのだろうか。まだ字は読解できなかつた。窓を開けたままだつた。風が吹き抜けている。模造紙の上にはさみや筆箱を置いて、飛ばされないようにしている。ひゅるひゅる「ヒヒヒヒ、木々がうなつている。

僕の顔を見て、会計の一人が答えた。

「関崎副会長だつたら、コピー持つて別の教室に行つたみたいよ。

たぶん図書準備室じやないかな」

「あそこだつたら、ひとりでのんびり整理整頓できるもんね」

「ふうん」

僕は時計を見た。それならばかなり時間がかかるだろうから、先に帰ろうか。

もつたひないなという氣も、しないではない。

総田にわざと目を合わせた。

「佐川、半分飲まねえ？」

「いいよ、総田と間接キスなんてしたくないよ
きつかけがほしかつた。僕は机を大回りして、総田の方に向かつた。

「ひつちで関崎が戻つてくるまで待つてるか？」

「いや、すぐに帰る。でも、大変そうだね。結局、パートを二つに分けてやることになつたんだっけ」

「そう。俺はフォークダンス選任で、関崎が座談会。お互ひ、手を出さないとこには手を出さないという、『内部不干渉』という原則を決めたわけさ。だから、俺たちはコピーの手伝いしないでいるつてわけ」

「同じ生徒会なのになあ」

総田は軽く頷くと、椅子に坐るようパイプ椅子を指差した。

総田からすれば、僕はおとひつちゃんの親友だ。いわば敵の腹心

だ。

でも全く態度を変えずに、楽しげに接してくれるのはなぜだらう。心密かに僕と総田が、意を同じくしていることを知っているのかもしれない。それとも僕を手なづけて何か、別のことを考えている策士なのだらうか。僕にいい感情を持たせて、利用しようとしているとか。

僕はきっと、ひつかりそうになつてこるのである。

こうやつて総田としゃべることが、僕はちつともこやぢやない。いやと思わせないようになると、操る力が、総田にはある。おとひつちゃんにはないけれど。

「ところでさ、総田。フォークダンスの準備はうまくいっているの」

「もちろん、座談会よりは確実にな」

総田は会計の女子ふたりに、サインを送つてみせた。

なんとなくだが、この二人もおとひつちゃんとは相性が合わないような気がした。

特に、川上さんという女子には、ちょっと気にかかるところがつたからだ。

おとひつちゃんがよく

「やたら、総田と川上だけで一人の世界を作つてしまつて、会議にならぬことが多い」

と言つて、いたのを思い出したからだつた。

「川上さん、あのさ。最近おとひつちゃん、生徒会はどういう感じなんだらう。あまりうまく行つてないような気、するんだけど」

即座に、溜まつた不満が流れってきた。僕に大きく頷いて見せ、もう一人の女子と目を合わせ、

「関崎副会長つて、努力の割には実績が伴わない人なのよね

「どこか抜けてるのよ。あの人」

「言つちゃなんだけど、佐川くん、関崎くんの親友やつてて、ものすごく疲れない?」

さすがに、本音をいうわけにはいかない。

「つづん、慣れてるから」

「ああいう性格って、なれるもの？」

川上さんは、ひだスカートのポケットから単語カードを取り出した。

来週、英単語の小テストがあるのを聞いていた。

「あ、それって、来週やる英語の小テストだろ。俺ぜんぜん、手をつけてないや」

「だつて、しうがないぢやない。副会長が下校時刻ぎりぎりまで生徒会室に缶詰にして、勉強する暇ないんだもの。それにさ、ひどいぢやない？ ちょっと余間ができたから、暗記カードをめくつていたのよ。ほんの一分くらいいよ。そうしたら頭からきのこ雲立てて怒鳴るのよ。信じられる？ 『今は真剣に学校祭のことを考える時間だろ！ 自分のことにまづかり集中するな！』 つてね おとひつちやんならば、やりかねない。

僕は頷いて話を促した。

「みんなが働いているのに、ひとりだけ勝手な」としていいと思つていいのか！つて。冗談じやないわよね。そりや、関崎くんはいいわよ。学年トップだもんね。黙ついても満点取れるでしょうよ。でも、私がテストであほな点取つたら、一学期の評定どうなるつていうのよ。そろそろ内申点が関係していく時期だからね。生徒会の仕事で、勉強する暇ありませんでしたって言い訳、通用するとと思う？」

「もしかして、この前の地理のテストも、それで苦労してたの？」
確かに川上さんは、地理の補修課題を出されてしまつた一人の女子だつたはずだ。

この前、職員室で説教されていたのを覚えていた。

「やだなあ、佐川くん、見てたんだあ」

「ごめん、悪意はないんだ」

「いいよ、別に。でもさ、あたりまえよね。最近の議題や仕事つて、

もつと後からやつてもかまないことばかりなのよ。それをや、どうから見つけてくるもんだか、次から次へと持り出してきて、大きさにまな板に載せるのよ。なんで、今の段階で他のクラスに降ろす必要あるのかなあ。出されたら、ほっとくわけいかないでしょ。ああ、私の一学期の点、学校に貢献した分で、下駄はかせてくれないかなあ。ねえ、教授

「教授」か。

妙にそこの響きだけ甘つたかった。

おとひっちゃんが切れる原因のひとつが、なんとなくわかつた。

「教授」という響きにはしたたかさがこもつている。いえてる。確かに総田は電磁頭脳を持つていて。たとえるならば。

摂政と天皇。

おとひっちゃんを生徒会の象徴としておき、影の実力者として総田を置く。

おとひっちゃんは、孤立無縁だ。

誰からも、信頼を得られていないのだから。すべては総田教授の手のうちに握られている。

「鬼のいぬ間に洗濯してろ！」

総田はきつい調子で言い捨てた。すねるよつこに上さんは口を尖らせた。それを無視して、総田は僕の耳もとこやこやこいた。

「なんか、佐川って、似てるよな

「誰に？」

「俺とや

「顔が？」

「物の考え方がさ」

女子に聞こえないよつ、時折川上さんをこらみつけながら、

「この前関崎と俺がやりあつたのを見てただろ。佐川、あの時俺になかに言い足そだつたよな

「そだつたつけ

「ちらつと俺の顔を見てさ、お前ばかじやねえの、つて顔してさ

「まさか、そんなことしないよ」

「いや、いいんだ。怒ってなんかないもんな。おかげで俺も間違いを正すことができたしさ」

帰り際のわけ有利笑顔はそのためだつたらしい。

「どこしぐじつたかが一発でわかつた。佐川、要するに、関崎の高く折れそうなプライドを、もつとうまくつづいてやれば、うまく納まると思っていたんだろ」

どうしてそんなことまで知つているんだろう。気づかれたのか。

僕は舌打ちした。

「おとひっちゃん、素直だから」

「ほんとだよな」

まさか女子の手を握れないなんて、恥ずかしい理由で反対しているわけじゃないんだろ？ もつと論理だつた説明をしてほしいよな。お前、学年トップだらう。首席の関崎くんだたら、もつとかみくだいて説明してくれるよな。

さつそく総田は毎日おとひっちゃんを問い合わせたらしい。おとひっちゃん殺すには刃物はいらぬ。

僕がもし総田だつたら、たぶんそうしていた。

意識しないで僕は頷いていた。

「つてわけさ。ほんとにあいつ、死ぬほど純情だよな

「言いたいことはわかるよ」

「けどや、ああいう奴にほれ込まれた女子つて、疲れるだろうなあ

総田は田線をそらせてぼそつとつぶやいた。続けた。

「それにも、な、佐川、やっぱりお前親友として、関崎副会長の『本命』が誰だか聞いているんじゃないのかな

そこまでかぎだそうとするのだらうか。

僕がそこまでしたたかに振舞うと思っていたのだらうか。

思わずむかつときて僕は黙つた。話を逸らすため、頭の中を軽く探つた。

聞いてみたいことは僕にだって、ちゃんとあるのだから。
きっかけのなかつた、あることを。

「あのさ、総田いいかなあ。俺も聞きたいことあつたんだけじ」

「なんだよ、話逸らそうとしてどうしたんだよ」

「次期生徒会長に出馬するつもりあるんか?」

「総田の視線がはつと僕の方に留まつた。

「生徒会長だと?」

「そう、学校祭が終わつたら、そろそろ任期切れだろつ。去年は生徒会長がいないままだつたけれど、今年はそつもいかなとい思うんだ。おとひっちゃんも、総田も、いるんだしさ」

僕の口調に何かを感じたのかもしれない。総田は注意深く言葉を継いだ。

「どうしたんだよ。関崎も当然立候補、するだらうじゃ。同期撃ちになるのは田に見えてるだろ。俺なんかが所詮、太刀打ちできませんつて」

「俺にはさう見えないよ。自信、ありそつだもん」

僕はゆつくり続けた。

「おとひっちゃんが生徒会長に立候補するつていう保証、どうあらる?」

「おこ、佐川、何が言いたい?」

「言いたいことなんてないけれど、総田も立候補するつもつだつたらちゃんとそう考えておいたほうがいいんじやないかつて、思つただけだよ。本当に、なんとなくつて感じだけだよ」

じつと僕の方を見つめたまま、総田はもつと近くに来るよつ、手招きした。これ以上男子同士でくつついてどうするつていうんだろう。物好きな奴だ。しかたないから僕も椅子をくつつけた。

「佐川、悪いがもつと分かりやすく言つてくれ。俺、お前が考えていることがわかるようで、わからない」

「わかつているだろ。俺はおとひっちゃんの親友だから。あいつに不利なことをこれ以上、言えないよ」

親友といつゝ一言に、僕は力をこめてさせやった。

自分でも何を言いたいのかわかつていていたわけではなかつた。おとひつちやんが来期、生徒会から離れようと思つていてることを伝えるべきではないと思つていていた。おとひつちやんの意志がはつきりしているのだったら決して口にしてはいけないことだと分かつていて。そうだ、頭の中はちやんとおとひつちやんの味方として回転しているのである。

今言つたことはすべて、僕がコントロールできないう葉として飛び出してきてしまつた。総田に言おうとして思つてどまつたのは僕が『関崎乙彦の親友』だから。もしあとひつちやんとただの友だちだつたとしたら、僕はためらひことなく総田に告げただろう。おとひつちやんは、来期生徒会長に出馬する『や』、わざわざなことよ。となると総田、あんたが次期生徒会長だよ。何言いたいかなんて、わからぬけれど、決まりだよな。

総田に捕まる前に僕はさつさと帰ろうとした。立ち上がり挨拶して戸を開けたとたんぶつかりそうになつた。いがぐり頭の、あまり見かけない奴だつた。一年生ではなさうだ。

僕を見て反射的に頭を下げている。たぶん一年生だひつ。「あの、関崎先輩、いますか？」

おとひっちゃんの関係だらうか。胸ポケットのバッヂを見ると、『学年』の文字が光っていた。一年学級委員の誰かだひつ。僕は首を振つた。

「いや、いないよ。総田副会長ならいるよ」
ふりむいて指を指した。総田もめんどくさそうに頷いた。
「関崎ならしばらくもどつてこな」と思つた。その辺で待つてゐるなんの用だ？」

総田は退屈そうにしている川上さんに田で会図し、お茶を入れさせた。ちゃんとポットが用意されている。

「その辺に座つててよ。お茶入れてあげるから。佐川くんも急ぎじやないんじよ。だつたら飲んでいきなよ」

「俺の分も当然入れてくれるよな」

「教授が自分で入れればいいのにね」

からかい調子の会話が続いた。

やはりこの二人には何かがあるな。

そう思つたものの口には出さなかつた。おとひっちゃんも気付いていないことはないとと思うのだが。行きなれている僕ですら居心地の悪さを感じるのだから、一年生学級委員の彼はさらにそつだひつ。僕は椅子を引いて坐るよううながした。

「副会長に用事があつたんだろ」

熱いお茶をすすりながら僕は訊ねた。

「はい、学校祭の時に使う、座談会の意見書を出すよつて書かれてて」

「ふうん、おとひつちやんにか

聞きなれない言葉だつたのだろう。彼はうなずいて首をかしげた。

「他のクラスはあまり出してないみたいだけど、どうなんだろう」

「クラスの人はあまり乗り気じやないけれど、でも関崎先輩が一生懸命だから、つい」

川上さんはふうん、と頷いて総田と田配せした。

「まじめよねえ。別名、ものすき、つていうのかな」

おとひつちやんが全学年のクラスを回つて懸命に説明していることは聞いていたけれど、十中八九無視だとたかをくくつていた。

「これが初めての返事つてことかしらん」

「まあな、ちよつとフェイントつてとこだな」

奥でふうふうとお茶に息を吹きかけている。総田の笑い声が少しだけ苦味ばしっていた。

「まあ、一人くらいならな。物好きもいるわな。おい、それでお前は何組だ？」

「一年二組です」

延ばしかけた手をすぐ膝に置き、握り締め、一年学級委員の彼は答えた。

かたまつていたと言つてよいだらう。

「クラスの反応は、どんな具合だつた？」

丸ぶちめがねの一年評議委員は、総田のさばけた口調におびえている様子だつた。返事が少しだが、こわばつていた。めがねをはずせばなんとなく、おとひつちやんと重なる雰囲気を保つていた。

クラスで相当、浮いているよつな気がするな。

真面目人間でおとひつちやんみたくさ。

「あの、つまり、その、まだあまりわからないのでなにも」

「そう意味のない言い方するなよ。はつきり言え」

なだめるように川上さんが茶々を入れた。

「取扱いの仕事でもここに手仕事でしきり

「僕の説明が下手だったからかもしれないんで、はっきり言えない

んで
すか

「なにそり自分で責めるんだよ。お前のせいじやないだろ。それとも、関崎副会長になにか言われたのか？」

「いえ、そんな、全く、なくつて」

会話で金の意味をなすは、一時の

やりたくなじうだった。僕もあまり上手に説明できる方じゃないけれど、じつやつて話しているといらいろしてやうだった。よく

きっとおとひのちやんが帰つてきたら、感激するだいうな。

せんせん総田を始めとする連中にばかにされていいるんだから、

處ぐらうして思ひした。で、い、じ、や、な、い、か。

うはあ。

「あの女、聞いていいかな

僕は割り込んだ。

なんであえておどひにちやん訪ねてこにきたの

たから」「

ははあ。
大体話が読めた。

おどりつちゃんは小学校の頃も陸上に熱中していた。僕と同じような感じで、後輩たちの面倒を見ていたにちがいない。ある意味、僕と彼とは、同じ立場だつたりもするのだろう。好感を持った。

「関崎先輩は、ひたむきな人でしたから」

強く共感し僕は頷いた。今度は総田が割り込んだ。

「確かに、関崎はある意味すごい奴だよな。それにしてもさ、わり

いな、関崎副会長がいなくてさ。とりあえず『意見書』とやうりを置いていてくれよ。俺も一応、副会長だしさ」

「ひしちゃいられないとも思ったのだらう。彼はがむじそとかばんをひらいて、レポート用紙の束を取り出した。総田、そして僕に頭を下げ、立ち去りうとした。表情にほつとしたものが見受けられた。

背を向けたとたん、総田の声がはたりと変わった。

「ちよいと待つた。俺が田を通すまで動くな」

絶対服従のニコアンスがこもっていた。川上さんを通してレポート用紙を受け取り、ぱらつとめくつた。じつと用紙の一端に視線を留めていた。

「ええと、一年一組の生徒は……ふうんうう。なかなかやる気まんまんじやねえか。そんなに燃えてるのか」

「はい、まあ」

「何度も言つけどな、もつとせつきりしり」

「はい」

「本当なんだな。ならば聞くが、これを読む限りでは、校則に対する考え方があなたさん出てきて、收拾がつかないらしいとあるが、どんな考え方全部口で言つてみる」

「……ちょっとまとまつていないんで」

「

切り込まれ、あわれない一年学級委員はうなだれた。

「言えないわけがないだらう。お前の報告書にはこう書いてあるんだ。『校則についての座談会をやるとクラスに伝えたら、いっぽい意見が出て、盛り上がりました。きっと学校祭も盛り上がると思います』ってさ。どんな盛り上がりがあつて、生徒はどんなことを求めていたのか。一言も具体例が記入されていないじやねえか。これじゃあ、いくら一年一組が熱狂したとしても、俺たち生徒会には伝わらないぜ。もつとも、関崎には以心伝心で伝わるのかもしれねえけどな」

いやみがこもつてゐる。総田は茶碗の熱いお茶を一口すすり、立

ち上がると大股に近づいてきた。接近して一年生をにらみつけた。

「どうだ、もう一回語つてみる」

「……また、今度、来た時、それ、持つてきます」

「単に無駄だ」

言い切つてちらりと川上さんく、側によるよつ合図した。僕にもだ。僕は立ち上がつておずおずと総田の隣に立つた。一年の彼だけを戸口に立たせた。

「お前もテスト近いんだろ。いいわ。俺がここで書き直してやるよ。つまり一年一組の連中は、校則のことを座談会でやると聞いて、騒いだと。それは本当なんだな」

「……はい」

「制服がやだとか、先生どもがうるさいとか、勝手に持ち物検査するとか、そういう不満が出たんだな」

「……そんのもありました」

「ちゃんとわかっているじゃねえかよ。他に、もっと笑える意見はなかつたのか」

一年生は黙りこみ、うなだれた。

笑える意見つたつて、何を言えばいいのかきっとわからないのだろつ。

なんだか痛々しくて、助け舟を出してやりたかった。

総田には悪いが勝手に僕の判断で、つぶやいた。

「たとえばさ、男女交際とかうるさいだろ。一年の先生つてさ。そういうことに対する不満つていうのは、出なかつた? やうにうつようなことだよ。分かりやすいネタつて」

僕の方をきよとんとした目で見つめながら、彼の頬はすうつと赤く染まつていつた。気持ちが分かる。こいつは絶対におとひつちゃんの後輩なんだ、そう思つとどつしても、何かを言つてやりたくならなかつた。総田はしばらく僕を横田で見ていたが、続けて言つた。

「佐川の言つとおり、女のことで不満なんかないのかよ。好きな奴

なんていないのか？H口本回収されたことなんてなかつたのか？

「……あの、それもありました」

蛇の田でにらまれた蛙のよつ。

彼はうつむいた。

今にも逃げ出しそうな田だつた。

川上さんはふつと髪をかきあげ、しばしの吐息のあと、冷たい口調で。

「一年つて、結局いろいろなことつたつて、本音はそんなレベルのことしか話していなかつたんじやないの。あせつたじやない。ばかね」

せせら笑いしよつとしたが、瞬間、総田ににらまれ黙つた。

「さつわと向ひづ言つてろ。やかましい」

「なによ、だつてあんただつて」

「なれなれしくするな」

やつぱり何かがある。そう邪推したのは僕だけじやないと思つたい。

総田はゆつくつと頷くと、一年生に向けてやわらかな笑顔を向けてた。

さつきまで激しく詰め寄つていた蛇のまなざしとは一転していた。ぽんぽんと肩を叩き緊張をほぐしてやるかのように。

「よし、わかつた。よくここまで言つたな。今日は齧かして悪かつた。今度は俺が詳しく述べ、報告書の書き方を説明してやる。おい、びびるなよ」

そつは言つてもさつきの今だ。簡単に打ち解けられるわけがない。

凍りつき、動搖寸前の一年学級委員は、

「ありがと、『じやいました！』

でかい声で恐怖を隠すが」とく、一礼した。

かばんに恐る恐る手を伸ばし背を向けて廊下に走り出た。階段を駆け下りる足音、がいきなり乱れた。足を踏み外したらしい地響きが伝わつた。

「総田。お前って、魔術師だ。」

たつた十分たらずの間に、錯乱をせてしまつた。

僕は冷えたお茶を飲み干した。

「あの一年、また来るかなあ」

もう一杯お茶を川上さんに注いでもらうと、総田は刀をちらりと見た後、つぶやいた。

「あれだけびがらせておいて、よく言うわよ」

「しつかし、関崎の後輩か。面白ことになつてきたよな」

僕の方を見て、今度は何か聞き足そつな顔をした。しかたないから僕も答えた。

「いや、俺も知らなかつたよ。陸上部のことはほとんど聞いたことなかつたから。でも、おとひっちゃんになつていてるつて感じは、確かにしたなあ」

「だろだろ。佐川、やつぱりあいつは、関崎の後輩つて感じだよな」「根性がありそなところが、なんというかさあ」

心とは裏腹な讃め言葉を使つてゐる。僕と総田が学級委員の一年生についてどう感じているかは、たぶん同じなんぢやないだろうか。気付かれたのか、川上さんが僕に聞こえるか聞こえないかの声でさやひた。

「教授も佐川くんも、しつかり『副会長』を持ち上げちゃつてさ。

抜け目ないんだから」

「俺は持ち上げてなんかないよ。本当のことと言つただけだよ」「そうよね、佐川くんは一応、関崎副会長と親友だもんね」「いやみつたらしく聞こえたから言い返したかつた。でも、できなかつた。

「まあな。良くも悪くも、同じ水鳥生徒会の飯を食つてゐるんだ。個人感情とは別に、奴の能力そのものは認めているさ」

「今までたつても成績万年一一番を脱すことができないからだもんね」

「黙れ。人が気にしていることを。無神経女め」

気にしているような口調には全く聞こえなかつた。それは川上さんも同じだらう。無神経女と言われよつか平氣な顔して鼻歌を歌つていた。

「もう、ライバルを超えて、相手にしてないつて感じよね」

「ばあか、自分で考える。俺は答えるぞ」

やつぱり総田と川上さんとの間には、僕が立ち入れない、理解しがたい空氣が流れている。そろそろおいたましよう。

「じゃあ、今度こそ帰るから。また来るよ。おとひつりやんこようしく

僕が腰を浮かせたとたん、総田がすゞい勢いで僕の方に近づいてきた。川上さんもびつくりした様子だった。

「悪い、今ここでは話せないことがあるんだ。今晚、お前の家に電話しても大丈夫か」

僕にしか聞こえないように。鼻と鼻を付き合わせたような感じだ。断るなんてできっこない。

「別にいいけど。でもどうしたんだよ。総田。俺はそつちの趣味ないからね」

「関崎から佐川を奪おうなんてとんでもないホモネタを考えたわけじゃないよ」

総田は僕の電話番号を、手元にあつたわらばんしに書き取つた。

「佐川の家は、長電話、平氣か?」

「どうだらう。親は立ち聞きしてゐるけど、でも聞かれて悪いことなんてないから」

「ならば、今晚の八時。ちょうどにかけるから、スタンバイしてくれ。絶対だ。頼むぞ」

目が飛び出して壊れそつだつた。にじむと見つめるの中間点。僕は思わず頷いていた。今まで見たことのない総田の瞳には、何か決意をしたようなものが見え隠れしている。僕にはそれがなんなのか、

見当がつかなかつた。

でも、はつきりしているのは。

総田は、なにか、たくらんでいるな。といつゝこと。

そして、おとひつちゃんには絶対に、言えなことであるのうといふこと。

それならそれでOKだ。僕もよつぱどのことがない限り、いう気
なんてない。

僕は頷いて、知らん顔したまま生徒会室を出た。ちょうど夕暮れ
間際のきつい太陽が廊下のガラス戸にびんびんとぶつかっていた。
目が痛くなりそうだった。この時間をずらしたらたぶん、外は闇に
なる。僕は急ぎばやに生徒玄関へ向かった。できればおとひつちゃ
んが帰つてこないうか。

青潟駅から歩いて一分程度のところに、『佐川書店』はある。立地条件がいいとか、学校帰りの客が多いとか、いろいろ理由はあるだろうけれどもそれなりに繁盛している。父と母が三人の従業員を雇つて、年中無休で働いているのを僕はずつと見てきていた。たまには雑誌の付録の輪ゴムかけや、店の掃除を手伝うこともある。もつとも多いのが、自転車で定期購読雑誌を配達することもある。かなり遠くから注文をするお客さんも多いので、放課後毎日配達に出かける。問題は、季節問わず自転車を使うということだ。かなり荷物をくくりつけてといつのはなかなかハードだ。

両親がいうには、

「小遣いに色つけてやつてるんだから」とのことだ。

確かに、僕がもう小遣いの額はかなり多いらしい。

おとひっちゃんに前、話したところ

「絶対にほかの奴には、雅弘のもらつてる額のことなんていうなよ。かなりどころじやない。高校生だってそんなにもらつている奴いないんだからな」と言われたものだつた。

「おとひっちゃんはどのくらいもらつてるの?」

「雅弘の半分くらいだけだ。でもそんなに使うわけじゃないから、ほとんど貯金しているんだ。高校進学の時、金かかると思うからな。おとひっちゃん、やっぱり私立の高校行くつもりなんだ。」

僕は思つたけれども黙つていた。

いつものように玄関から入り、配達がないことを確認してから自分の部屋にこもつた。返品される寸前の本を五冊ほど部屋に持つてきて、大急ぎで読むのが口課だった。たいていは男子中学生をターゲットとした雑誌だつた。一応、人並みに知識は持つてゐる。男女関係の話とか、今はやりのファッションとか、ゲームネタとか。た

ぶん僕は、どの連中ともうまく話をあわせていくれる才能があるのでと思う。おとひっちゃんのようにかたくな過ぎるところもないし、かといって眞面目な人間を馬鹿にしたいとも思わない。

「佐川くんって、妙にバランスが取れているよね」

「とは、六年生の時、担任の先生に言われた言葉だった。

「甘ったれでいるように見えて、実はしつかりしているし、頼つているようにみえて、実は全部自分で片付けているんだよね」

すると親は必ず言い返す。むかつとくるけれど黙っていた。

「いいえ、うちの雅弘はね、関崎さんちのおとひっちゃんにみんな、めんどくみでもらっているんですよ。ほとんどお兄ちゃんみたいな感じでしううかね。いや、どちらかいうと親、に近いかしら」

何か言いたげに担任の先生は笑いをこらえていた。どういう意味なのかは見当がつかず、僕もただへらへらしていたものだった。

ひととおり口を通すと、だいたい学校で話題にすることの大まかなことは頭に入った。僕の日課だった。無理して浮かないようにしようとしているのではない。なんとなく、誰とでも楽なきもちでしゃべることができるほうが、気持ちいいだけだ。

よく『人に合わせるために』『情報を仕入れて』『顔色をうかがいながら』『人と付き合つ』という奴がいるらしいけれど、それも僕には無縁な感覚だ。普通に話していれば、自然と知っている話が出てくる。それをなんとなく、おもしろいと思いつつ聞いてみると、本当にしまつてしまう。だからいつも、僕にはどのグループにも居場所がある。おとひっちゃんとクラスが別になり最初の内はみな心配してくれたけれども、とんでもない。全く問題なしなのだ。

人気テレビアニメ『砂のマレイ2』のストーリー展開も、最近アイドル歌手の『鈴蘭優』に恋愛沙汰が起こった噂なども、最近流行の、トラック風ネクタイのおしゃれなども、僕にはみな同じに並んでいた。もつというなら、男子と女子の差がどうのこうのという保健体育ネタも、それなりには聞いて知っていた。

話に聞く分にはおもしろいからいいじゃないか。

別におとひつちゃんみたく、意識しなくてもいいじゃないか。

どうしておとひつちゃん、ああも女子を見て、変な態度をとるようになつたんだら。

なによりも変なのは、どうしておとひつちゃん、わざわざのことを好きなんだろう。

『わつきたん』と、呼びなれた名前が浮かんだとたんめまいがした。

俺のせいだつたら、いいんだけどなあ。
しゃれにならないよ、もしほんとだつたら。

勉強している振りして数学の教科書を開いていた。

総田からの電話はまだこなかつた。夕飯はすでに食べ終わり、僕はいつものように部屋の中でテレビをつけっぱなしにしていた。このテレビが古いのか、画像が全然まともに入らないので、ほとんどラジオ状態にしていた。別に見たいものがあつたわけではないから、なんとなく時代劇が入っているのをそのままにしていた。

試験勉強用に借りたおとひつちゃんの黒いファイル。

書いてあるとおりの問題を完璧に覚えて試験当日に備えられたら、たぶん誰もがおとひつちゃんと同じ成績になるだらうと思う。それができないのは、やつぱりおとひつちゃんの頭がすごいからだらう。おとひつちゃんの部屋は僕と違つて、三人兄弟で分け合つている。八畳間を三等分して、それぞれカーテンで区切つている。ほとんど何をしているかは丸聞こえだといつていた。

その点僕は恵まれている。

一人っ子だから。

六畳間の和室だけれども、ちゃんとひとつで占領できるし、テレビも見られる。母さんはいつも

「雅弘は一人っ子だから淋しくて悪いねえ」

と言つけれども、そんなことはない。少なくともおとひつちゃんみ

たく、お兄さんや弟の面倒を見なくてはならないなんて、ことないから。

おとひつちやんだって、隠したいものを持つていなければいけないだらうじ。僕よりは秘密をたくさん持つていいだらうと思つ。学校では絶対にいえない秘密を、知られていないと思ひ込みながら、隠している。

電話が鳴つた。八時にはまだなつていなつて、元のうら。

おおざつぱなかけかたはやつぱり奴だらう。

大急ぎで取ろうと階段を下りた。しかし一歩遅かつた。母さんが受話器を取つて

「はい、佐川書店でござります」

と挨拶していた。最初は店のお客さん向けの口調だけれど、だんだん「あら、こんにちは。雅弘ですか？ ちょっと待つてくださいね！」

とぐだけてくる。相手がおとひつちやんだと、

「あら、おとひつちやんこんにちは。雅弘呼びますね」

になるのだが。

「あら、雅弘、もう降りてきてたの。総田くんから電話

「わかつてる」

ひつたくり、母さんを背にすぐ答えた。

「どうも、佐川です」

「どうして最初に出なかつたんだよー。俺苦手なんだよ。人の家にかけるのつて」

妙に緊張してしまつたらしくいきなりなじられた。

「そう、思わないけれど。それより総田、どうした？」

「側に誰かいのか？ お前の母さんとか？」

後ろを見ると、すでに母さんは店に下りていつてしまつた。そろそろ締める時間だからだらう。よかつた。たまにじいと様子をうかがうことがなきにしもあらずだが、今日のこじろは問題ない。

「いないよ。隠さなくっちゃなんないことなのかなあ」「当たり前だ。お前は、関崎の親友なんだろ」

「そりだよ、でも、それを承知でなぜかけてくるのかなあ」

何度か繰り返された言葉、『関崎の親友』

居心地が悪くなり、まるで僕がこれから悪いことをするような気持ちになってしまふ。大げさに言えば裏切りをしようとしているようだ。

現にこうやって、総田といつそり電話をしていふことが、そのも

のだ。

「そうでない、と言いたくて僕は総田に問い合わせた。

「俺に何か聞きたいことがあるならいいけれど、黙っている権利だつてあるんだから、それはわかつてているだろ。総田だつて」

「でも、関崎には絶対言わないでくれと頼んだら、どうだ。それもしゃべるつもりか」

ちょっとだけ考えた。

もし仮に、おとひっちゃんに對してなにかましいことを頼まれたりしたら。

でもそんなことはあり得ない。

だつて俺はそんなことがあつたつて、無視できるんだから。

「大丈夫だよ、総田。今話すことは、絶対におとひっちゃんに話さない。そのかわり、総田の頼みも聞けない可能性があるつてこと、あるけどさ」

約束した。

総田の声は自然にひそやかになつた。店の方からレジ締めのけたましい音が鳴り響いている。もっと大きい声で聞きたかった。

「あんなあ、佐川。お前、関崎から座談会についてどのくらい聞いている?」

「聞いているつて、たいしたことないよ。一応は先生と話もついて、各クラスの学級委員から意見を吸い上げようとしているつてこと。

おとひつちやん、教室をたずねては一生懸命、説明しているつて
「ふう、『じくろう』なこつた」

「でも、それくらいは知つていいだろ？ セッキだつて、プリント
を『ペペー』したの持つて、おとひつちやん駆けずり回つていたの見た
し。総田には悪いけど、あいつ、よくやつてると思つた」

「認める。それはよく、わかる。だがな佐川
ゆうくつと、声をひそめて総田は言つた。

「ほどの座談会設定は、俺がやつたつてこと、知らないうつて

「え？ 今、何て言つた？」

「信じられないだつ」

「僕は嘘だ、とつぶやきたいのをじうれた。

「だつて、総田は今回、座談会には一切関わらないつて言つて
だろ」

「誰がそんなこと言つた、関崎がか？」

「おとひつちやんはそんなこと、言つてないけれど。でも、一分
割にしてやるつて話だつただろ。総田はフォークダンスでおとひつ
ちゃんは座談会。きれいに分かれてやるから、手を出さないつて
電話の向こうから破裂したかのように笑いこける声が聞こえた。
レジの音が小さく聞こえた。

「あいつは自分で考えたつもりでいるんだと思つたけど。パネルディ
スカッショーン方式でやろうとか、代表者を各クラス一員ずつ出す
とか、それを持ち出したのは全部俺だ。嘘だと思うなら、今度萩野
先生に聞いてみろよ。俺は萩野先生と関崎と三人で話し合つた時、
冗談っぽくしゃべつたんだ。どうせ誰も聞いていないだろうと思つ
たからな。あいつ、黙つて聞いていて、それでちやつかり自分の手
柄にしようとしているんだぜ。全く、あきれるよな」

「あ……」

声が出ない。僕は首を振つた。絶対に総田から見えないのが救
いだつた。

「おとひつちやん、お前に全然、断りもしないで、そうしたんか」

「そつだ。最初は俺も啞然として言ひ返そうと思つたが。まさか俺が思いついたものを横取りされるとは思わなかつたしな。汚ねえ奴だと思つたが。でも、冷静に考えてみて、どうも向ひには悪意が全くないんじやねえかつて、行き着いてしまつてさ。これは俺が大人になるしかないと、結論に達したつてわけ」

僕が答えられないでいるのに気付いているのだろうか。総田はさら繼續けた。

「関崎の考へることつて言つたら、生徒と先生とを向かい合わせることだけなんだぜ。それでまともに話し合いが成り立つわけないだろ。好き勝手なこといいまくつて、誰も交通整理できないで、それでおしまいや。それが先生に言つてくるめられて、はああと頷いて、それで一件落着。たぶん、関崎の考へていることは繋がらないままに終わつてしまつ。もしくは、生徒会側でその悲惨なありさまを治めることができなくて、先生の力を借りざるえなくなる。冗談じやねえよ」

頭の中に響く声が、急にあくつと差し込んだよつだつた。

店の方から、レジ締めをする声が聞こえる。

「売上は本日は……、うち文房具……、雑誌……、コマーシク……」

母さんが、保存専用のレシートロールを手巻きしなおして、読み上げている最中だ。

総田の置み掛けるような声に混じつて、めまいがした。

「言いたいことはわかるよ。総田。でもや、じやあどうして、おとひつちやんにそれを言わなかつたんだよ」

か細く僕は訊ねるしかなかつた。

仮に、もしだ。

総田の言つ通り、おとひつちやんが『水鳥中学校祭最終日座談会案』を自分の考へでなくすり替えとしてやろうとしたのだったら、僕は絶対に許せないだろ。正義感が強い性格だと、そういうん

ではない。あのおとひつちゃんが、絶対そういうことをするわけないと信じたい。

たかが一年ちょっと付き合いのある総田の判断で、おとひつちゃんを決め付けられたくなかった。確かに不器用だし、勘違い野郎だし、受けが悪いことがあるかもしないけれども。同じ小学校の連中はみな、僕もふくめて、おとひつちゃんをいい奴だといいきつてている。間違つたことを身体づくで否定しようとする、ひたむきな奴だった。

少なくとも他人のアイデアをすっぽり盗もうとするような、したかな奴なんかじゃない。それって一種のカンニングだ。

「あんなあ、佐川。俺は決して、関崎を責めているわけじゃねえよ。そこんところは誤解するなよ。俺が言いたいのはつまりだな」

僕の語調が震えているのを感じたのだろう、なだめるような感じで総田は続けた。

「そりやあいきなり、座談会案の中に、俺の案がひょっこり出てきた時は仰天したさ。こいつ何考えてるんだ？ 結局は俺とおんなじ考えだつたんじゃねえかよ、とか思つてさ。でも、よくよく觀察していると、関崎は盗んだという意識がさらつさらなさそくなんだ。うん、あいつは自分で自分のしたことを正しくと信じきつているんだ。自分の思いついたことを、自然そのまま言つていると、思い込んでいるんだ。俺の方を見ておどおどするんじゃねえかと、ちょっと釜をかけたけれども全然、反応なし。そこで初めて気付いたんだな。俺も」

「何に？」

頭の中で言葉にならない、直感がきらきらした。

「関崎の場合は、他の連中が思いついたことが直接頭に刷り込まれてしまうタイプの人間だつてこと」

「ええと、俺、総田の言つていること、よくわからない」

「つまりだな、佐川。お前だつて覚えあるだろ」

深く息を吸い込み、電話口で僕は頷いた。レジのばちゃんとはじけ

る音が、今度は響かなかつた。

「服装規定事件の時もそつだつたけれど、関崎の場合は自分で自分の考え方が、決められない奴なんぢゃないかつて。ルールがあつて、その中で行動するのは平氣なんぢう。だから成績だつてあれだけトップ取れるんだぢう。制服のきちんとした形がきれいだつて思うのもあるだらうが、崩したよさつていうのもまた、一理あるはずだ。しかし関崎の場合、なんらかの理由でひとつの価値觀しか、絶対だめなんだ。他人の価値觀をそのまんま、鵜呑みにしてしまつて自分の考えにしてしまう、そういうおめでたい奴だつてことね」

「いいかげんにしろよ！ 総田、それは言い過ぎだぞ！」

「たまたま親友の佐川が側にいる。佐川が賛成してくれるから、関崎も安心して自分の考えを確認できる。もちろんそれは俺だつて同じだ。信頼できる奴が賛成してくれると嬉しいもんだ。でも関崎の場合、またちょっと違うような気がするんだ。なんか、宗教がかつてているつていう感じだらうかなあ」

もつと僕は言い返すべきだつたぢう。

『関崎乙彦の親友』として。

幼いころからおとひつちゃんを慕つてきた弟分として。でもどういえばよかつたのぢう。

受話器を握り締めながら、レジの閉まる硬い音を聞いていた。

「雅弘、今から銀行に行つてくるからな」

夜間金庫に売上を投函しにいくのぢう。父さん母さんが出かける気配だ。

「うん、わかつた」

両親にも、そして総田にも伝わるよつに、僕は答えた。

親の前でも僕は『関崎乙彦の親友』として振舞つてゐる。

家の中でひとりつきりだつた。総田と受話器で繋がつてゐる間に、僕は数時間前の生徒会室を思い出した。おとひつちゃんの後輩が、総田のかく乱するような質問に戸惑い、パニッシュになりながら帰つ

ていつたことを。あの時僕は、総田を魔術師だと思つた。同じよう
に僕も、総田に呪文をかけられているのかもしない。逆らえない
感情が湧きってきた。総田が何を僕に言わせたいのかがおぼろげに
見えてきた。

「わかつたよ、総田。言いたいこと、わかる」

ほおつとため息をつく気配がする。勢いで総田はくしゃみをして
いた。

「さすが佐川。その点は鋭いよな」

「でも総田は、別におとひっちゃんへ恩を売ろうとは思つていらない
よな。結局どうしたいのか、俺にはまだわからないよ。もしあとひ
っちゃんが総田の案を無意識で盗んで、いろいろやつしているのがむ
かつくのならば、それは総田が勝手にやればいいことだろ。俺は生
徒会と関係ないんだからさ」

ゆっくり、ボーダー線を引いておこつとしている自分がいた。

「関係ない奴だから、佐川。お前の助けがほしいんだ」

「さつきも言つただる。おとひっちゃんを裏切るようなことはした
くないから。俺には黙つてこむ自由だつてあるんだから。たださ、

総田

「のままだと総田の魔術にかかつてしまつ。僕は思いつくままで
言葉をつなげた。

「ただ、総田のやり方は俺から見ると、ちうくつまことと思うよ。お
とひっちゃんが動いて、総田がそれを無意識に指示いくつてやり方、
これはなかなか、頭のいいやり方だなつて思う。俺だったら、おと
ひっちゃんにいろいろやり方を暗示して、勝手にやつてもらつて、
成功させようつて思う。総田にはそういうやり方が向いているんだ
なつて思う。のまま、水鳥中学生徒会のやり方がかたまつていつ
たら、もつとすい」こができるんじやないかな」

区切つてから、忘れていた言葉を付け加えた。

「だから、俺、今の水鳥中学生徒会、うまく行つてゐると思うよ。
これ、おとひっちゃんの親友としても、ただの生徒としても、そう

思つ「

電話の向こうはしばし黙つた。

「総田、聞いてるか」

「……聞いてる」

「どう思つ？俺の言つこと」

総田の答えを待つた。

あやつられはしない。俺は誰の味方でもないもんな。
繰り返し呟「元でつぶやき、待つた。

「佐川、負けた」

続く総田の言葉で初めて知つた。

この時魔術師になつたのは、僕だつた。

「頼む、俺に知恵を貸してくれ。俺以上の発想を見つけ出せるのさ、
水鳥中学を探したつて、佐川しかいねえ」

繰り返し

「たのむ、たのむ」

とつぶやく総田の声を聴きながら、僕は意外に冷静な顔をして天井
を見上げていた。くすんでいる木目が、一つ目小僧の泳ぎに似てい
た。家の中ではひとりきりなのに、誰かに見張られている。にらま
れている、そんな気がした。でも怖くなかった。

「じゃあさあ、総田は結局何がしたいんか」

一番大きな釣り目っぽい木目をきつとにらみつけ、僕は尋ねた。

「生徒会長、から逃げ出す方法を考えているんか」

どうしてわかつたのか、総田は知りたいに決まつてゐる。

でもあえて言わなかつた。説明できない。ただの直感だ。そうこ
まかすしかない。僕はじりじりと響く雜音を聞きながら、総田の答
えを待つことにした。うーん、と小さな唸り声がひとつ、聞こえた。
「やっぱり、お前には、見抜かれていたか」

「当たり前だよ。見え見えだよ。おとひつちゃんほどではないけれ

「えれ」

「関崎と比べられるくらいだと、俺も落ちたもんだよな。まあ、佐川だったら仕方ねえ」

理由を聞いてこなかつた。安心して僕は、自分の予想を総田にぶつけてみることにした。ただの直感だったら、お互に内緒にすればいいことだ。僕の勝手な想像が外れていたら、

「なあに馬鹿言つているんだよ」

と笑われるだけだ。言つことそのものに、害なんてない。

「俺が思うんだけど、総田はどちらかいうと、おとひつちやんを生徒会長に仕立て上げて、自分がリモコンで動かしたいつていうのが本心なんじやないかなあ。否定できる? できないよな」

「……そうだ、『ごもつともだ』

「摂政と関白、って感じだよね」

「そのとおりだ」

「俺からすると、おとひつちやんは一生懸命にやるけれども報われないつてとこあるし、総田がいろいろ知恵をつけてやつたりするのはなかなかいい方法だと思つんだ。これ、おとひつちやんには内緒で言つんだけど。さつきの座談会のことも、正直なところ、俺、シヨツクだったよ。まさか、総田の案を鵜呑みにして、おとひつちやんがやるうとするなんてつて」

「でも、わかつただる」

「うん、わかつたよ。おとひつちやんは一度があつとわめき散らすことはあるかもしけないけれど、一度田からはあつさり頷く性格なんだよな。総田は違う小学校だったから知らないと思うけれど、おとひつちやんの成績がいい理由は、一年生の時がきっかけなんだ」「教えるよ」

僕は、もつたいぶつて会話の中に空白を置いた。

「おとひつちやんよりも頭がいいつて言っていた奴が、小学校一年の頃にいたんだ。あの頃のおとひつちやんと同じくらいだったけれど、なんとなく、賢そうな顔してていたから、下駄履かされてたの

かもしけない。でもそいつ、すげいいやな奴だつたんだ。俺とか、身体が小さいだろ。よく古いタイヤをぶつけられたりして蹴飛ばされたりしたんだ。おとひっちゃんがそれを見てて、すぐに奴を叩きのめしてくれたんだけど

「腕力もあつたのか、関崎つて奴は」

「そうだよ、本氣で怒らせたらおとひっちゃん、怖いよ。でもそいつは、おとひっちゃんに『お前俺よりも頭悪いくせに』て言い放つたんだ」

五年以上前のことなのに、鮮やかにのみがえつてくる。おとひっちゃんのかつとなつた表情と、片手で僕をかばつて立ちふさがった姿が、天井に映し出されているようだつた。僕はすつと天井をにらみながら続けた。

「それまではおとひっちゃんも対して、成績がいいこととか意識してなかつたと思うんだ。そりや、頭いいつて言われていたけれど、むしろかけつこのほうが得意だつたし、そつちの方で有名だつた。でも、おとひっちゃん、そいつの言葉聞いて、すぐに殴るのを止めたんだ。俺をすぐに引っ張つていつて、『いいか雅弘、俺はあいつよりずっとずっとといい成績取つて、何にも言わせないようにしてやるからな。お前を蹴り飛ばすよつなこと、絶対させないからな』って、言つたんだ」

「悪いけど、言つていいか

「いいよ」

総田は咽を鳴らしながら笑いをこらえている様子だつた。

「単純きわまりない奴だな、関崎つて」

「でも、大体想像つくだろ」

「それ以来、関崎は誰にも暴力沙汰を起こさなかつたつてわけかよ」

「そう。手を出しても成績が悪かつたらだめだと、あの時おとひっちゃんそつ思つたみたいだね。あれ以来、おとひっちゃんはあつといつもテスト満点の連発しだしたよ。気が付いたら、おとひっちゃん通知表に『よくできました』のところ以外、全くしるしがつか

なくなつたもの」

三段階評価の通知表だつた。まだ一番かどつかはわからない。ただおとひつちゃんがいつも、満点の答案を返してもらつてゐることだけは窺い知れた。先生が解答を読み上げるよりも、おとひつちゃんの用紙を見せてもらえればすぐに済むものだから。

総田はなんだか考え込んでいる様子だつた。ずっと黙つてゐる。決して、聞き流しているんじゃないだろう。

暇を持て余しているような物音がしないから。

「俺がもしかしたら、と思つていたことが大体本当だといつことが、

佐川の言葉で、証明されたな」

「みんな気付いてもいいのにな。どうして誰も勘付かないんだろうつて、思つてたよ」

「天才は辛いよな」

皮肉っぽく言い返された。

「とにかく、総田に俺が言いたいのは、このままだと計画がみんなこなになつちゃうよ、つてことなんだ。今回の学校祭最終日企画に、おとひつちゃんがあそこまで燃え上がつてるのは、これで最後にしようつていう覚悟の表れだと思うんだ。来年やればいいのに、一年で生徒会を引退しようつて真剣に考えているんだ。でも、そうしたら総田、お前が生徒会長になるはめになるだらう? ま、それでもいいよ。俺、総田の方が『ひとり』で会長になるのならば、別に問題はないと思つな」

「「ひとり」でつてところが、みそだな」

僕はゆつくり繰り返した。

「そうだよ、『ひとり』つきりでだよ」

天井に向かい、もう一度頷いた。

今がチャンスだ、そう天井の木田たちからささやかれたような気がした。

「総田、本当の計画、教えてくれたら、もつと俺もいい方法考えら

れるよ。俺、おとひっちゃんが生徒会に残つた方がいいと、思つてるから。『教授』の密かなるプロジェクト計画を教えてほしいな。たぶん川上さんあたりも一枚かんでいるんだろう

「なんであの女が出てくるんだよ！」

「いきなり慌てた気配あり。やっぱり図星だった。

「だつて、今日も見え見えだつたしさ。おとひっちゃんならともかく、ほかのみんなには、総田と川上さんがどういう関係かつて、大体わかるんじゃないかな」

あとは総田が白状するのを待つだけだ。

力関係、完全に僕が主導権を握つた。

狙つたわけじゃないのだ。ただ、いつのまにか僕の方が有利になつただけ。

おとひっちゃんとも、総田とも、いつつもやうだつた。

「……わかった。佐川。俺に何を言わせればいいんだ」

「おとひっちゃんを生徒会長に祭り上げる計画の一部始終」ようやく聞き出せた「総田教授の密かなるプロジェクト」だつた。

総田教授の密かなるプロジェクト 原案

学校祭が終わつた後、十月には生徒会総選挙が行われる。

告示は十月初旬をめどとして、選挙管理委員会を結成し行われる。生徒会長一名。副会長一名。会計一名。書記一名。計七名。

しかしながら、現在の水鳥中学生徒会は、生徒会長がいなきわめて異常な事態となつてゐる。また、生徒会副会長一名、会計一名、書記一名といふ、これもまたかなり少ない人員となつてゐる。計五人。

本来だつたら、全員一年生といつてもあり持ち上がりで立候補

してもらご、そのまま信任投票を行つてももらつのが一番よ。

もちろん会長職は、現副会長の総田幸信、関崎乙彦のどちらかで決めてもらつのが一番よのではないだろうか。できれば総田副会長と関崎副会長との話し合いで一人に絞つてもらご、どちらかが再度、副会長に、もうひとりは生徒会長に、という形で。

そうすれば、丸く収まるはずだった。

空いたポスト「生徒会副会長一人」と「書記一名」を一年生から募集するか、一年生から再度募集するかのどちらかで、決まるはずだった。

「総田はそう、計画していたわけなんだ。そうだよね、俺もそう思つてた」

「今日までは、俺も同じく」

ちつと舌打ちして、総田は続けた。

「関崎の場合、とにかく上に立ちたがつているところが見え見えだつたから、ここは俺が引いて、副会長に降りようと思つていたんだ。もちろん話はまだしていなかつたし、できる状態でもないよな。でもまあ、関崎の性格を考えれば大体まとまるであろうと、甘く、見ていたんだなあ、俺」

「そりやそうだよね、俺だつて、驚いたよ。でも総田。そんなに生徒会長つて、やりたくないものなんか。面倒なことなのか?」

立候補すれば一発で決まるだろうにな、と思つたが言わなかつた。「正直なところ、仕事が面倒だとは、思わねえ。ほとんど去年から、生徒会長の仕事してきたもんだろ。関崎との仁義なき戦いを続けてきて、それでまともに動かしていこうとしているんだからさ。でもな、俺が『服装規定問題』なんかで多少なりとも、まともに形を残せたのは、立場が『副』だからだつた、とも思つんだ」

「限りなく生徒会長に近い、副会長だもんな」

「ちやかすな。変な言い方だけど、関崎がいい子の生徒会長役を全部引き受けてくれたから、俺が反対勢力をかこつて、なんとかできただけなんだ。対照的、って言えば一番近いかもしない。全校生徒から反発かいまくつて、人気下落ぎみの関崎副会長に対抗して、という構図がいつのまにか、出来てしまつたつていうかさ」

「さすがだなあ、総田」

だんだん、総田の本心らしきものが見えてきた。
でもここでばらすようなことはしない。

僕は話を促すべく、黙つた。

「でも仮にだ。俺が生徒会長にまぐれでなつて、関崎がいなくなつて、ということになると、果たして俺は同じこと、できるか？ でききないな、ということに気付いてしまつたんだ」

「確かに、総田は革命派かもしぬない。ナポレオンみたいな感じかな」

「しかも、生徒会長はふたりじゃない、ひとりだ。関崎もいればいたで、それなりに仕事こなしてくれるしさ、個人的感情はとにかく、やる時はやつてくれるよ。でも、仮にあいつがいなくなつた場合だと、俺ひとりで先生たちの責めを受ける自信は、ないな」

「王政復古、してしまいそうだもんなあ」

「そう、佐川。俺は今、水鳥中学生徒会に『王様』が必要なんだ」
総田は、氣付いた後に立て直した『総田教授の密かなるプロジェクト』をさらに続けた。

今、仮に関崎乙彦が、水鳥中学生徒会を脱退するつもりだとすると、学校祭最終日の座談会を花道にして引退できれば未練なしだらう。

しかし、それではたまつたものではない。

次期生徒会長として本来ならば、関崎を押し出すつもりでいた総田の考えが覆されてしまつ。次期生徒会長のお株が、総田本人に回

つてきてしまつ。

それは、全校生徒の大多数にとつては、かなり望ましいことと思われているだろう。たいしたことではない。『服装規定問題』で失点した関崎副会長よりも、制服の襟をはずせるように緩和した総田副会長を評価する声の方が高いに決まつてゐるからだ。百歩譲つて、関崎と同じ小学校出身者が多少反発したとしても、一年、三年の評価はかなり高いのだから、まかりまちがつても不信任ということはないだろう。

さて、それではどうすれば関崎乙彦を次期生徒会長に残しておけるだろうか？

関崎の、おだてに乗りやすい性格を利用して、生徒会メンバー一同でほめまくり、おだてまくる。さすがに犬猿の仲である総田副会長が、しらじらしいおせじを言つのはまずい。たまたま今回は学校祭最終日座談会というからみも存在する。関崎が命をかけてやり遂げようとしていることだ。

まずは、成功させよう。

表面上は大成功の座談会として幕を下ろしそう。

直後、関崎は自己満足に浸りきつてしまつだろう。

どう成功させるかは、これから総田を始めとする一同が考える。

大成功で氣をよくしてゐる関崎に、誰か第三者から、

「実は総田を始めとする連中のおかげなのだ」

ということを、ささやかせる。相手は佐川か、もしくは別の相手か（できれば女子がベスト）、決めていない。とにかく関崎ひとりの手でやり遂げたわけではない、総田副会長の手によつて助けられたことを伝える。

できれば、それは生徒会関係者とは別の方から伝えてもらつのが望ましい。

思い知つて関崎乙彦は荒れるだらう。

よりもつて、あの不真面目野郎に手玉に取られたと氣付いた時はたして関崎乙彦は生徒会に未練なく、やめることが可能だらうか？

プライドはずたずただ。かといって総田に文句を言つことはできない。いや、言つかもしれないけれども、「生徒会の人間が、学校祭成功に力をつくさないと思っていたのか？」と聞こ返せばぎやふんと黙るだらう。

総田への対抗意識がこれで高まり、未練が倍増するのは、田に見えている。

そして、『来年こそは、絶対に』という気持ちが芽生えるのも時間の問題。

自ら立候補するだらう。

総田が動かなければ、信任投票に持つていけるだらう。

多少失点の多い関崎副会長だけれども、全校生徒はよっぽどのことがないかぎり、不信任投票などしないだらう。あっさり決まる。

「やつたといふことをやつてこるのが、俺には一番いいような気がするんだ。佐川。俺はもともと、ナンバー2の人間なんだよなあ。トップで圧力を受けつづけるよか、縛られないで好き勝手にやらせてもらえる副会長ってところ、俺は一番好きなんだ」

総田の言葉を大体まとめると、こうじう形にまとまるのだらう。僕は頭の中に入れていく、自分で『総田教授の密かなるプロジェクト』計画書を書き上げた。

予想していた通りだつた。

総田はやっぱり、おとひっちゃんを防波堤にして、秋以降の生徒会を運営してこいつとたくさんでいた、というわけだつた。はたし

ておとひつちやんが、総田の計画に気付いているのかわからなければ、僕は気付いていない方に一票入れていい。そして、たぶん総田の読み通りに話を進めれば、その通りになるだろ」とこういって、断言できそうだ。

おとひつちやん、そういうのは単純だからなあ。

おだててほしい人に、おだててもらえば、素直にこういっててくれるもんなあ。さすがだよ、総田。

何か言おうと思ったとたん、裏口から物音ががさこした。どうやら両親が夜間金庫からもどってきたらしい。まあ、これ以上しゃべっていると母さんから問い合わせられそうだ。

「総田、ごめん。今の話はおとひちやんには絶対に言わないよ。ただ、今はうちの親が帰ってきてこれ以上続きを話せない。おとひつちゃんとは親同士も仲いいから、俺もあまり、これ以上いえないからさあ。つわつわのことで終わらせたく、ないからさ」

僕は、いかにも総田に加担したせうつな口ぶりを装つて、電話を切ろうとした。

「分かった。最後に一言だけ確認をせり」

「いいよ、手短に」

「俺の計画は、はたして水鳥中学生徒会にとってプラスになるとと思うか？　俺の判断は、俺ひとりの身勝手な考えだと思うが？　保身だと思うか？」

難しい質問だった。

でも、僕は考えることなく、即座に答えた。

「俺は総田の考えが正しいと、思つてるよ。おとひつちやんの親友だから、絶対にそう、信じている。だから、これから総田にいろんなことを参考に助言できたりこなあと思つてこる。明日、もう一度夜に、電話するよ」

「助言？」

「そう、誰に頼めばおとひつちやんは、うんと頷いて、生徒会に残

「うつと思つがどうか」

僕はゆつくりと最後の部分を強めに言つた。

総田もなにやらぴんときたらしく、含み笑いする様子だった。

「明日の夜、だな。わかった」

電話は切れた。

僕は関崎乙彦の親友として、総田の言葉を受け入れてしまつた。確かに、会長就任後の計画はあまりにもひどすぎる。

でも僕は、おとひっちゃんが生徒会長としてトップにたつた姿を見たかった。誰よりも、不器用だけれどひたむきなおとひっちゃんには、水鳥中学生徒会の会長としての名誉が、一番ふさわしいような気がしてならなかつた。たとえ、失策を繰り返し鬱鬱もんだった関崎副会長だつたとしても、僕はおとひっちゃんの、本当に一途で懸命なところを知つてゐる。僕が泣かされていた時に、すぐ立ちふさがつてくれたおとひっちゃんを知つてゐる。

生徒会を副会長のまま、引退させるなんて、絶対にいやだつた。たとえ、おとひっちゃんを一時的に裏切ることになつたとしても、僕は僕の意志で関崎乙彦生徒会長を、誕生させたかった。

おとひっちゃん、ごめん。

でもそれは、おとひっちゃんにひとつ一番いいことなんだ。

朝、迎えにいくとおとひっちゃんはいなかつた。とつくで学校へ行つたといつ。きっと生徒会室で総田とふたり、また顔を突き合わせているんだろひ。いつもだつたら僕はおとひっちゃんの家で声を掛け、一緒に学校へ急ぐのだけれども。まあ、当然か。学校祭最終日だけではなく、初日、一日の準備だつて生徒会にはあるんだから。

おとひっちゃんに今朝の僕を見られないで本当によかつた。

僕だつて多少、良心の呵責つてものは、ないわけじゃない。

意識として『関崎乙彦の親友』面した僕がいるのに、前の日に総田へ話した言葉は、どう考へても裏切り行為と思われても、しかたない。少なくともおとひっちゃんが知つたら、何されるかわからない。何発ぶん殴られるか想像がつかない。絶交されるかもしれない。それはよくわかつっていた。でも、総田ともうとしやべつてみたい、総田の本音をうまく探つてみないとわくわくする僕の本音を無視することなんて、できやしない。おとひっちゃんには見せたことのない、僕の一面を、総田に見せた時、動搖を、僕はなぜか気持ちよく受け取つた。

くせになりそうだ。

でもまだまだ、これからだ。

総田、まだお前の『教授の密かなるプロジェクト』は甘いと思つよ。

俺だつたらもつとづまくやつてみせる。

でも、おとひっちゃんを生徒会長にさせたいから、俺は協力するだけなんだ。

俺は絶対に、『関崎乙彦の親友』なんだから。

昨夜話したこと思い出しながら、僕は一年三組の教室に入った。

「あれ、佐川、今日おとひっちゃんと一緒にやねえの」

「うん、例のあれで先に行つたみたいなんだ」

いつもお神酒徳利のようにくつついている僕とおとひっちゃんと。ひとりでいるのはめずらしかったんだろう。かばんを置いて、僕はすばやく黒いバインダーを取り出し、仲間数人を手招きした。

「ほら、おとひっちゃんの予想ファイル。どうせ、写すだろ」

「佐川、お前つて本当にいい奴だよな」

男子三人が小声でささやきながら、大学ノートを開き僕の机にたむろする。目的はひとつ。予想問題を丸写しするという。本当は「ピー機を使いたい。でも、一枚五十円もするなんて、馬鹿高すぎる。しかたないから、みな手書きだ。

「今日中に返してくれればいいからさ」

僕は学習委員の義務、『先生のお荷物運び』をするために教室を出た。

今日は社会だ。地理だ。ドアの高さくらいある東北地方の地図をひとりで運ぶ。廊下におとひっちゃん、総田がいないことを確認して僕は大急ぎ、職員室に向かった。

ちょうど生徒玄関が八時一十分で締められ、職員玄関から遅刻した連中が入ってきたところだった。職員室の目の前で、遅刻者に『違反カード』を一枚切つている五人は、生活委員のみなさまがた。校則違反をしないきちんとした制服姿で、必死に書き込んでいる。恨まれる仕事だ。

僕は前に、学生帽を忘れてしまった時に一枚だけ、切られたことがある。

対象者は主に、結んだネクタイの両端が一センチ以下の中さの者。

前髪が眉に全部かかっている者。

スカートの丈が膝下十センチ以上、もしくは以下の場合。

人間関係をうまくやりたい僕としては、絶対になりたくない委員のひとつだ。

でも、やっぱり向いている人っていうのはいるわけで。

僕は急いで社会の先生から地図を預かり、よろけながら廊下に出た。一仕事終わつたという風に引き上げる生活委員の一人を呼び止めた。

「さつきたん、今日、またたくさんカード、切つた?」

振り返つた『さつきたん』は、僕を見つめておとなしめに微笑んだ。

水野五月。

小学校の頃から『さつきたん』と呼んでいた。

ふたつに分けたするんとした髪が両肩にたれていた。額を大きく出していた。絶対に校則からはずれない髪型だけれども、さつきたんにはなじんでいる。ちょっとはつかねずみ風の顔立ち。こういう女子だけだったら、きっと校則もつるさく言われないですむんだろう。水鳥中学の女子における校則は、さつきたんに似合う格好をそのまま上げただけのような気がする。

世の中はいろんな顔があるんだから、似合わない女子が校則違反したつてしかたない。僕は他の女子を見るたびそう思つ

当然、制服も二十五センチくらいスカーフを余らせて結んでいる。僕も男子の中では前から一番田くらいの背丈だけれども、さつきたんはさらに小さい。僕がさつきたんと呼ぶのは、小学校が同じというのもあるけれども、なんだか小さい共通点にほつとするからだと思う。

「佐川くん、どうしたの? 重そつ

「次の時間、社会だからさあ。東北地方の地図だつて

「ひとりで持つの? 端っこ、もしよければ私持つわ

話し方もやわらかい。一組の女子はわりとさばけた感じの連中がほとんどだけれど、さつきたんだけはか細く、ささやくように話す。

それでいて全然クラスで浮かないのは、やっぱり性格のおかげだろう。

「大丈夫だよ。丈が長いだけで、重くはないんだ」

男子の意地だ。僕は笑いながら断つた。続けた。

「それにしてもいつも俺、思うんだけど、さつきたんって一年の時からずっと生活委員やっているだろ。やだろ、本当のこと言ひとさ

「そんなことないけれど、冬は寒いからちょっとといや」

「それに、クラスの奴が違反したとかいっては、『違反カード』切らなくちゃいけないしさ。大変だよな。俺だったら、絶対できない。万年学習委員でよかつたって、思うよ」

「佐川くんは学習委員が似合つてると思つわ」

理由を言わずにさつきたんは僕をちらりとみて、すぐ目をそらした。

「今日は先生がいたからそういうわけにもいかなかつたんだけど、いつもは私、切らないの。だって、四組では違反カードを一人一人張り出してるんだもの。五枚たまると家に電話が入ることになつているから。四組だけなんだけど」

「一年四組といえば、おとひつちゃんがいるクラスだ。

服装規定問題で、大御所関崎副会長のいるクラスゆえ、よけい厳しくなつているのかもしぬなかつた。僕はその辺聞いていないけれども。担任によつても異なるからその辺はよくわからない。三組がわりと、校則関係についてゆるめなのは、さつきたんが前もつて「抜き打ち服装検査」などの情報をクラスに流してくれるおかげだろう。

「四組つて、やたらといやな噂が流れてくるよなあ、やっぱりおとひつちゃんのせいか

ついぽろつと、こぼれた。

「関崎くん？」

「うん、副会長のいるクラスだからなおさらなのかな
さつきたんは軽く首を傾げ、すぐに小さく振つた。

「違反カードのことは、関崎くん関係ないみたい。あまりクラスのことには、出さないって、四組の人言つてるし、それに「

ちりりとまわりを確認した後、僕にしか聞こえないわざやき声で。

「ちゃんと、前もってチェックとかある時は、ちゃんと言つてくれんんですって。関崎くんを田のかたきにしているのは、ほんの少しだけだと思つの」

さつきたんは僕とおひつちゃんが、親友だつてことを知つている。

なにせ、小学校五、六年一緒に組だった。

「わうだよな。おひつちゃん、いい奴なんだけどな」

一年教室までしぶりへ階段を昇りながら、なんとなく小学校の頃の話をした。さつきたんは僕を「佐川くん」おひつちゃんを「関崎くん」と呼ぶ。同じ組の女子で、呼び捨てにしない人は珍しい。

僕は言葉を選んで、思い切つて言つてみた。

「ここだけの話なんだけど、おひつちゃんが。今度の学校祭で座談会やうとしているんだけど、なかなかうまく行かないみたいで落ち込んでいるんだ」

「あの、関崎くんが？」

「あのままだと、まいつてしまいわうだよ。俺、生徒会の中はよくわからないんだけど、次の生徒会選挙には出なことまで言つているんだ」

「この事実、僕はまだ、同じ組の男子に一言も話していない。

総田と、今、さつきたんにだけだ。

さつきたんはいぶかしげに僕の顔を見つめ、尋ねてきた。

「関崎くんが生徒会に残らないなら、生徒会長は誰がなるの？」
やつぱり、かかつってきた。

僕は確信した。

さつきたんは、おひつちゃんが生徒会長になるもんだと、決め込んでいたってことだよ。きっと、同じ小学校の連中はみな同じようと思つていてるだらうけれど。

おとひつちやん。やつぱりそつなんだよ。

水野五円さんは生徒会長を関崎乙彦だと思つてゐるんだよ。

「それなら、誰が生徒会長になるの？」

さつきたんはもういちど、繰り返した。

「たぶん、総田あたりかな」

「関崎くんの方がいいのに」

なんとなく口にした、という感じだった。僕を気遣つてつけたしたのりではない。

力を抜いたままつぶやいた。

「三組の男子も、おとひつちやんいい奴だつて言つてるんだけど、でもな。あいつ、敵作りやすいつていつか、もう作つつけつてゐる」

「そうなの」

階段の踊り場でいつたん立ち止まり、僕は続けた。

「違う小学校から来た連中は、おとひつちやんが副会長やつているところが、せいぜいテストの順位発表でトップに上がつてゐるところしか知らないからなあ。せめてさ、陸上やめなけばなあ。さつきたん、ちなみにおとひつちやんのどこが、受けいいと思つ？」

わざと訊ねてみたかった。でもさつきたんは何も考へない風に答えてくれた。

「関崎くんは、うそを言わない人だつてこと、わかつてゐるから。佐川くんがいつも信頼してゐるつてことは、やういう人だからつてことでしよう」

「そうだね。僕も、自分で、そう思つ

確かに、嘘を言わない、裏切らない。僕はさつきたんがそこまでおとひつちやんのことを観察してゐるとは思わなかつた。

でも、「佐川くんが」という口調になにかひつかかる。

「つまくいえないので、一生懸命だつてことはわかるの。あのね、佐川くん、これつて変に思われるかもしれないけれど」

「変に思わないよ」

さつきたんは声を潜めて、ちょっとつむき加減にしゃべった。
「今度の学校祭、最終日のこと。生活委員会でも話として出でている
んだけど、みなフォークダンスの方を楽しみにしているみたいなの。
座談会の方は全然、何も話題にならなくて。なんとなくだけど、
委員会に関係している人たちはみな、『フォークダンス』が一番樂
しいと思い込んでいるところがあるみたい」

「そうだね、うちの組はどうかわからないけれどさ」

「でも、例えば……フォークダンスを踊りたくない、という人だつ
て、学校の中には必ずいるはずだと思うの。無理やり引きずり込ま
れてしまう人もいるんじゃないかと思うの」

さつきたんのおちよぼ口から『フォークダンス』という単語が飛
び出すのが意外で、僕はもつと身をかがめて覗き込んだ。はにかむ
ようにさつきたんは続けた

「どういう形ですかわからぬけれど、男子と女子で手をつな
ぐことになりそうだつて聞いているわ。でも、中には手を繋がれる
のがいやって人もいるだろうし、触ると菌がつくとかいわれて小指
の先が触れる程度にする人だつて、必ずいるはずよ。普段でさえ、ば
い菌みたいな扱いをされている人は、フォークダンスでさらに、い
っぱい、傷つかなくちゃいけないくなっちゃうんじゃないかしら」
変に思つていない証拠に僕は、頷きながら軽く笑いかけてみた。
うまくたまたまのではなかつただろう。行かない。にやけている
みたいに写つたかもしれない」

「うん、そうだね。総田はそこまで考えていないと思う。言つたと
しても、想像がつかない奴かもしけないよ。わかってくれるのは、
おとひつちゃんだと思う」

「そう。関崎くんは、小学校の頃から、弱い立場にいる人のことが
分かると思うの。ほら、六年の時に、女子の間で仲間はずれごつこ
がはやつたことがあつたでしょ」

「うんあつたあつた。でもあれはおとひつちゃんまづかつたな」

「その時に関崎くんはものすごい勢いで女子を怒ったでしょ」

六年の頃。いきなり教壇で女子全員を怒鳴りつけたことがあった。全く関わっていなければたんを始めとする女子はたまたものではなかつただろ。幸い、さつきたんは全く根に持つていなにようだけれども、一時期状況がさらに悪化してしまつたことがあつた。クラスの女子とこざかざが増えたのは、たぶん、そのあたりだ。

「おとひつちやん、会長になつてしまえばいいのにな」

「気が付くと、もう廊下には誰も人どおりがなかつた。まずい。そろそろ先生が教室に入つてくる。しかも、さつきたんとふたりきりだ。

別に変なことなんとしてない。見られたつてビーッつてことない。でも、さつきたんはいやだろ。きっとからかわれる。

「まずいよ、これからホームルームが始まるところだ」

「ほんと、佐川くん、『めんなさい』。やはり端っこ、一緒に持ちます」

さすがにふらりふらしているところを見かねたんだろ。僕が遠慮するのを、やせしい声でふりきつて、地図の端っこと一緒に持つてくれた。

五組、四組はまだ教室の戸が開いていた。僕とさつきたんがふたりで地図を運んでいく姿はきっと、見えたのだろ。四組の教室におとひつちやんが戻つてゐるか、ちらつと見たら思わず目が合つた。えらく疲れた風だつた。川の字式にずらつと並んでいて、先生のまん前だつた。近眼の人か優等生か、もしくは一番うるさくて目をつけられる奴の席。おとひつちやんはたまにめがねをかけていることがあるからな。自分で希望したいとは思えない席だつた。

はつと笑顔で何か言おうとしたらしい。

でも続くさつきたんの姿に、また別のことを感じたらしい。すぐに目をそらして、筆箱を開けたとしていた。

予想通りだと僕は思った。

おとうちゅひやんは非常に、じぐわがわかりやすいんだ。
おとうちゅひやんは何を言いたいのかが、口で言わなくても、すぐ

わかるんだ。

どうして総田ちゃんは元気付かないんだね!。

秋の木の葉が、一枚一枚とちらつきはじめた。枯葉色を中心にして窓際の景色は、晴れた空、透き通った雰囲気だった。風が吹いてきたせいかもしれない。時折、枯葉が立ち上がり風に見えて、思わず指差したりした。

東北地方の地図を開いて、一番背の高い奴に頼んで、黒板の上に吊り下げてもらつた。こういう時、ちびはいやだ。

「雅弘、さつきどうしたんだよ」

学級委員の友達につつかれた。わかっている。さつきたんと一緒に教室へ入ってきたことを突つ込もうとしているんだ。僕は何も考えずに返事した。

「ああ、さつきたんと一緒に来たつてこと?」

「全く雅弘つてばなあ、ガキの癡にそういうところは大人なんだよな。ちび同士、いいカップルに見えるけどなあ」

確かに、僕より背の低いのは女子だとさつきたんくらいだ。

他の男子だつたらわざと

「まさかだろ、あんな女の何処がいいんだ」

と悪口を言つのかもしれない。でも僕にはそんな必要がない。

「普通にしゃべっているのがそんなにおかしいか?」

「雅弘つて、意識してねえのか」

「全然。だつてさ」

僕はそういうながら、他の男子には気付かれないよつとさせやつた。

「知つてゐるだろ。おとひっちゃんのこと」

同じ小学校出身だからこそ、言えることだ。

本当に仲のいい連中だから、お互い協定を結んで、知らん振りをしているのだから。奴は頷いた。

「そりゃ、忘れてた。そりだよな。おとひつちゃんはもう、田覚えてるんだよなあ」

「さつきもさ、四組の前を通りてきたんだけど、おとひつちゃん、かなり意識してたみたいなんだよ。まずかつたかなあと、今、じぶになつて俺、反省してる」

「本当に、あいつは純だよな。でもわかるような気はある。おとひつちゃんはあまりうるさく女子好きでなさつだしな」

学級委員はふと、僕に指でさつきを指差して尋ねた。

「向こうははどうなんだろうな」

「わからない。女子の考えていること、俺には想像つかないよ」

「なんかなあ、俺の勝手な想像なんだけだ」

口籠もりながら、あいまいなことを、学級委員は口にした。

「もしかしたら水野さん、お前のことを・・・」

「冗談はやめろよ、頼むから。おとひつちゃんの前では絶対に言つ

なよ」

ひそめた声で僕も言い返した。

「身の危険、感じているだろ」

「当たり前だよ！　噂にでもなつたら、一大事だ！」

他の小学校から来た連中は違つかもしないけれども、僕たちはなんとなく、誰々が何々のこと好きだといふ言葉を言わないようにしてきた。僕のように女子とただの「友達」としか思わない奴がほとんどだつた。

だから、平氣で一緒におしゃべりもできるし、さつきを一緒に廊下でおとひつちゃんねたを振ることもできる。

ただ、他の小学校から来た奴からすると、それはちょっとおかしく見えるらしい。噂では女子と付き合つていろいろ話もちりつと聞くし、なんとなく見ていてわかることがある。

前の日に総田と川上さんがしゃべっている時に、ふつと感じた、べたつとした雰囲気といえばいいんだろうか。

なにか、僕は真似したくないような、女子との雰囲気。

どうして誰も総田と川上さんとのことを蹲しないんだろうか。

たぶん、お互に隠しているんだろう。

ただ生徒会の中では、僕以上におとひつちゃんの方がいらっしゃるに違いない。おとひつちゃん自身はただ、「総田と川上のしゃべり方がむかつく」と思つている程度かもしれない。でも、なんとなく僕からしたら、それ以上の感情のゆれがありそうな気がした。もちろんおとひつちゃんにこう気はない。総田に匂わせることができるだけで十分だ。

だけど、僕がいつも不思議に思うのは、どうして総田はおとひつちゃんの片思いに気付かないのかってことだった。僕からしたら、わかりやすすぎるおとひつちゃんの行動だ。下手したら全校生徒に関崎乙彦の好きな相手が誰だか一発でばれてもおかしくないと思うのだけれども。もちろん、同じ小学校の連中はすでにお見通しだ。

五年生の夏あたりから、おとひつちゃんはあまり女子としゃべらなくなつた。それまでは普通だったのにだ。決して喧嘩を売るとか、怒鳴るとかそういうのではなく、僕のよつに自然な会話が全くできなくなつてしまつただけのことだつた。用があれば、僕にそれとなく話し、そこから伝えるような形だつた。その頃から、なんか変だなとは思つていた。

やつぱりこれだ、と思つたのは秋あたりだつた。

当時、字のきれいなさつきたんがクラスの『学級通信』を清書する係だつた。うちの小学校では、ガリ版に鉄筆で一文字一文字、文字を書き込んでいき、それをわら半紙に印刷して、配るやり方を取つていた。原稿を集めてから手写しするのが、さつきたんの役目だつた。インクがにじんで手が汚くなる、そんな学級通信をくばついたさつきたんは、僕の隣に座つていたおとひつちゃんに、何気なく渡していた。

「関崎くん、どうや」だつたろうか。とにかく、あまり崩れた言葉ではなかつた。いつもやわらかい笑顔だつたように記憶している。何かに熱中していたおとひつちゃんは、ふつと顔を上げた。思わずさつきたんの顔を正面で見てしまつたようだつた。ただそれだけだつた。頷いた、ほんとにそれだけだつた。

さつきたんが後ろに進んだとたん、おとひつちゃんの視線がふらふらとさまよいだし、瞬きを突然し出した。歯を食いしばつたように口元堅く結び、頬骨のあたりが色濃くなつてきた。今思えば「真っ赤になつた」という状態だつたのだろう。

とにかく、おとひつちゃんの今まで見たことのない状態に僕はびっくり仰天した。

「おとひつちゃん、どうしたん？」

学級通信に何かまざいことが書いてあつたのかとすぐに田を通しあけれども思い当たる節はなかつた。

「なんでもねえよ」

おとひつちゃんはすぐにバインダーに、学級通信を挟み込んだ。丁寧に、一つ折にしてたたんだところが、なんとなく、おとひつちゃんらしくなかつた。

ぼくもそうだけど、たいていの男子は配られたプリントなどを、そんな丁寧にきつちりたたむなんてこと、普通しない。おとひつちゃんも、その時まではそうだつた。なのにだ。それからとこうもの、おとひつちゃんは「学級通信」に関してのみ、両端をきちんと合わせてたたんで、しまじこむようになった。隣の席でずっと観察していた僕が見たんだから、間違いない。

絶対にさつきたんと、なにがあるな。

僕は思つたことをすぐに口に出わず、様子を見る性格だ。

だから、誰にも言わなかつた。かわりにずっとおとひつちゃんとさつきたんの様子を観察しつづけることに決めた。たまたま僕に用があつてさつきたんと話をしている時とか、給食の時間におぼんで運んでもくれた時、おとひつちゃんがどういう顔をして受け取るかと

か。結構機会はたくさんめぐってきっていた。

だんだん周りでも、男子と女子が付き合いだしているという噂が出てくるようになったけれど、おとひっちゃんのことを言つ奴はいなかつた。やつきたんも同じだつた。ただ、僕だけが気付いていたにすぎなかつた。

たまたまおとひっちゃんが居ない時に、誰かが他のクラスで付き合つてゐるらしい奴の名前を挙げた。僕から見たら、あまりそういう感じに見えなかつたので、

「おとひっちゃんにくらべたら全然、そんな感じないよ。きっと、ただ仲がいいだけだよ」

と、ぽろりと口にしてしまつた。あれはまずかつた。失敗だつた。

「おとひっちゃんにくらべたら、おい、雅弘、おとひっちゃんにそんな女子いるのかよ」

早速、旅館の一室で問いつめられ、僕はあいまごとに白状してしまつた。

もつとも、みんな知つてゐるばかり思つていたので、みんなの驚きの方が僕には意外だつた。どうして、みんな、目が節穴なんだうひ。

でも僕がばらしたなんてことになつたら、おとひっちゃんが何をするかわからない。一度も殴られたことはないけれど、怒つたら怖いことはよくわかつてゐる。だから、必死にフォローに回つた。

「でもひ、おとひっちゃんはきっと、付き合つとかそういうことする気なこと思つて、もしされたらかえつて立ち直れなこと思つよ。だから俺は、おとひっちゃんにそのこと、言いたくないんだ。相談なんだけど、このこと、俺たちの秘密にしようよ」

今思えば、よくみんな、頷いてくれたものだと思つ。

「そうだな。おとひっちゃんだもんな。わかつた。雅弘に免じて内緒にしどこいが」

おとひっちゃんはそのことを、現在まで全く気付いていないはずだ。

同じ小学校の男子一部が、自分の片思いを見抜いているなんてことを、想像すらしていられないはずだ。

社会の授業が終り、別の男子が僕の代わりに地図を丸めて職員室に持つていってくれた。僕の背が低すぎて手が届かなかつたのを、授業が始まる前から見ていたのだろう。助かつたけれどなんだか、しゃくだ。

次の授業は苦手な英語だつた。いつも僕は、おとひつちゃんから教科書の訳文を丸写しさせてもらつていて、一週間分はすでにもらつていて、特に予習する必要もない。ただ、音読をせられるのが面倒だ。発音がよくないとか、アクセントが違うとかいろいろつかれるんだろうな。当てられるかどうかはわからないけれど、心配なのでカタカナで、発音の振り仮名を振つておいた。

「雅弘、おい、雅弘」

呼ばれて顔を上げると、いつのまにかおとひつちゃんが側に立つていて、四組からどうしたんだろう。教科書か辞書か忘れ物でもしたのだろうか。

「あれ、おとひつちゃんどうした？ 教科書かなんか忘れたんか？」

「そんなんじやねえよ。ただ、なんとなく」

疲れているんだろう。おとひつちゃんは、同じ小学校から来た男子数人にも声をかけていた。

「それにしてもおとひつちゃん疲れ果ててている顔しているなあ。今日も早かつたつて、おばさん言つてたよ」

「うちだとなんだか落ち着かないからさ、生徒会室で書類作つてた」「ひとりで？」

「そう、総田側のフォーグダンスがどういう方に向かつているのかはわからないけれど、お互に口出しするのもいやだろしちゃ。でも、だいぶ一年生側からはやる気のある意見が上がつてきつたあるし、俺のやつていることもまんざらじやないかな、と思つ」

昨日の、陸上部の後輩のことだろしが。僕は昨日おとひつちゃん

を訪ねてやってきた彼について、話すべきかまよつた。おどりひつ
やんはどんどん勝手に話を進めていった。

「三年生はやつぱりなかなか厳しい反応が多いよつだカビ、どつむ
来年は卒業してしまつんだ、それはそれで割り切つて、今の一一年
を中心につきあつしていこうと思うんだ。まず、各クラスの学級委員を
代表にして、パネルディスカッショソ形式にする。で、代表の意見
を生徒会側から提示して、先生側の「正論」をぶつけてもらつんだ
そのあとで、学級委員それぞれの意見を、手上げて発言しまくつて
もらひ、ある程度盛り上がつてきたところで今度は、全校生徒側か
ら発言してもらつんだ」

語りつづけるおとひつちゃんを、僕は半分無視していた。でも顔は聞いている風に見えたのだろう。機嫌よさそうに見えたけれどもなにかひつかかるものが感じられて、僕はまだまだ用心していた。なんか、あつたのかな、いつもだつたらわざわざ教室まで来たりしないのにな。

「あのや、おとひちやん」

「ん? どうした?」

111

「この前、言つたことだ。おとひっちゃん生徒会引退するつて」「あれは絶対誰にも言つなよー。雅弘にしか話してないんだからな」「わかつてゐるよ。誰が言つかつて。たださあ、みんなはおとひっちゃんが生徒会長になるもんだつて決め付けてるよ。ショック受ける

「まさか、どうせ俺より総田を選ぶに決まってるさ。俺は人気ない
からな」「と思うな」

からな「

「だつてさあ、今朝も俺、やつきたんと」

僕はきわめてさらりとつぶやいたつもりだった。

つらがつてやられた、とこの風。

さつきたん、といつ言葉を口にしたつもりだつた。

予想通りだつた。

おとひっちゃんのまなざしが瞬間、さつきたんの方を見つめ、すぐそらした。僕の顔を少しこらむよつて、唇を軽くかんで。

「なんか、話してたな」

「あ、やっぱり見てたんだ？ なんだかおとひっちゃん俺に話したそうな顔してたけれど、声かけなかつたからさ、変だなあと思つていたんだけど」

やっぱりそうだ。僕は努めて冷静な振りをして続けた。

「さつきたん、おとひっちゃんが生徒会長になるもんだつて思い込んでいるみたいだよ。おとひっちゃん、五年生の時から一生懸命でひたむきで、嘘つかない性格だからつて、言つてたよ。総田の方はどうかわからぬけれど、俺たち小学校が同じだから、どうしてもおとひっちゃんの方を応援したくなるんだと思うんだ」。

おとひっちゃんは不意に僕の顔をじっと見つめた。

「俺、とってもだけいえなかつたよ。おとひっちゃんが、生徒会に残る気がないなんてわ」

とまどいがなにか、別の形になつてしまつたかのようだつた。いきなりだつたから驚いた。瞬きすらしなかつた。

「本当に、誰にも言つてないな。雅弘

嘘をつぐのは方便だ。

「もちろんだよ」

「それならいいんだ」

おとひっちゃんは軽く僕の頭をたたいて出て行つた。全く目的なしの三組訪問だつた。

他の奴もちょっと意外だつたらしく僕に尋ねた。

「おい、雅弘、おとひっちゃんどうしたんだろ?」

「さあ、何か気になることでもあつたのかなあ

僕は、自分にだけ分かるように、さつきたんを目で追いながら返事をした。さつきたんは女子同士で固まつてなぜか、『アルプス一

万尺』の手遊びをしていた。なぜだかやたらと最近、うちのクラスではやつている。つるさくはないけれど、「あるふすいちゃんじやーぐ、こやつの「うーえで」と歌う声を耳にすると、つい小学校時代にタイムスリップした気持ちになる。

それにしてもだ。どうしてみんな『氣付かない』んだろう。

総田もおとひつちゃんの弱点を探して責めてくるのはいいけれど、どうして特定の女子名を出したりしないんだろう。僕だったらためらわうことなくやつするだろう。それこそおとひつちゃんのアキレス腱だ。

水野五月。

英語の時間中僕は、当たられたところを音読し終わつたあと、ずっと考えていた。どうして、僕にははつきりと見えるものが、総田にも、おとひつちゃんにも、他の奴らにもわからないのだろうか。もし僕がおとひつちゃんを説得するとしたら、まずはおきたんに協力を依頼して、計画を練るだろう。おつか、三組学級委員の奴に変なことを言われたけれど、確かに僕とおきたんとはよくしゃべることが多い。それに、おきたんはおとひつちゃんが生徒会長にふさわしい奴だと、思つている。確認済みだ。

もちろん、「関崎乙彦の想い人は水野五月である」などとこう事実を教えたりはしない。ただ

「おとひつちゃんをなんとか、生徒会長にしてやりたいんだ。でも、総田を応援する奴が一年、三年に多くて不利みたいでや。やる気失つていいみたいなんだ。おきたん、悪いんだけど、一年の生活委員を代表しておとひつちゃんに、「座談会」の協力を申し入れてくれないかなあ。たぶん他の奴だと、裏があるとか思つて、おとひつちゃん受け入れないかもしねないからさ」

一年連続生活委員のさつきたんは、それなりに発言権を持つつるだらう。週番の仕事をきちんとこなし、制服も違反なしに似合つ着こなしをしてくる女子だから、先生たちにも受けはいいだろう。

また、生活委員会も今回の『生徒会主催座談会』と『フォーカダンス』には口を出してもいいポジションのはずだ。

さつきたんには、主に一年の生活委員から意見を集めてもいい、

協力するスタンスを取つてもいい。

そして。ここから。

最重要な点はこれだ。

「やつぱり、さつきたんとは小学校いつしおだし、五、六年一緒にやつたし、おとひつちやんも少しは気持ちを許すんじやないかと思うんだ。できれば、細かい資料とかそういうものちょくちょく運んでもらえないかな。きっと、みんなが協力してくれてるつて分かつたら、おとひつちやんの気持ちも変わると思つんだ。自分をこれだけ必要としてくれるとわかつたら、きっと、意地になつちまつたおとひつちやんも、もつ一度生徒会に残らうつて気持ちになると思つんだ」

さつきたんにさつさつといふ場面を頭の中に思い浮かべた。

僕の顔ははつきりと、『関崎乙彦の親友』面しているだらう。さつきたんは僕を見て、いつものように、おとなしめに笑うだらう。

「いいわ、佐川くん」

完璧だ。

ひとりでショミレーションにひたつて、たぶん僕はにやけていたのだろう。隣の席にいた学習委員に思つくりつねられた。

授業はたんたんと進み、学習委員の義務である荷物運びもそれなりにこなし、給食も終り、あつと/or間に放課後だった。五時間目で終わる水曜日は、すぐに家に帰ることができるので、反面、店の手伝いもしなくてはならないのが難点だ。部活をやつとけばよかつたと思うのはこいつ時だ。それほどやりたいのがなかつたし、それよりクラスの連中と遊んだりする方がいいと思つたから、何もしていなかつた。

もつとも最近は、おとひつちゃんにつきあつて生徒会室に入り浸ることが増えたけれども。今日は行こつかどうじよつか迷つた。

昨日は総田と、内密の電話をしてしまつたしな。

もしあとひつちゃんと総田のふたりが顔を合わせてゐるところ立ち会つて、俺か総田かどちらかが口を滑らせたら大変なことになるしな。

君子は危うきに近寄らず。今日はおとなしく帰らつと。

生徒玄関で靴を履き替えていたと、三組女子側の二台にそいつきたんがやつてきた。右手に週番用の腕章を持つてゐる。帰りもちやんと職員室廊下で整列して、挨拶するのが常だつた。本当に大変だと思つ。

「週番大変だよね、やつきたん」

けさに続いて、今日はやたらとしゃべつてゐる。

三組の連中がたまたまいなかつたので、変にかんぐられることもない。僕はさつきたんがつこり頷いて、先の丸い黒い靴に履きかえるのを待つてゐた。なんとなく、一緒に帰りたい雰囲気だつた。もつとも、他の女子だつたとしても僕は同じよにしていただろう。たまたまさつきたんとはかえる方向が一緒だつたし、英語の授業中に練つた例の案をなんとなく、試してみたくなつたといつもある。

「そついえば、帰り際に、関崎くんを見たわ」

「あいつ疲れ果ててただろ」

玄関をふたり一緒に出て、砂利道をゆっくりと歩いた。遠くのグラウンドでは野球部の連中がウォーミングアップ運動を声出しながら行っていた。そろそろ秋大会が近いからだろう。陸上部の連中もまた、グラウンドをゆっくりと走っていた。長袖シャツはいいけれど、学生服を羽織るのはなんだか暑苦しい。僕も襟を開けてのどを楽にした。学生帽はとっくに、かばんの中にほおりこんである。でもさつきたんと歩く時は、少しでも背を高く見せたい。

かぶつてみた方がいいかもな。

かろうじてにぎりひとつぶんの差しかない僕の背丈が情けない。保健体育で習つた通り、高校に入る頃には背が伸びるんだろうか。僕はかばんを開けて、学生帽をかぶりなおした。

ちよつと重たくてうつとおしいけれど、とつあえずはさつきたんよりにじきつぶしみつぶんくらい、背が高くなつた。

さつきたんは不思議そうに僕を見ていた。続けた。

「あれだけがんばつているのに、認められなかつたらいやね。でも、佐川くんが言つているほど、辛くはなさそうだつたわ」

「そつかなあ。たぶんあいつ隠しているんだよ」

「つづん、廊下で関崎くんが、私に聞いてきたの。生活委員会の中で、学校祭座談会の話は盛り上がつていて、その時は心配そうだつたんだけど」

さつきたんは口籠もりながら、しばらくうつむいたまま校門まで歩きつづけた。気になる。あの、女子に話し掛けるのが極稀なおとひつちやんが、なぜさつきたんに、そして何を話し掛けたのか、想像がつかない。

「私、今朝、佐川くんから聞いていたから」

「まさかあのこと話してなんかないよなー」

僕としたことが、あせつて声が荒くなつてしまつた。びくつとした風にさつきたんは一步立ち止まつた。

「ううん、そんなこと、私しない。佐川くん、内緒のことを教えてくれたってこと、私だって、わかるから」

さつきたんの声はきれいな細い糸のようだ。次に続く言葉は生まれて初めて聞く、凛とした響きのものだつた。他の女子のように語尾を延ばさず、あいまいな言い方でもない。僕の目をしっかりと見つめたままだつた。

こんなさつきたんを僕はいまだかつて見たことがない。
びくつとさせられたのはこっちの方だつた。

「関崎くんに話したの。私は、関崎くんが一生懸命努力しているところを、五、六年の頃から知つていてるから大丈夫だつて。他の男子だつて、みんな関崎くんのいいところを知つていてるし、応援してい

るつて。女子も」

「……で口もつた。そりやそうだ。僕も女子がおとひっちゃんをどう思つているかなんて想像つかなかつた。

「話すのは苦手だと思つてるかもしれないけれど、味方になりたいつて思つている女子はたくさんいるわつて」

絶句。しばらく、言葉が見つからぬ。

僕はさつきたんの言葉を頭に繰り返しながら、必死に質問を捲した。

なんとか見つかつた。

「つまり、さつきたん、おとひっちゃんに、味方だつて言つてくれたんか」

俺が頼むまえにか？

英語の授業中考えた計画を、さつきたん、一人で勝手にやつてくれたんか？

でもなぜだよ？

どうしてそこまで勝手にやつちやうんだよ。

「佐川くんが必死に、そうしてくれる人、探しているつて気がしたの。私、余計なこと、してしまったかな」

「今までまさかそういうことはないだりつと、考えないよつじていたことだつたのに、僕の頭の中ではするすると答えが出てきた。

ちつとも照れないで、いつも通りのやわらかい笑顔で側にいるさつきたん。自分でどういうことを言つてているのか、わかっているんだろうか。たぶん、わかっていないに決まつている。でなかつたら、こんなこと冷静に受け止められるわけがなかつた。

「そんなことないよ。おとひっちゃん、よろこんでくれただろ？」
「じまかし笑いをしながら僕は心でつぶやいた。

まさか、やっぱり。さつきたんは、俺が。

まずいよ、おとひっちゃんに気付かれたら、えらいことになるよ。予定外だよ、そんなこと。

僕がもつと鈍感な奴だつたらよかつたのかもしれない。話している感じだと、さつきたん本人も自分が何を言つたのかよく理解しないみたいだつた。勝手に僕が告白されたもんだと勘違いしていだけなかもしれない。

でも、このことはかなり前からのことだつた。

あくまでも僕の直感のみ、でだけど。

途中の横断歩道前で手を振つてわかれた後、僕はしばらく空を見上げて数回口をぱくぱくさせた。何かしゃべりたかった。薄くだいだいがかつた、さめた空に向かつて、どうしてか聞いてみたくてならなかつた。

いつもだつたら、帰り道一緒に歩くおとひっちゃんに、僕の感じたことや、頭をひねつたことなんかをずっとしゃべりつづけるのだろう。幼稚園の頃からそうしてきた。おとひっちゃんもないがしろにしないで、

「そうだよな、うん、わかる。雅弘の言つことわるナビだね」
と、自分の考えを懸命に語つてくれた。

「そうだねそうだね、おとひっちゃんの言つとおりだよね。

こつからそういう見えなくなってしまったんだろ？

おとひっちゃんはずつとひたむきなままだ。

ずっと僕を親友だと信じて、本音をぶつけ、受け止めてくれる。

でも、この僕はどうなんだろう？

総田におとひっちゃんの秘密をひとつ、暴露して裏工作活動をやらかそとかと、思つたりしている。さらに、おとひっちゃんには内緒で、『関崎乙彦は水野五郎のことを思つている』ことを他の連中にばらしている。その気持ちを利用して、さつきたんにひとつ、頼みじとをしようとまで思つていた。

結局、僕が意図しないうちに、さつきたんは勝手にやつてほしいことをやつてくれた。きわめつけだ。全く。

おとひっちゃんはさつきたんが僕の方に気持ち傾けているらしい、なんてこと、想像すらしていられないにちがいない。いや、絶対そうだ。同じ小学校で、同じ一年二組だから話をするだけだ、と思つているだろ？

おとひっちゃんは知らない。さつきたんが自分から話しかける男子つていうのはほんのわずかだつてことを。そのうちの一人が僕だつた。一緒に廊下を歩いて平気そうな顔をするのも、僕だけだつた。一対一でしゃべつていて、最も楽しそうな表情を見せる男子も、僕だけだつたようだ。僕は一度も、他の連中とさつきたんのツーショットを見たことがなかつた。

総田と約束していた通り、夜八時きつかりに僕は電話をかけた。別のクラスだつたのにどうして電話番号を知つているのは簡単だ。生徒会室の壁にちゃんと、連絡網が貼り付けてられていた。こつそり、全員分を手帳にメモしておくのは簡単だ。おとひっちゃんには気付かれないようだ。

よくあることだ。

僕はしょっちゅう、いろんな人の電話番号を集めて、よく友達に聞かれた時教えたりしている。

「佐川はたぶん、水鳥中学で一番情報網が広いんじゃねえか」とは、よく言われるのも、このせいだ。

店では相変わらずレジ閉めの声が聞こえる。せつせつとトントンてて電話を掛けた。まだ母さんはいない。

手短に終わらせなくちゃ、何を言われるかわからな。ワンコールした後、すぐに奴の声が出た。

「総田ですが」

「俺だよ、佐川です」

待ち受けていたんだろう。硬い声はすぐこせわらいだ。

「時間、きつちりしてるよな、佐川」

「もちろんだよ。俺の方から昨日切つたんだから。でも今、親がいるからあまり長く話できない、だから、手短」

僕はポケットに潜ませた紙きれを取り出した。

英単語を暗記しているふりをして、せつせつと、メモで整理していた。

「おー、いきなりなんだよ」

「一度しか言わないからさ」

早口で、総田の言葉を遮つた。

「今日、生徒会室でおとひっちゃんと会つたんだる。それで反応はどうだつた？ 少し、俺なりにできる」と、しておいたけれど、どういうことをしたか、言つたかなんて、決して言わない。いう氣もなかつた。

「俺の方が聞きたいことだ。佐川、いつたい関崎に向を言つたんだ？」

「昨日の今日だろ？ 一体、何をたくらんだ？」

「やっぱり、変な雰囲気だつたんだね」

「あれが変でないなんて、思うかよ」

総田の芝居がかつた語り口調に、僕は笑いをこらえながら聞いていた。

生で様子を見てみたかった。

「関崎ときたら、生徒会室に入つてくるなり、すっかり機嫌よさそうにしてさ、俺にフォーグダンスの流れについて、たずねてくるんだぜ。あの関崎がだぞ！ 今、俺も火気関係の問題で先生と最後の詰めをやつているんだけど、ちょっと、書類関係とか、時間の調整とかでいろいろつましいかなつたりしているんだ。先生がいろいろ細かいからや。ところが、関崎ときたら何したと思う？ 俺が書いている書類を勝手に見てさ、さらさらつて一筆書いた後、楽しそうに鼻歌歌つてコピーしにいつちまつた。あのあとは、俺がその紙を持つて、先生に出しにいつて一件落着になつたけどさ」

「おとひっちゃん、何を書いたんかなあ」

鼻歌歌いつつ総田に何か、手伝いをしたらしい。

「ちょうど問題になつていたのが、生徒会側の火に関する扱いのことだつたんだ。せつかくだから、ファイヤーストームやりたいだろ？ でも中学生には危険だからつて声が多くて、結構危なかつたんだ。だからどうやって話を通すかで、かなりもめててさ。そうだな、俺としては、先生とコネのある三年の先輩に頼んで、いろいろ袖の下計画をたくさんでいたりしたんだけどな」

袖の下。賄賂。その辺はさすが総田教授の発想だった。
でもなあ、何もわざと話を裏の方にひつぱつていかなくたつてやりかたあるだろうに。

総田は続けた。

「関崎が書き残した案がさ、『生徒会でホースを用意し、さらにペットボトル、およびバケツを全クラス分あつめて水を用意し、ファイヤーストームの間中、水を絶やさないようにします。また、火の側には生徒会役員が全員待機します。当日は水鳥東消防局の方に直接お願いして、フォークダンス前に一言、挨拶をお願いするというはどうでしようか』俺からすると、何考えているんだ、くそまじめに、と思うよ。でも、変なもんだな。先生たち、その案を見て、全員あつさりOKだよ。『まあ、そこまでしなくたつていいかもなあ』は、は、はつは、つて感じ」

さすが、おとひつちゃん、先生受けする案は見事だよ。
おとひつちゃんでなければ、思いつかないよな。

「おとひつちゃんなら考えそなことだよね」

少しだけ気持ちが楽になつた。鼻歌を歌いながら生徒会室を去つたおとひつちゃんの姿を想像するためまいがしそうだつた。そんな軽いのりのおとひつちゃんを見たことがない。

おやるべし、水野五円さま。

「なあ、佐川。お前、いつたい何をたくさんんだだ？ 僕がお前に話を打ち明けたのは昨日だよなあ」

総田は少しずつ、むぐつをいれるよつてむづくと間を空けて質問を打ち出しつづけた。

「やうだよ、昨日聞いたから、俺のできることを少しだけやつてみただけだよ。もしやまく行つていよいよだつたら、総田にも協力してもらひつもりでいたけど、もう大丈夫だよね」

さつきたんのことを言つべきかどうか、ちよつとだけ僕は迷つていた。でも、おとひつちゃんをここまで、舞い上がらせてしまつ総田にもいい影響を与えていたところをみると、もつこれ以上はいいだろうと思つた。付け加えて早く電話を切つう、決めた。

「でも、総田。しばらくおとひつちゃんの様子を見ていてほしいんだ。昨日総田の計画していた案は、しばらく投げておいたほうがいいなつて思つ。確かにおとひつちゃんは、一度ショックを受けるとお前の言つこと聞いてくれるかもしれないけど、そういうのが必ずしも、生徒会にとつていいとは思えないんだ。副会長といつ形でもいいから、総田は生徒会に残りたいんだる」

弱点と思われるところを突いて見た。

「言つたな、佐川も」

「もつと川上さんと付き合いたいんだろ」

「だからなんでそういう話題になるんだつてー、余計だぞ。あの女とどう関係があるんだよー」

やつぱみじ總田せ、川上さんのことになるとやたら向むくなる。おとひつちやこせ、わしきたんだし、總田は川上さんだし、なんだか副会長ふたりとも、回じいとを考えてこながつた氣がしてならなかつた。

似たもの回士だよ。

「どうひじにじい、僕が言いたいのは、お互に来期は仲良くなつていい方が、つまくこへんじやないかなあ。仮にだよ。おとひつちちゃんが生徒会長を引き受けてくれたとしたら、總田は副会長、立場としては逆転しちやうよな」

「心ならずも」

「わちのん總田はやんこと、絶対しなこと思ひなれど、おとひつちやんは舞じ上ると思つんだ。今みたいにさ。總田がうまくこきそつになり、つて思つたところをすぐに手助けしてくれると思つんだ。学年トップの頭脳は伊達じやないかい」

「どうせ悪かつたな。俺は万年一番だ」

ひがんでるひがんでる。僕は笑いたくなるのをのぞ奥に押し付けて続けた。

「どうせ利用するんだつたら、總田、とことん利用すればいいじやないか。ね、總田つて俺から見たら、魔術師だつて思う時がある。昨日、おとひつちやんの後輩をからかつてパニックさせたりや、あれはうまいよ。俺、あれはおとひつちやんに出来なこと思つむ」
ほめてほめてほめつくな。黙り込んだ總田の様子を、電話器の穴から感じ取るうとして僕は耳をぎゅっと当つた。

「お世辞言つてこると思つてゐかなあ。そんなことなじよ。俺、素直に思つたことを言つていいだけだよ。それだつたら、總田は得意技に磨きをかけておいて、先生受けする問題についてはおとひつちやんに任せてしまえばそれでいいんじやないかなあ。俺だつたら、たぶん、やうするよ。だつて、そつちの方が楽だもん」

僕の言葉に嘘はない。讃め言葉をうまく引っ張り出してこるものまた確か。僕はいつもやつだつた。讃め芸がうまことこのだらう

か。けなすよりも、むしろ相手のいことこりをみつけ、しゃべり尽。う。うつらの「ロビ『帝國』」が、『帝國』も機嫌こなはつていい。

おとひのやんと付合ひてマスターしたことでもあつた。

「佐川。どうしてそこまで、わかるんだ？」

探り出るよりは、綾田の声が耳に響いた方がちがちど、声に疲れがこじんで一歩。

「わかんない。ただ、なんとなく、俺の中でそう感じたから」

「もうひとつ。どうして、俺に協力しようって思うんだ。『関崎の

「親友たるでしゃばに」

俺から見たら、水鳥中学生徒会が一番いい形つて、おとひっぢや

「……」
「んが生徒会長、総田が副会長で仕事を分担してやつていく方法だと
思うんだよね。俺が総田の親友だったとしても、たぶん同じことを
言つてたよ」

僕は用意しておいたせりふを読み終えた。

総田はまだしゃべり足りないようだったが、両親が夜間金庫から帰ってきたのでさつさと切った。

かつたとつぐづく思った。やつぱり、それだけは最後の一線として守りたい。でも、これ以上話題が広がつていったとしたらたぶん、僕は口走つてしまつただろう。

別に、俺が言わなくたって、総田もそろそろ気付くよな。自分に言い聞かせた。

自分は言い聞かせた

きっと総田は、おとひつちゃんが舞い上がりつている理由をうすうす感じているはずだ。たまたまさつきたんの姿を目撃しなかつたから、気付かないだけであつて、これから先さつきたんがさらに行動をエスカレートしていつたら、もう隠しようはない。それは僕が、さつきたんに対してもう接していくか、にもかかっている。

さつきたんが僕へ、『同じ小学校出身の佐川くん』とこう感情を大切に抱えてくれているのは、伝わってくる。本音をいつと、嬉しい。さつきたんは性格もいいし、親切だし、女子の友達としてはたまらないいい人だと思う。

好きとか嫌いとか恋だとか愛だとか、と問われると困る。全く、そんな感情なんてないのだから。

もちろん僕だって男女子の間に、いろいろ複雑怪奇なものがあるのは知っているつもりだ。おとひつちゃんを見ていればよくわかる。でも、僕には全く、そういう気持ちが湧いてこない。小学校時代の単なる仲良し同士として、一緒におしゃべりできるだけで楽しい。それだけだ。

まあ、僕の方としてはそうとしか、言ことづがない。

もし告白されたりしたら? やつぱりそういう言づしかないだろ。付き合おつなんて思わないから、と。

問題は全く別のところにある。

『佐川雅弘が関崎乙彦の親友』であるとこういふとを、知らない奴はほとんどいないだろ。僕もおとひつちゃんもよく認めていることだ。

もちろんさつきたんはよく知っているはずだ。

もし、おとひつちゃんが、この事実『水野五郎の片思い』している相手は佐川雅弘である』ことを知つたら、どうこう反応を示すだろう?

おとひつちゃんと付き合ひの長い僕には大体想像がつく。荒れるなんともんじやしまない。

学年トップから滑り落ちるくらいの衝撃だろ。

さつきたんへの思いは、僕の田が腐つていかない限り、四年間ずっと続いているはずだ。総田の言つたとおり、さつきたんの一言ですっかり舞い上がり、天敵に対してもくもくもつなお手伝いまでやらかしてしまった始末なんだから。

だけど、実は僕のことを、といつことに気付いたとしたならば。
ダメージは想像つかない。

僕が望んでいなくとも『女子』がきっかけで友情がこなごなにな
るなんて、しゃれにならない結末、絶対に避けたい。

次の日も、そのまた次の日も、おとひつちやんの機嫌はすぐぶる良好なままだつた。

総田が啞然呆然としつつも、おとひつちやんの好意ある『フォーケダンス企画』へのアドバイスをありがたく受け取つてゐるらしいうことも聞いた。誤字脱字および会計関係の書類なども、川上さんが苦労しているところをさらさらと手直しして、黙つて渡してくれたといつ。

別に、小学校の頃から知つてゐるおとひつちやんの、ふつつの部分を見せているだけじゃないかと、僕は思つけれども。

そういう顔を生徒会室で全く見せられなかつたといつことは、相当、おとひつちやんも心がすさまくつっていたに違ひない。

もちろんその陰には水野五月女神様がいらつしゃることも確かだつた。

僕が仕組むことのできる、唯一の方法だ。

さつきたんが週番で職員玄関に立つてゐる時を見計らい、「今日も大変だよね、さつきたん」

と、声を掛け、一緒に教室へ戻る。必然、噂になりそうだけど、かえつて意識すると思う壺だから堂々としている。

さつきたんも「立派なものだ。決して、僕と話した内容を他の女子にはばらさないようだつた。

別に話したことってそんなにすごいことではない。

「さつきたん、女子の友達同士つてどうなのかなあ。やつぱり友達のことを心配したりするだらう? 僕もばかみたいだなつて思つけど、やつぱりおとひつちやんのことが、心配なんだ」

あえてさらりと、でもため息をつきながらつぶやいてみた。

「佐川くんと関崎くん、本当に仲がいいものね

「だから、何とかして、あいつを生徒会長にしてやりたいんだ。こんな、失策続きの副会長っていう汚名を、晴らしてやりたいんだ。あいつがやめるなんて言つたら、絶対にその『汚名』は晴らせないんだからさ」

「そう。そうよね。私もそう思つわ」

一週間に二回程度、ちょこっとだけしゃべることにどめた。あまりたくさんやらかすと、さつきたんも馬鹿じゃないから気付く可能性が高い。僕が大切な親友のことで悩んでいることを、さつきたんに伝えればそれでいい。ずっと悩みつづけていて、いい方法が見つからずとこゝ風に振る舞い、さつきたんの顔を曇らせる。

不思議なことにさつきたんは、かららず僕の望んだ通りの行動を取つてくれた。

「佐川くんが内緒にしているから、選挙のことは話さなかつたけれど」

と前置きをつけて、さつきたんは話してくれた。

「さつきたんも、関崎くんとすれ違つたの。なんだか、少しづつだけど元気を取り戻していよいよつす。私の顔を見て、ちょっとだけ笑つてくれたわ。最近はそんなことなくて、田をそらされていたんだけれど、やっぱり女子の反響が悪いっていつのを気にしていたのね」

おとひつぢやんがなぜいままでさつきたんから田をそらしてきたか。

その理由は簡単だ。

さつきたんの顔を見ると自分が真っ赤になつてしまい、意味不明なことを口走りそつになるからに決まつていて。

「生活委員会でも、学校祭の制服規定問題をもう一度考え直して、生徒会に意見書を提出しようかって話が持ち上がつていてるの。一年生の男子には、私たちと同じ小学校の人が多いから、気持ちも伝わるのね」

「さつきたん、その意見、誰が言い出したんか」

「私。ううん、手を挙げていつたわけじゃないの。合間のおしゃべ

りで、なんとなく、女子と男子が盛り上がり、関崎くんを助けてあげようつてことになったの」

残念ながら生活委員会がどういう雰囲気だったのかはわからない。ただはつきりしていることは。

さつきたんが僕の望むことをみんな、読み取つて実行し、想像以上効果をあげてくれたつてことだけだ。

そんなこんなで一週間がたち、二年実力テスト、および担任の先生との面談、その他いろいろなことが続いた。

水鳥中学の場合、クラスの活動発表などはほとんどない。授業でこじらえた鉄の状差し、マガジンラック、女子は手芸品、クッキーなどを売るにどどまつていた。

うちの母さんははじめとするPTAの人たちが、教室利用ということで食堂をこじらえてくれた。チケットは前もって配られている。おなかがすいた時は、学校で注文したドーナツのセット三個で100円ものなどを、チケットで購入するようになっていた。

唯一一部活で参加させてもらえるのが音楽部の連中だらう。全校生徒が体育館に詰め込まれて、延々と一時間半、演奏を聴かされる。音楽が好きならそれでもいいけれど、僕はすでに寝るだけだった。

一日目に弁論大会。

去年までは三田田のメインイベントだった。

もちろんそれをずらすためにおとひっちゃんと総田を代表とする生徒会が力を尽くしたのはこうまでもない。

各クラス一oczつ『僕の主張』『私の主張』という名田で作文を読み上げる。クラスで一応は取り捨て選択を行つべく、学級で発表してもらうのだけれども、結局決めるのは担任の先生だ。先生達を攻撃するようなものではなく、あくまでも『自分』の内面を優先した内容を選ぶ傾向がある。ま、それにおとひっちゃんはむかついたつてことだ。自分の意志ではなく、先生たちの意志で弁論の原稿を作つて、いったいなんになるんだと書いたのが一年前のことだった。

生徒会は初日、一一日の行事にはほとんどビタッちしていないらしかった。

教室からの移動指示を出したりする程度じゃないだろうか。始まりと終りの挨拶くらいだ。最初は総田、終りの挨拶はおとひっちゃんにすることに決めていたらしい。

僕は行事を成り行き任せに眺めていた。

たまにさつきたんへそれとなく話かけたりする程度だつた。

おとひっちゃんと話す機会も一週間くらいは全くなかった。そう言うとみな驚く。僕とおとひっちゃんがいつもお神酒德利のようにくつついていたことを知つていてるからだらう。

忙しい時に顔を出されて、下手におとひっちゃんに怒鳴られるのは勘弁してほしい。

また、総田との間にまた挟まれて、顔色伺いあうのも疲れるからやめたい。

どこの部活にも顔を出していなくて、かといってエスケープするほど度胸もなく、ただみんなと仲良くしゃべついていたい、そんな連中が二年三組の教室にたむろつていた。五名くらいがぼんやりと田差しの薄れ行く中、机をかためてトランプをはじめていた。ばばぬきらしい。

僕は面子をみきわめた後、すぐに混ぜてもらつことに決めた。
男子三人、女子三人。カードのテンを切つているのはさつきたんだった。

生活委員も今のところはお仕事が明日までないらしい。

僕が来るのを見て、戸惑い加減に目をまんまるくしていただけれど、すぐにつのものやわらかい表情に戻つた。僕は隣に坐つた。

トランプゲームは僕も結構強い方だ。別に考えたことなんてないけれど、いつのまにか僕の方にいい札が揃つてしまい、勝手に上がつてしまつ。理由はわからない。トランプの神様がついているとし

か思えない。さつさと上がりを決めた僕は、となりのさつきたんの札を覗き込み、ちょこちょこと助言してやつたりしていた。さつきたんの方はといふと、運が向いていならしく、なんどもジョーカーを引いてしまつ。

「ずっとこうなの。調子が悪いみたい」

「でも顔に出したらだめだよ。知らん振りして、持つていなふりをしなくちゃ」

さつきたんの強みは、ジョーカーを持つていてもそれこそ『ポーカーフェイス』を保ちつけられることだらう。僕の助言を素直に聞いて、さつきたんは三番田に上がることに成功した。

「そりやあ、水野さん、佐川つていう強い味方がいるんだもんなあ」「そうだよ、佐川強すぎるぜ。か、やーめたやーめた。金かけてねえのにこんなことやつてたつて、不毛すぎるもんな」

「俺、入つたばかりなのに、すぐにやめるなんてひどこよ。あーあ。なんのために来たんだろ」

トランプを片付ける男子学級委員に、これみよがしにいやみを言うが、誰も聞いてくれない。わかつていてる。僕はやたらと勝負事に強い。自慢じやないけれど、おとひつちやんにもトランプやオセロなんかで一度も負けたことがない。総田とはまだ手合わせしたことがないが、たぶん勝てるだらう。ああいうのは気合で勝負だ。

すでに総田と僕との力関係は均衡しているか、むしろ僕の方が勝つていてる。

そういう相手と勝負するのは得意だ。

でもあまり、やりすぎると今のように、誰も相手にしてくれないという問題がある。しかたないので、僕も、チケットで引き換えてきたドーナツを開き、食べながらだべつていた。さつきたんも一緒だった。

晴れすぎた空の影が、教室の窓いっぽいに流れていった。ここに残つている連中はみな、派手に騒ぐでもなく、仲間はずれにされるで

もなく、ただ疲れて休みたくなつた連中ばかりだつた。他の同級生たちはすでにグラウンドで勝手に遊んでいるか、展示を見て回つているかだろう。もしくは帰つたりして。

僕の隣で黙つて聞いているさつきたんに、話を振つた。

「学校祭、楽しみにしてた？」

「つうん、早く帰りたい、終わつてほしいな」

正直なところだと僕も思つ。ませつかえす奴がいた。

「何言つてるのよ水野さん、明日はとうとう、フォークダンスよ。フォーカダンスのためにみんな、燃えているって知つてているでしょ」

一部、受けたて笑う者あり。僕とさつきたんはきょとんとした顔のままだつた。

「そんなに燃えるものかよ、フォーカダンスつてさ。なあ、佐川。たかがマイムマイムだけだろ」

正確な情報が流れてきていないらしい。生徒会サイトから得た情報によると、

「オクラホマミキサーもあるよ。あと、ジェンカとトロイカ」

ジェンカは、五人一列に並び、相手の両肩に手を置いて、右、右、左、左とステップを踏む。前飛び、後ろ飛んで、前に三回飛んで進む。分かりやすいけれども、あまり期待できない。というのがみんなの意見だ。

トロイカの方がまだましだという声も多い。参列に列を組んで真中の人を入れ替わり立ち代りする。三人で組むから、本来の目的は達せられないだろう。

両隣の人と手をつないでファイヤーを囲むマイムマイムにいたつては、もうなにを言わんか、だ。

「要するにだ、一対一で踊れる奴つていうのは、オクラホマミキサーだけつてか」

学級委員が手を打つて僕を指差した。

「しかも、そんなにたくさん曲があることは、お田端での相手と手をつなげないうちに終わるって奴ですよ。きっと

「生徒会も盛り上げるだけ盛り上げておいて、実は、そのところが甘いよね。佐川くん、親友の副会長さんに言つておいてよ」「おとひつちやんは座談会だけだよ。そんなこと言つたら俺、生きて三組の教室に戻れないよ」

「ここにいる連中はみな、小学校が一緒だつたから、関崎ひ彦を『おとひつちやん』と口にしても、妙に思われない。僕は田で合図をしながら話をそらした。

「女子つて何が楽しみでフォークダンスに盛り上がつているんか?」「そりゃあ、同じ学年にお田当ての人がいればさ、燃えるかもつて思うけど、私一年の女子つて、あこがれの人気がほとんど三年とかじゃない」

「あ、おめえはそうなんだ」

「話逸らさないでよ。それに、同学年だけで輪を作つたとしても、五クラスみんな総当りしないでしょ。手をつなげないしふた終わつちやうなんて、なんか淋しいよね」

さつきたんがそそ、と口を挟んだ。

「でも、当たりたくない人も、ひそかにいるかもしれないわ」「僕とふたりの時に聞いたことのある言葉。雰囲気を覗らせたくなかつた。

「それは言いつこなしだよ、さつきたん」

ひとしきりフォークダンスねたで盛り上がつた。

僕にたしなめられたさつきたんはこつこり頷くと、黙つて耳を傾けていた。いやな顔しないで、僕の言つことを素直に聞いてくれている。

不思議で、ちょっと怖かつた。

さつきたんが、ではない。僕の口にする、言葉の力が、だつた。

「そつそつ、でもと、その前に関崎副会長の命運がかかつた『教師VS生徒』の座談会があるじゃない。そこは三組学級委員の君、緊張してない?」

「よいよ来た。僕は身構えた。

いくらここにいる連中が小学校時代からの友達同士だからといって、おとひっちゃんをからずしもかばおうとするわけではない。

思つたとおり、学級委員は舌打ちした。

「司会がおとひっちゃんだつていうのがなあ、哀れを誘つといふか」「だつて企画を立てたのがおとひっちゃんなんだろ。本当だつたらいかにも司会なれしていそうな総田副会長あたりに任せればよかつたのについて思うけど、でも、なあ」

僕に質問を振る。

「あのな、佐川、生徒会もそこんところの人選考えてなかつたのかよ。関崎のおとひっちゃんがだぜ、あがらないで、エキサイトしないで、マイク持てるかつて言いたい」

「切れたら怖いのがおとひっちゃんの性格だからな。俺もそう思つおとひっちゃんから聞いたところによると、仕切り役は関崎副会長すべてだといつ。各クラスの学級委員が壇上にすらつとならんで座り、各クラスの意見を読み上げる。その後先生側の意見と交換したのち、こきなり体育館で聞いている誰かから意見を募り、たまには抜き打ちで意見を請う。

この辺は僕も話してかまわない内容だから、ペラペラとしゃべつた。

「ふうん、おとひっちゃんの情熱が真つ赤に燃えていぬことは雅弘の言葉でよーく、わかつたよ」

「だら、本当に情熱、そのものなんだ」

「でもなあ、自分にできることと出来ないことの見分けくらい、はつきり付けるよと俺は言いたいね」

三組学級委員は、座談会一日前になつてよつやく、熱く、語り始めている。こいつもちょっと勘違いしているよな、と思いつつも僕はさつきたんと一緒に聞いていた。たまに相槌を打つた。

「おとひっちゃんは偉いよ。本当に頭いいし。でもな、人前で仕切りが得意な奴、じやないよ。あいつ。しゃべりも下手だし、早口にな

るし、いきなり議論吹っかけられたら冷静でいられないし。な、雅

弘。そういう奴が司会なんてやってみる、崩壊するぜ」

「じゃあ、どうすればよかつたと思う?..」

「まさしく聞いてもしようがない。でも聞く。

学級委員は確かに、でも遅すぎる答えを返してくれた。

「水鳥中学にだって放送委員会っていうのがあるだろ。その誰かに、まかせちゃえばよかつたんだよ」

「まさしくながらびつをつけてくる活潑なご意見を胸の中にしまいこんだ。

があがああと、天井のスピーカーが鳴った。

耳障りにきゅうんと、マイクの悲鳴。

「本日の学校祭は、あと三十分で終了いたします。学校に残っているみなさまは、どうかお早めに展示物をじらんください。なお校内に残っている生徒のみなさんは、各教室、もしくは決められた教室に集合してください。決して、そのまま、帰らないでください」

これだつて、もう遅い。

僕たちのように暇を持て余している連中でなければ、とつぐに帰つているだらうに。日は翳つていき、やがて影濃く、冷たくなつていつた。トランプをしまじこみ、自分の席について、大声で言葉を交わしつづけた。ひとり、ふたりと教室に戻つてくる連中もいる。だんだん、最初の五人との話題が届かなくなり、別の奴との会話が中心となり、やがて先生により中断となつた。

「明日は朝八時半に集合。九時から、生徒会主催による「座談会」だ。学級委員一名は、朝の会に出なくともいいから、真っ直ぐ体育馆に集合するように。そして昼の展示が終わつてからは、学校祭最後を締めくくる、フォークダンスが行われる。いいか、生徒自身の手で取り仕切る、初めてのことなんだぞ。お前らももつと、情熱を見せてみろ」

先生の方がおとひっちゃんたち生徒会の情熱に影響をされているんだと思つた。

だから、なんとか盛り上げてやりたいと思つているんだと思つた。
どうして、肝心要の生徒たちがこいつまでしらけているんだと、不思議がつていてるだろ？

僕は、ほんやりと聞き流しながら、わきたんの方を見た。
うんうんと頷いてる。

本当にさつきたんつて、「ミス校則」だよな。

似合う格好が校則どおりの格好だよな。

おとひっちゃんは別にそういうところを好きになつたわけじゃないと思つたけど、でも、自分の味方がこいついう形でいてくれていいつてのは、きっと、舞い上がるほどうれしいんだ。

帰りの会が終わると僕は、すぐに教室を出て、ひざびたに生徒会室に寄つてみた。

やつぱり明日の大仕事だ、一回くらご、おとひっちゃんに会つておきたかった。きっと修羅場だろ？ 僕なんかと馬鹿話する余裕なんてあるわけないだろ？ だからこゝで、安心して声が掛けられる。もし総田がいたとしても、せわしなくしゃべつてさつさと帰るから、僕と総田との関係についてあまつとやかく言われないだろ？

僕の考えは、はつきり言つた。甘かった。

「おとひっちゃん、いるかな？」

おそるおそる覗いてみたところ、おとひっちゃんらしき人の影はなく、総田だけが背中を向けて立つていて。まあいか、と声を掛けた。

「総田、お前だけか？」

「んだよ。佐川、何の用だ」

ずいぶん冷たい声が帰ってきた。機嫌悪そつた。これは早めに退散することに決めた。

「別に、ただ、こよいよ明日だなと思つて、覗きにきただけだよ」「たぶん誰も、しばらくこねえよ。佐川。ジュースあるから飲んでけよ」

「喫茶店みたいなことしているね」

僕は言われるままに敷居をまたぎ、総田の側に席を取つた。まだ日差しが落ちない中、他の生徒たちがぼつりぼつりと帰つていくのが見えた。総田の肩越しからは、カラスのたむろつているらしい大きな木がちらちらと覗いた。があがあと、『あ』の音をにじらせたような声で鳴いていた。

「あのな、佐川。お前、どうやって関崎を変えたんだ?」

ぬるくなつたサイダーを一本、缶のまま置いた後、総田は僕の顔をじつと見つめながら尋ねた。

「それは言えないよ。俺だつてそんなにおとひっちゃんが、協力的な奴になつたなんて想像もしてなかつたもん。多少小学校時代から、お互いのことを知つていてるから、強みも弱みもつかめないわけじゃないよ。でも、おとひっちゃんが楽しそうに協力してくれているんだつたら、そんなこと聞かなくたつていいじゃないか」

まだきづいていないのか、と半ばあきれ顔をしていたのかもしれない。

総田は歯を食いしばつたような表情で、口を真一文字にした。

「わからないわけじゃねえよ。たぶん、ああいうことかと見当はついた。でもな、関崎を隅から隅まで知つてている佐川でないと、出来ないことだつたんだろうなあ。やつぱり」

「どんなことだと思つた?」

直接総田の口から聞きたくて僕は問い合わせた。なんだか総田の様子は、自信なさげに見えた。僕から目をそらすと、じつと天井を見上げ、握りこぶしを作り、もう一度口を引き締めた。

「さつきまで、関崎と最後の詰めをやつていたんだ。たいしたことじゃない。あんときまでは、今までにないくらいうまく話が進んでいたんだ。座談会の時には俺たちも椅子を出す手伝いくらいはする

とか、フォーアクダンスの時は水を運ぶことをするとか、いろいろとか。
あれだけ関崎と普通に話をしたのは初めてだってくらいだった

「ふうん、そうなんだ」

相槌を打つた。

全部過去形で話しているひとつひとま、そんないい雰囲気が壊れた
つて証拠だ。

「あいつが純粹すぎるくらい純粹に、学校祭を成功させたいと思つ
ていることはわかつたよ。単なる規則大好き馬鹿じゃないというこ
とも。佐川が懸命に関崎のことをかばつのも、わからないわけじや
ない、つて思った」

「でもそれがどうして」

僕はさらに理解できず総田の顔をうかがつた。ぬるいソーダは気
が抜けていて、ほとんど砂糖水のような感じだつた。甘つたるい。

「佐川。わかつたよ」

総田はほおに笑い皺を瞬間、こじらえてつぶやいた。

「すべてをぶち壊すのは、やつぱり、女子つてところだな」

総田は読んだな。

僕にはぴんときた。

「女子、なんだ」

しきじつたとばかりに舌打ちしながら、もうこちど総田は上を見

上げた。

「俺も油断していたよ。俺だけが気付いていれば、あとはうまくや
つていけると思つててさ。のんびりとかまえていたら、あの女が全
く何を考えてるんだか」

「あの女つて、川上、さん？」

「そうだ、うちの会計だ」

総田を怒らせるなにかをやらかしたらしい。想像がつかない。黙
つて聞いていた。

了解と受け取つてくれたか総田は一気にまくし立てた。

「たぶん俺たちの雰囲気が和やかだつたから、調子に乗つたんだろうな。ぽろつと言いやがつた。『あれ、あそこに水野さんがいるよ』つてな」

「水野さん？ うちのクラスの生活委員？」
とぼけたところ、あつさりと言い返された。

「わからないわけないだろ。お前が仕組んだことなんだからな」「どうしてだよ。水野さんとなに関係あるんだよ」

困つた時は徹底してとぼけるのが僕の流儀だ。さらに舌打ちを二回、総田は聞こえがしにして続けた。

「俺もだいたいそういうことじやないかと思つてたさ。最近、生活委員会の協力があつて助かつていて、一年生は協力的だとか、自慢げに話してたし、それをかこつけて、水野さんに自分から話かけているところを見たら、そりや、怪しいと思つみな。二日前にやつと俺も気付いた。馬鹿だよな。俺が馬鹿なのは、そのことを自分の中にしまわなかつたことだよ。全く大馬鹿ものとしか言い様ねえよ。佐川、そう思うか」

「つまり、総田は、水野さんのことを、言つてしまつたってことか？」川上さんに

「油断したよ。情けねえ」

「ちなみに、どこで？ 教室で？ それとも生徒会室で？」
「そんなことは関係ないだろ！」

一瞬だが、総田の顔が一気にどす黒く染まつた。

色が黒い奴の顔は、赤くならな。

「総田が油断するつてことは、きっとふたりつきりの時だつたんだね」

僕はゆつくりとたたみかけた。ここまで言われたら聞かなくちゃ終わらない。

「何していくかなんて聞かないけれど、きっと油断してしまつたくなるよ、霧囲気だつたんだね」

「佐川、お前何を言おうとしてるー！」

「何も言つ氣なんて、ないよ。たださ。ちよつとだけほつとしたよ。血相変えた総田。でも僕は、ちつとも怖くなんてなかつた。」

言つたといこと、ここでこつてやめり。

ちよつとくらこ、反省してもらつたつていいだろ？

「総田も、おとひっちゃんも、やつぱりおんなじなんだね。好きな子には油断しけやうんだ」

「俺のどじがあの女を……」

言いかけた総田に僕はこいつと笑いかけた。

「大丈夫、言わないよ。ただ、おんなじことをおとひっちゃんは思つたんだよね。それでおとひっちゃんは、川上やんの言葉にじつ反応したん？」

一番聞きたいことこりはそじだつた。総田は頭をかきむしりながら、吐き出すようにつぶやいた。

「ぶつちぎれた。『お前らが、仕組んだのか』つて、つぶやいて、シャープを叩きつけて出て行きやがつた」

もひつひとつ、確認しておきたいことを僕は訊ねた。

「『ここおとひっちゃん出て行つたの？』

「しらねえよ。ただ、それでもほとんどフォーカダンスの実行予定はまとまつたんだ。関崎の手でほとんどまとめられたようなもんだ。俺も座談会の椅子運びについての手伝い準備、手順をまとめたし。一応、ほとんどの準備は終わつた段階でよかつたよ」

仕組んだか。

おとひっちゃんは単純だけど馬鹿じゃない。

これは早急におとひっちゃんを探さなくてはならない。

「総田、無事に座談会とフォーカダンスは開けそうな状態なんだね。そつこいとからすると」

「幸い、すべてが片付いてからだからな。しかし、佐川、俺は馬

鹿だよな。おい、そう思つているだろ佐川」

僕に何度も問い合わせる総田に対して、どう答えればいいのだろう。
そうだ、その通りだ。

「おとひっちゃんをどこかく探すよ。総田はこれ以上動かないでいた方がいい。せっかくここまでうまくこつたんだ、絶対成功させなくちゃ」

僕は大急ぎで生徒会室を飛び出した。

川上さんの口から漏れたということは、恐らく僕と総田がたくらんでいること今までばれている可能性がある。つっかりそれがばれてしまつたら、もう手の施しようがない。

でも僕が徹底して

「そんなことないよ」

と言い放つたとするならば、なんとかなるんじゃないか。そんな気もしていた。

おとひっちゃんがいそうな場所となると、どのへんだろう。思いつくところをすべて回った。図書館、職員室、技術家庭室、まさかと思うけれども体育館、グラウンド、一通り見て回つたけれどいかつた。しかたないので次は空き教室を回つた。たぶん、三年と一年じゃないだろうかと思ってみたが誰もいない。あきらめかけたところ、灯台下暗し。一年三組の教室にあかりが灯つていた。だいぶ闇も濃くなってきたせいだろうか。僕は無我夢中で教室に戻つた。四組のおとひっちゃんが、三組にいるなんて、見られたら、大変だ。盗んでいるでないかと思われるだろ。

「おとひっちゃん、どうしたんだよ、こんなこといたら

「雅弘か、やっぱりいたんだ」

おとひっちゃんは教壇の上に腰掛けっていた。膝を抱えて真っ正面を見つめていた。僕の顔を見てかすかに笑つたのは、たぶんばれていないから。少しほととしたのを隠しながら僕はおとひっちゃんの隣に腰掛けた。

「さつき、生徒会室に行つたら、おとひつちやんがどうかいつちやんたつて聞いたから、焦つたんだよ。俺も、おとひつちやんが考えていることつてなんとなくわかるから」

「つまく言えず、息も切らしたままだつた。

「やっぱし、雅弘だけなんだよな。俺の味方つてさ。雅弘、やっぱり俺は馬鹿だと思つか？　たかが学校祭に燃えている馬鹿だと思つか？」

「そつは思わない。僕は首を振つた。小学生みたいに子供っぽい振りをした。

「でも、みんなはそう思つてないんだよな。水鳥中学の生徒一同、みんな、俺のことを物笑いにしているんだよな。分かつてたよ。それくら」

「ある程度は正しく、またある程度は違つ。

「おとひつちやん、違うつて。そりやみんな、人によつては考え方違う奴もいるかもしれないけどさ、三組の連中もみな、おとひつちやんを知つてゐる人たちは、がんばつてほしいつて言つてたよ。うん、たつきたんとがとも一緒にトランプしてたんだけど」

「おとひつちやんの顔がかすかにゆがんだ。

「小学校の頃からおとひつちやん知つていたら、誰も誤解なんてしまつたよ。俺たちが知つてゐるのは、生徒会に入る前から一生懸命にやつておとひつちやんであつて、生徒会副会長つて顔だけじゃないんだからさ」

「そつ言つてくれるのは雅弘だけだ。俺は救いようない馬鹿だよ。最低だよ。なあにが、味方なんだよ。結局、舞い上がつていた俺が馬鹿じやねえかよ」

「どうしてなのかは聞いた方がいいだろつか。僕は迷つた。

「おとひつちやんの口から『水野さん』といつ言葉を出させるべきか。

「舞い上がりたくなるようなことが、なにかあつたんか？」

「おとひつちやんは、そつと周りを見渡した。僕とおとひつちやん

以外誰もいないことを確かめた上で、

「自分の考えていることを隠せない性格だつて、このは、前から親や兄貴に言われていたし分かつてゐる。やうやく、どうしようもない単細胞だ。ひとつのことしか見えなくて周りに迷惑かける人間だつてこともわかるさ。そうだよ、総田の言つことは正しいんだよ。だから、校則改正の時だつて、俺は馬鹿なことをやらかして、しくじつたわけなんだ。でも、その理由を勝手に想像して、突きつけることはないよな。ひでえよ。ひどすぎる」

「いつたい、おとひっちゃん、何を言われたんか？」

図星の言葉を言い出したくて口があががする。僕は待つた。

「ちくしょう、人を馬鹿にしやがつて！」

「え？」

おとひっちゃんはうつむいたまま顔を上げなかつた。ひくくつぶやきつづけ、息を荒々しく吐いた。

「俺があいつらよりも女好きに見えるのか？」ちくしょう。なんであんなやつらに俺だけこけにされなくちゃなんねえんだよ。ちくしょう、総田の野郎、ちくしょう……」

身動きが取れず、おとひっちゃんは僕がいることすら忘れているようだ。おとひっちゃんは両腕に顔をうずめたまま同じ言葉をつぶやきつづけた。その声がだんだん、くぐもつて聞こえ、鼻を激しくすすり上げる音に変わつた。おとひっちゃんの、こさこさが錯乱した怒りの放出を、僕はただ黙つて見つめていた。

泣いていないのかもしれない。涙を流していないのかもしれない。内から突き上げる悔しさが、いつしか涙に化けただけなのかもしれないなかつた。

おとひっちゃんはその後、僕と帰つた。途中までずっと無言で歩きつづけた。

なんと言えばいいかわからなかつたし、それ以上に僕のしたことがばれるのではないか、が怖かつた。

学校祭最終日の朝、僕はおとひっちゃんを家まで迎えに行かなかつた。当たり前だ。生徒会役員は朝六時前後から生徒会室に詰めているはずだつた。でも、昨日の今日だ。

はたして総田とおとひっちゃんはうまくやつていいのだろうか。

総田は大丈夫だろう。あいつは生徒会副会長としての顔と、ふだんの感情をぱつきり分けることができる。でもおとひっちゃんは違う。あれだけ痛い思いをして、簡単に立ち直れるタイプではない。

あまり考えていると僕の方も立ち直れなくなりそうなので、あえて何も考えず一年三組の教室に向かつた。三組の教室は展示に全く使われていない。自分たちの席に坐つて、

わくわくしている奴もいるのだろうけれど、やつぱり座談会が最初にあるとあつて、ちょっと面倒くさそうだった。

とつぐに三組学級委員は体育館に姿を消していた。

校内放送が流れた後、指示に従い自分の椅子を抱えて、廊下に整列した。男女一列に並び、体育館に入場した。いつものことながら男子は前列、女子は後列。僕は前から一番目だから、かなり奥の方だった。脇に控えている学級委員の連中、生徒会役員一同の様子は一目瞭然、いい場所だ。

おとひっちゃん、どこにいるかな？

昨日のこと、やっぱりひきずつているかな。

一年から二年まで、椅子を全部運び終わり、席についたといひで、校長先生からの挨拶が行われた。かなり長い。聞き流す。

その次に、水鳥中学生徒会副会長・関崎乙彦の『座談会開始にあたつての挨拶』が始まつた。

無表情のまま、おとひっちゃんは脇を大股に歩いていった。手を振つて合図したけれど氣付かないようすだつた。舞台の袖には総田、

川上さん、その他の生徒会役員一同が待機していた。総田は後ろに手を組んで軽く両足を広げ、『休め』の姿勢のまま壇上を見上げていた。『悪の根源』川上女史はとこと、髪を物憂げにかきあげて、体育館をぐるりと眺めていた。

壇上で紙をひろげ、田を落としたまま読み上げるおとひっちゃん。マイクに口を近づけ過ぎだ、わんわんと響いた。

「水鳥中学生徒のみなさん、本日の座談会に参加していただきまして、ありがとうございます。本日は、生徒の手による、生徒の本当に求める企画を行うということで、第一部に『生徒と教師』の本音を戦わせる座談会、第二部に『生徒たちの交流を深める』意味でのフォーアクダンス。一本立てで行うことになりました」

ここで息を次いだ。脇で総田が、「マイクをもつと離せ」と手で懸命に合図している。

おとひっちゃんは『気付かない様子』だった。集中しているのだろう。「今年は『服装規定』の改正など、僕たちにとつては大きな出来事がありました。水鳥中学の生徒が本当に求めていることは何か、それを僕達生徒会役員一同は、必死に探してきました。そのひとつが、『服装規定改正』という形で残つたことを僕は誇りに思つています。もちろん、すべてが正しいとは思いません。ほんの少しでも、先生たちに生徒の声を届けることができたのは、僕たち、水鳥中学生徒会の誇りだと思っています」

本当にそうなんだろうか？

おとひっちゃん、心になることを言つているんじゃないだろうか。今の文章つて、どう考えても、総田のことを認めているつてことだよ。

服装規定の改正をやつたのは総田だったし、おとひっちゃんはどちらかいうと、否定派だったはずだよ。もとの制服の方がいいって。僕はおとひっちゃんの言葉の続きを待つた。

「今回、先生およびたくさんの水鳥中学生徒のみなさんが声を上げ

てくれたおかげで、学校祭三田田を僕たち生徒自身の手で動かすことができるようにになりました。その第一弾として、これから始まる『先生と生徒』による座談会が行われるわけですが、その前に「おとひっちゃんは顔を真っ正面に向けた。この時初めて僕は、おとひっちゃんがずっと表情を隠していたのに気が付いた。

無表情なんてとんでもないんだ。

「この時まで、ずっと、見せないよ」としてきただけなんだ。

「先生たちにお願いします。今から僕は、ここにいる生徒一同に、ひとつ質問をしたいと思います。その答えが出たとしたら、申しわけありませんがその通りにさせてやつてください。どうか、絶対に、止めないでください。そして、内申書とか、そういうものにも、影響させないでください。」

かすかだが、机についた手がこわばっている様子だった。脇で総田が目を見開いて何かを訴えようとしている。おとひっちゃんに何かを言おうとしている。川上さんをはじめとする他の生徒会役員も口に手を当てたりしている。

椅子に坐っている連中もざわめき始めた。待ち構えている学級委員たちは食い入るようにおとひっちゃんを見つめている。

「ふつうの状態じゃねえよ、おとひっちゃん

「雅弘、あいついったいどうしたんだよ」

両隣から僕に尋ねてくる同級生たち。

僕だって答えられたら、答えたい。

でも、読めない。今ばかりは、おとひっちゃんの考えていることが全く読めない。

わかるのは、総田にも想像のつかなかつたことを昨日、やんわりと決めただろうというそれだけだ。

先生たちはというと、それが思つたより落ち着いたものだった。生徒会顧問の萩野先生は他の先生たちに頷いてみせ、指を口に当っていた。黙つていろという合図だらう。

ということは、すでに先生たちへの根回しも終わっているという

「どうだらうか。

さわめきがやまないまま、おとひつちやんはマイクの真つ正面で
ゆっくりと発言した。

「今日、この座談会そのものに疑問がある生徒、もしくは、本当にやりた
んかに参加したくないと思つてゐる生徒、もしくは、本当にやりた
いことは、こんなことではないと、思つてゐる生徒。今日まで何に
も言わなかつたけれど、本当はこんなことをやること自体が無駄
だと思つてゐる生徒。そういう生徒のみなさん。今日は僕、関崎が
すべて責任を取ります。体育館から出で行くことを、許します。決
して内申書とか、行動記録とか、そういうものには残らないと、先
生達たちから了解は取り付けてあります」

やわらかいざわめきが、一気に煮詰まり、ぱちんとはじけた。

「おー、おとひつちやん、何言い出したんだよー。」

「雅弘、お前知つてゐるんだろー。あいつ完全に頭おかしくなつち
やつたんぢやないか？」

「あれだけ懸命にやつてたおとひつちやんがだぜ、いつたい今にな
つて何を言い出したんだよー！」

僕とおとひつちやんの仲を知つてゐる連中が、今度は別の席にい
ながらも大声で訊ねてねてくる。後ろの女子たちも顔を見合わせて
いるようすだつた。前の方に座つてゐる一年生たちは一部、「わあ
い！」と喜びながらはしゃいでいるのをじる。ことの重大さをしき
と、わかつていないのである。

「あいつ、何考へてゐるんだよ」

僕は先生たちの様子をもう一度観察。

萩野先生以外の数名は、少し戸惑つた様子で口をとがらせてゐる。
でも止めようとした。緊張した面持ちで、生徒たちの方へ目をや
つていた。

やつぱり先生たちにも了解すみつてことだらう。

おとひつちやん、本当に何を考へてゐるんだか。

でもまさか、本当に立ち上がり帰つてしまふ奴なんていないよ

な。

やつぱりそれは、僕の考え、甘かった。
おとひっちゃんが仕掛けた爆弾の意味を僕は、理解してなんていなかつた。

突然、総田が壇上に駆け上がつた。おとひっちゃんの不穏な雰囲気をいち早く読み取つたのだろう。マイクの頭をおもいつきり下に折り曲げ、何かを早口に怒鳴つた。僕には聞き取れなかつた。受けたおとひっちゃんは、その総田をけりうと見返した後、全く聞き取れない声で言い返した。生徒会副会長同士の大喧嘩。とうとう全校生徒の前で繰り広げられるのか。思わぬ見ものだとばかりに、みなざわめき立つた。

いつものおとひっちゃんなら、かつとなつて言い返しているかもしない。

でもここは全校生徒の面前だ、理性も働いたのだろう。
総田に軽く首を振り、手で制したまま、おとひっちゃんはマイクをもう一度口元に当てた。

「冗談を言つていると思つている人も多いでしょう。また、いきなりのことでのみな面くらつたと思います。申しわけありません。しかし、今回の座談会を開くにあたつて僕は、どうしてもこれだけは確認したかった。今日やううとしている学校祭というのは、もしかして僕たち水鳥中学生徒会の押し付けにすぎないのではないか? ということです。僕は去年の学校祭を経験して、内容が余りにもしらけているとか、意味のない、心に残るものではないということに絶望的な気持ちになりました。先生、いや、学校側の押し付けに過ぎない行事だと思いました。もつと、水鳥中学生徒全員の心に残るものにしたいと、それだけを考えて、学校祭二日目を生徒自主企画として、時間をもらうことになりました

大きく息を吸う音が聞こえた。マイクは細かい音をずいぶん拾う。

「でも、よく考えてみると、それは僕の思い上がりであつたのだと
いうことが、この一ヶ月くらいでよくわかりました。今年の『服装
規定』問題についてみな、同じ思いでぶつかっているのか信じて
いたけれど、それは一部の生徒に過ぎないといふこと。そして、生
徒全員が同じ思いを共有することは、難しいこと。もつと難しいの
は、その本音を口にすることができない人が、ほとんどだといふこ
とでした。どうしていえなか、それは簡単です。うつかり反抗し
たら、内申書に響くかもしないし、もしかしたら希望の高校に進
めないかもしないということがあるからです。正直言つて、僕も、
もう希望の高校に行けないだらうという覚悟はしています。生徒会
顧問の萩野先生にも、再三、覚悟を問われました。ですが、今回の
座談会を開く前にどうしてもこれだけは、確認しておきたかった。
本当にやる気のある人、本当にこの学校祭に参加したいと思つてい
る人。座談会を生徒会の押し付け行事だと思つている人は、どのく
らいいるのか」

全校集会でこんなに静まりかえつたことは、かつてない。

おとひっちゃんの声だけが響く。

隣で総田が拳骨を握り締め、今にも飛び掛りそうな顔で見つめて
いる。

「いきなり出て行くのは、椅子の運び入れがあるので大変だと思い
ます。まず、質問したい人は手を上げてください」

後ろの方から「はい」と拳手する声。三年生だろうか。男子だつ
た。

「では、お願いします。起立してお願いします」

振り返ると、三年の先輩らしき人ががたがた椅子を鳴らしながら
立ち上がった。格好は校則どおりだった。不良っぽさのない、ごく
ごく普通の人という感じだった。

「今、関崎副会長がおつしやられたことは本当でしょうか」

「本當です。今日一日に関しては、生徒会が取り仕切る形になりま
すので、内申書、その他の行動記録にマイナスとして残ることはあ

りません」

「そういう問題ではなくて、副会長が知りたいことというのは、今回の中学校が、生徒にどのように受け取られているかを知りたいということですね」

「その通りです」

「それを行動で示すということですね」

「その通りです」

「その通りです」

「ぐどいくらいに確認を取る三年生。たぶん二組の人だろう。」

「それでは、今からクラスメイトに意志をそれぞれ確認します」

「ただし、クラス単位で移動ということは避けてください。あくまでも、水鳥中学の生徒ひとりひとりの意志において、決定してください」

「わかりました。では、二年二組のみなさん。僕たちはたして学校祭を、どう見ていくかを、この場所で表明したいと思いますが、どうでしょうか。もし、この座談会そのものに意味がないと思われる人は、今から僕と教室に戻りましょう。意味があると思っている人はここに残つて結構です。」

学級委員なんだろうか、それとも影の仕切り屋なんだろうか。僕には全く見当がつかない。しかしその発言がきつかけで、一人、二人と椅子をずらす音が響き渡つた。二年二組だけではない、一組、五組、四組、そして二年生たちも、少しずつ列が崩れ始めた。おとひっちゃんのクラス、二年四組はさすがに誰も腰を上げない。でも僕のクラス、二年三組は後ろの方にいる連中が黙つて立ち上がり、背もたれを片手で引きずりながら廊下に出て行つた。

先生たちが出て行く生徒たちに声を掛けようとするのを、萩野先生はふたたび制していた。後ろの方に並んでいた三年生の席は、ほとんどが虫食い状態だった。一部坐っている人もいるようすだが、ほとんどはどこかにいなくなつてしまつてしまつていた。

「二年生で残っているのは、二年二組、四組、五組。の半分弱。」

「一組と二組には生徒会役員が出ていないこともあり、あまり関心

を持つていなかつたのだろう。姿はほとんどなかつた。一年生だけがよくわけのわからない顔をしてつらつら歩き回っていた。でも出て行つたものは誰もいない。

おとひつちゃんはマイクを握り締めたまま、じっと見下ろしていた。総田がそのマイクを取り上げようと、ゆるやかに柄を取つた。今度はおとひつちゃんも抵抗しなかつた。総田はじつとおとひつちゃんの方を見つめたまま、一言だけ、たずねた。

「これで、いいのか」

マイクが声を拾つた。

「俺のやつたことの結果だ、悔いはない」

おとひつちゃんの答えは、椅子のぎじぎじ音にかき消されそうになりながらも、僕の耳にはっきりと聞こえた。

その後始まつた『先生と生徒』の座談会。

生徒会副会長・関崎乙彦の爆弾発言がきつかけで、先生と生徒との発言そのものは盛り上がつたといつてよいだろう。ひとことで言つてしまつながらば、司会者がほとんど不要なくらい、発言が続出したといつことだ。

壇上の各学級委員たちは、

「関崎副会長の言葉にもあつた通り、学校祭自体に意味はあるんですか」

「生徒があれだけいなくなつたところことが、すべての答えではないですか」

「僕たちも本当は出て行きたかった」

と、ある意味本音を語つてくれた。すでにきつかけが、関崎乙彦副会長の一聲によつてできあがつていたといつものもあるだろう。

結局、仕切り役にいつのまにか回つていた総田幸信生徒会副会長が、一時間みつちりまとめてくれた。

「いやあ、あれですねえ。やっぱり本日は無礼講、内申書や行動記録に響かない座談会ということですんで、みんな本音がでますねえ」

軽妙なタッチでの話題つくりが得意な奴に、すべて任せたのは正解だったと、見ている僕の方も感じた。

生徒会顧問萩野先生が総括を行つた後、最後に座談会責任者である関崎乙彦生徒会副会長はマイクを受け取つた。ほとんど無言で様子を見守つている状態で、うつかりすると存在を忘れそうだった。、

「本日の総括は、これから十分後に、放送委員会の協力を得て、校内放送させていただきます。本日、最後まで、参加してくれた生徒のみなさん、そして僕の身勝手な意見を通してくださった萩野先生以下先生のみなさん、感謝しています。ありがとうございました」

深々と頭を下げた。他の人々が椅子を持って壇上を降りていく中、おとひっちゃんは動かずにいた。全身全霊を使い果たした表情で、ただ、席を見下ろしていた。

僕にとって、座談会の内容そのものは、わざわざでもいいことばかりだった。内容なんて、ほとんど覚えていない。心に残るものなのか、ある意味で「本音」の語り合いができたのか、そんなのは判断できない。

ただ、おとひっちゃんが成し遂げたことは。

□にしなかつた生徒たちの『本音』を、体育館からの退館という行動によって、知ることができたこと。関崎乙彦副会長の一年間が、生徒会改選以外の方法で計られたこと。

……俺のやつたことの結果だ、悔いはない。か。

残酷な結果だと、僕は思つた。

座談会が終り、フォークダンスが始まるまでの五時間近くをビリ^{ビリ}過ごすか迷っていた。昼からは一部の有志たちによるリコーダー、ピアノ演奏会が行われるということで、関係者だけがたむろしていた。総田がこっそりと空いている時間を利用するということを条件に許可したらしい。おとひっちゃんの機嫌がよかつた時に取り付けた約束だった。

おとひっちゃん、どうしているだろうか。

一年三組の教室に戻り、一枚残っていたチケットでドーナツを買い、さつきまで行われていた座談会の様子を思い出したりしていた。別の席でしゃべっている奴の声も聞こえた。

「ねえねえ、知ってる? 三年生の先輩達、てつきりみんな帰つたもんだと思ってたでしょ」

「帰つたんじゃねえの?」

「ううん、帰つた人もいたけれど、それはただ、関心のない人ばかり。みんな教室で、先生のいない間、議論してたんだって。すつごく難しいこと言い合つて」

「ふうん、一年の連中は、ただ遊んでいいからラッキーと思つてただけみたいだけだな。夕方、フォークダンスの頃もつかい来るつて」

「いやね、関崎くんの『関心ない奴は出てつてもいい』発言があつたでしょ。その後に、自分たちの意志でもつて考えようつて三年の先輩がいっぱいいて、空き教室で語り合おうつて気になつたみたいよ」

「信じられねえな。俺だったら、おとひっちゃん以外の奴だったら、とっくに帰つてるけどな」

小さな波紋が投げかけられたのは確かのようだった。

先生たちがしきりに言つ『情熱』。

座談会に出席するという形では残らなかつたかもしだい。

『関崎副会長不信任』に近い、結果を出してしまつたかもしだい
かつた。

僕は窓の外に見えるグラウンドを、遠目で見た。

学校祭一日間使って、夜に積まれたファイヤー用の薪が、塔のよ
うだつた。

、小さな炎が、上空に舞い上がるはずだ。

同じような炎を、いつだつたかキャンプファイヤーで見たことが
あつた。

おとひつちゃんと小学校五年の夏、クラスのキャンプに行つた時、
一緒に見たことがあつた。

あの時はさつきたんも一緒にいた。

まだ意識していなかつただろつ、おとひつちゃんはまだ女子たち
と普通に話が出来た頃だつた。僕はそばで、夢中になつて語るおと
ひつちゃんの、理科にまつわる話を聞いていた。

僕が

「ファイヤーの火つて、太陽の写真に似てるよね」と言つた時だつ
た。

おとひつちゃんは、

「太陽の周りを包んでいるフレアといつ炎があつて、日本語では『
紅炎』って言つてるんだ。その炎はすっごく熱くつて、絶対に誰も
近づけないんだ」

覚えたての地学知識だつたのだらう。周りの連中が聞いてくれる
もんだと思つてしゃべりつづけていた。もっと小さい頃だつたら、
おとひつちゃんは物知りだと崇めてやつたかもしだい。

その頃からすでに、クラスの女子たちはおとひつちゃんの博学ぶ
りが鼻についてきたみたいだつた。

「よくこんなことばかり知ってるよね。つまんないな

僕の方にもうと軽い話題、テレビ番組とか、おもちゃについてとかの話を振ってきた。

隣で、むうとしているおとひっちゃんを、僕はなだめるように、「元気だよ」といって、

「ふうん、おとひっちゃん詳しいなあ」

何気なくおだてていた。それでも機嫌が直らずふくれつづらして、いふのに困ってしまい、僕は隣にいたさつきたんに声をかけた。

「おとひっちゃんどだつたら、将来、宇宙旅行しても、迷子にならないですみそうだね。さつきたん、宇宙旅行、してみたい?」

今と変わらない、小さくまとまつた顔立ちで、さつきたんは頷いた。スカートに見えるズボンっぽいものを着ていた。僕と変わらない背丈だった。

「お星さま好きだから、行きたいな

「じゃあ、僕たちと一緒に、将来行こうよ。それこそ『紅炎』の近くまでさ。ね、おとひっちゃん」

深い意味なんて、十歳の僕にはなかった。

仲良しの女子に、だつたら誰にでも同じことを言つていただけ。さつきたんはこくへじくと頷き、おとひっちゃんを見てもうつらうら、微笑んだ。

あの時のおとひっちゃんはどういう顔をしていたのだろう。それ以上の会話をした記憶はないから、たぶん別の話題にそらしたのか、それとも言葉を返さなかつたのか。あれつくり三人の間で、宇宙旅行の話は出てこなかつたから、とくの昔に忘れたものだと思つていた。

中学に入り、星座の詳しい勉強をすることになつてから、さつきさんが星の知識についてものすごく詳しいことを知つた。僕たちにあわせて、おとひっちゃんの話を聞いていたのではなく、本当に星が好きだっただけだと思い込んだ。ひとりでもいいから宇宙旅行に行きたかったのだろうと、僕は決め付けていた。

もしかしたら。

もしかしたら、おとひっちゃん。

いつしょに、いつか宇宙旅行してくれた女子のことを。
おとひっちゃんはあの時から。

僕はさつきたんの姿を探した。

とりあえず、座談会にさつきたんはちゃんと残っていた。僕の斜め後ろでおとなしく話を聞いていた様子だった。帰り際廊下で、生活委員会の顧問に呼び止められ話をしているのを見かけた。
まだ帰つてきていのかもしれない。

座談会に関しての生活委員なりのチェックが入つてているのかもしれなかった。

いないか。

しようがないか。

まずは、声かけに行つてみるか。いつもだったら今じり、給食の時間だし。

最初は、総田の方に詳しい事情を聞いておきたかった。

総田が主軸となり、おとひっちゃんが手助けした形となる『水鳥中学校祭第一部 フォークダンス』は、順調に進んでいくようだつた。

計画はすでに、総田から聞いていた。

踊りは最終的に『オクラホマ・キサー』と『マイムマイム』に絞り込まれたらしい。最初はみんなで一列になつてお田端での人を狙つて踊つた後、最後の最後にマイムマイムで全員、輪になる。多くのみなさまが熱望していた『好きな人と手を握る』という行為は、最後の最後までチャンスを伸ばせるようになつた。

時間帯は夜六時から七時半まで。まだ明るさが残っているのが気にならないけれど、遅くなりすぎるとあぶないからしたない。最後

後は打ち上げ花火を先生と総田の一人で用意して一気に盛り上げる。今回は放送委員会、音楽部、臨時結成された応援団なども交えて、派手に打ち鳴らすと共に、秋の夜空を焼き尽くそうといふ趣向だ。

「これは盛りあがらねえ、わけねえな」

座談会の修羅場をなんとか乗り切った総田は、僕を見つけざま意味ありげな笑みをもらした。

生徒会室でわびしげにドーナツをかじっていた。

「す、じいよ総田。よくここまで考えたよなあ」

計画書をぱらりと見せてくれた。ぎりぎりまで推敲していたんだとわかる。

「でも、あれはまずかった。俺もあいつがあそこまで、突っ走るとは思つてなかつた」

「うん、座談会の爆弾発言だね。おとひつちゃんはどこ、行つた？」「一時間交代で、展示を観にいった。燃え尽きたんだる。あれだけ叫んだらなあ」

「そつか。一時間待てば、おとひつちゃん、戻つてくるつてことだよね」

僕は持ってきたドーナツを広げた。甘いチョコレート入りのを最初に食べた。

「ところで佐川、二年三組の、座談会に対する反応はどうだ？」

「うん、まあまあなんじやないかな。うちのクラスはおとひつちゃんと同じ小学校が多いから、おおむね好意的、かなつてとこ」

「そうか」

総田は食べかすを机から払い、缶ジュースをすすつた。あまり残つていないらしい。ずるずる音が聞こえた。

「でも、三年生は教室の中で熱く語つてたみたいだね」

「らしいな。俺も帰り際言われたよ。お前ら生徒会の、いわば信任・不信任を確認したようなもんだよなつてさ。俺たちじやねえだろう。関崎のだろう。とつこみたかったけどな。やめといた」

「その通りなのに、どうして」

僕に、わからないのかといいたげに、顔をしかめた。

「仮にだ、あれが改選で立候補者が一人だったら、普通は信任投票で一発当選だろ？でも、あの虫食い状態の席を見ただろ。あの通りに投票されていたら、せりぎりか、もしくは過半数割れで、不信任決議だ」

そうだよな。確かにそうだよな。

「関崎は水鳥中学の無関心な連中に、行動させちまつたんだ。関心がないって本音を、白状させちまつたんだ。俺ならそこまでやらない。そういう本音を隠すように仕向ける。関心があるような気持ちにさせる」

それが総田のやり方だといふことは、僕もわかつていた。

『魔術師』かつ『教授』と呼ばれた総田ならば。

「佐川、俺、あの時、壇上から見下ろしてぞつとした。もし俺だったら、絶対に奴らを止めるよう、先生に頼むか、何か面白いことを言つて立ち止まらせようとしたと思つ。いや、させようとしたぞ、関崎に」

「怒鳴つてたよね、マイクを曲げて」

「当たり前だ。でも、奴は冷静だった。あのまんま、ざわめいていた体育館の中がすかすかになっていくのを、黙つて見ていたんだ」

総田はがくつと、芝居がかつたじぐさで頭を垂れた。

「俺には、絶対に、出来ねえ」

外から見たら、学校祭三日目・副会長対決第一ラウンドは、総田の圧勝に見えただろ？

総田の個人感情を抜きにした活躍ぶりを目に焼き付けないわけにはいかない。

でも、おとひつちゃんはその代わりに総田から敗北宣言を引き出すことができたわけだ。

はたしておとひつちゃんは、総田の言葉を聞いたのだろうか。

「俺、まじで、会長でやつてく血信、ねえよ。絶対こいつなるつて先読みしてたこじが、いう見事にどんどん返されちまつたら、これから先、どうすればいいか全く見えねえよ」

ふふふと笑い、総田は付け加えた。

「佐川、じゃあ代わりに、お前が会長に立候補しないか？ サポートはもちろん、俺がする」

「まさか、おとひっちゃんが許すわけないだろ」

「だわな」

「冗談だろ？ まさか本気なんてわけがない。

あの総田が、じこで巻き返しをはからないわけがない。

でもあの時の総田は、嘘を吐いているよつには見えなかつた。

時間つぶしの会話をじばらく続け、おとひっちゃんが生徒会室に来るのを待つていていた。なんだか太陽が照り付けてきて、秋なのに妙に暑かつた。戸口側の席に戻り、残りのドーナツを食べ終えた。腹がくちくなつた。同時に足音が聞こえ、前で止まつた。がらりと開いた。

「雅弘、来てたんか」

おとひっちゃんの足音だと、ふりむかなくてもわかつていてた。

「待つてたよ」

「なんか、食つたのか？」

「ドーナツ全部」

僕の方を物言いたげに見つめだがすぐ、総田の方に向かつていつた。いつだつたかふたりの対決をこの位置で見つめていた記憶があつた。八月の末だつただろ？ 一ヶ月前とは違い、おとひっちゃんも総田も、声を荒げはしなかつた。お互ひ、皿で額きあい、席を交代した。

おとひっちゃんは冷蔵庫からジュースを取り出し、すとんと置いた。

「じゃあ、一時間後、たのんますわ」

「わかった」

簡単な会話だけだつた。総田は僕を通りすがつにちらつと見て、「無理を承知だ、頼む」

つぶやき、出て行つた。戸を閉めたとたん、女子らしき甲高い声が聞こえた。

川上さんだらうか。待ち合わせ、していたんだらうか。おとひつちやんの前で会うのをやめ、ためらつていたんだらうか。

おとひつちやんは全く反応しなかつた。オレンジジュースを一気に飲み干すと、僕を手招きした。こっちに来いというのだろう。立ち上がつたけれど、僕はなんとなく、動けなかつた。

動いちや、だめだ。

そんな風に足が決め付けたみたいだつた。動けなかつた。両手を机についたまま、僕はおとひつちやんと真つ正面に立つた。

太陽を背に受けているおとひつちやんの表情は全く読めず、影絵のシルエットそのものに見えた。

「どうした、雅弘」

「今、誰もこないかな」

「ああ、他の生徒会連中は、みな一時からの演奏会を聴きに行つたみたいだ」

「そうなんだ。」

おとひつちやん。どうとう僕にも順番がきたつことだよね。思わず、歯を食いしばつた。そのまま動けないままでいた。

「おとひつちやんが、あの」とせ、今朝決めたんか?」
やつとの思ひでこれだけ搾り出した。

「あの」と?」

僕は答えずに待った。おとひつちやんも、じょめるのをあわらめたのか、声を低くして答えた。

「雅弘には、言つべきかどうか、迷つたよ。けど」

「いや、それはいいんだ。おとひつちやんが考えていたことは、それでもいいんだ。ただ、どうして、ああいうことしたんか？」

親友だから何でも話してほしいなんて、女子の仲良し同士のようなことを、求めてなんていない。僕だって、おとひつちやんに何でも打ち明けるわけでもないのだ。それでも、親友だと想つ。それが僕とおとひつちやんのつながりだ。そういうことを聞きたいんじゃない。

僕は両立たぬよつにかぶりを振つた。

「おとひつちやんは、座談会を成功させたいって、ずっと言つてたよな。本当に一生懸命、やつてたよね。うちのクラスの男子も女子も、認めている奴はみんな、認めてたよ。もちろん俺だって、おとひつちやんのこと、応援してたよ。でも、全校生徒にそのことを確認して、どうするつていうんだよ」

「答えは出てただろ」

ぶつあらまつておとひつちやんは答えた。

思い出したくないし、つつかれたくないのだから。

おとひつちやんの中で、もう座談会は終わつている。

「ああ、出てたよね。過半数の生徒が、教室か外か、どつかにいなくなつたよね。あれ、生徒会選挙の投票だつたら、副会長だつて会長だつて、どんな形だつて不信任になつっちゃうよ」

「わかつている」

「そんなこまでして、おとひつちやんは、自分の支持数を知りたかったんだか？」

おとひつちやんは答えなかつた。僕の方を黙つて見つめた。両手で缶ジユースの空き缶をぎゅつと握り締めていた。まだつぶしてはいなかつた。

「そうだよな、おとひつちやん、あれで自分がどれだけ、水鳥中学

の生徒に支持されているかを田で、確かめたかつたんだよな。わかつてゐるよ。おとひつちやんが考えていることくらい

僕はゆつくりと、ぐぐもつた声で、おとひつちやんに突きつけた。

「これが生徒会引退の花道だと、勝手に思つてゐんだろ！」

「何言つてゐんだ雅弘！」

おとひつちやんが立ち上がつた。とんと、缶の底を机に叩きつけた。

やはりそつだ。僕がにらんでいたとおりだ。

俺の想像してたことつて、やつぱり当たつていたんだ。

昨日の段階で、おとひつちやんと総田は、今までになく和やかに話を進めていたといつ。川上女史の登場ですべてがおじやんになつてしまつたけれども、座談会の進め方しかり、フォークダンスの選曲およびプログラム決定しかり。ふたりの意見がうまくミックスされて、理想の形にまとまつたんだと思う。座談会進行が結局総田に任せられたのも、おとひつちやんが自分の限界を見極め、預けようとした決心したからだろ。フォークダンスの選曲も『トロイカ』『ジョンカ』を削るといつといふに廻りつゝには、お互の意見が交差したからだろ。

昨日、おとひつちやんも総田も、お互にの良ことじりを、見つけたような言葉を口にしていた。

ほんの少しだけ歩み寄せたのかもしぬなかつた。

水野のさつきたんをそそのかしたのは、確かに僕だ。

僕に責任は、大いにある。

もし僕が、さつきたんにおとひつちやんの応援を頼まなかつたら、総田の計画どおり、座談会は『ごく普通の成功を見せ、満足げに笑うおとひつちやん』見ることができただろ。総田もあとあと、『自分たちのおかげで』成功した旨伝えるかもしれないが、今のような終りかたは決してありえなかつたはずだ。

しかし、川上女史が何気なく口にした『あそこに水野さんがいるよ』発言により、自分が舞い上がっていることを恥じたおとひっちゃんは、シャープを投げつけ逃げ出してしまったといつ。

総田に対して、何度も「ちくしょう」と繰り返した言葉。やつと、歩み寄れたかもしれない相手に、やつぱり裏切られた傷。ちょっと良くしてもらったくらいで舞い上がってしまった自分への怒り。

おとひっちゃんは、生徒会副会長としての自分を、空いた椅子の数で計ったのではない。

僕は断言する。

言葉に出して、おとひっちゃんに伝えたかった。

「おとひっちゃんは副会長でない、素のおとひっちゃんそのものを、思いつきり、罰したかつたんだろ！ 嘘だと言つんだつたら、ほら、言い返してみるよ！」

廊下がいきなり静まり返つた。僕の声が大きかつたのだろう。でもかまわなかつた。総田が聞いていようが、あとで川上女史に突つ込みされようが、僕のやつたことを暴露されようが、どうでもよかつた。

「もし、僕の知つてるおとひっちゃんの性格がもし崩壊してなれば、の話だけどさ『自分の内申書および行動記録がマイナス点として上げられてもかまわない。他の生徒にだけは自由な意志を表明させてやつてください』って、萩野先生および、他のうるさがた先生たちに、頭を下げたんだろ。僕の推理と観察力が、総田の評価どおり『天才』並みだったとするならば、今言つたことが間違つてゐるなんて、全然思わないよ。おとひっちゃん」

おとひっちゃんは全く動かなかつた。影絵のまま、風が髪の毛を揺らすのが見えただけだつた。

「たぶん、一ヶ月前に僕に打ち明けてくれた時は、別の理由だつた

んじやないかな、と思つてたよ。わざと受験準備本気で始めようとしてるんだなって。本気で青大附高に行きたいくつて思つているから、未練あるくせに生徒会を引退するんだって、思つてたよ。でも、今日、おとひっちゃんはちりつと、壇上で口にしてたよ。でも、『正直言つて、僕も、もう希望の高校に行けないだろ』とこう覚悟はしています。生徒会顧問の萩野先生にも、再三、覚悟を問われました』つて。他の奴らが立ち上がって、座談会を蹴つたことについて、内申書および行動記録に影響を及ぼさないでほしいと、おとひっちゃんは言つたし、それはたぶん守られるんじゃないだろ』かと思つ。でも、あの時おとひっちゃんは、『僕、関崎が責任をとります』と言つてたよね』

マイクがもしあつたら、僕の方が鼻をすすぐ上げていただろ』。息を吸う音がばんばんに響いていただろ』。

『俺、確かにおとひっちゃんのこと、もつと器用だつたらなあつて思つ時はあるよ。もつと、普通に女子としゃべれて、もつと総田みたいな奴どうまくやつていければ、きつとうまくいくだろ』なあつて。でもおとひっちゃんは、そうじなくたつて、小学校の時の友達からは認められているんだよ。それだけじゃないよ。知つてるか？ 体育館を抜け出した三年生たちが、学校に残つたまま、全員じやないけど今後の学校について討論したんだつていう話。座談会そのものだつてさ、おとひっちゃんほど仕切らなくとも、発言、いっぱい出てただろ。あれはみんな、おとひっちゃんの言葉によつて、やつと動き出したつてことなんだ。『こことか、悪こことか、俺にはわかんないけど』。おとひっちゃんのことを、俺も』

息を吸い込み、思い切つて口にした。

『さつきたんだつて、認めてるんだよ！』

おとひっちゃんの手が、空き缶を握りつぶした。

『雅弘、まさかお前もあいつらと！』

ついにちりつにかれた。いつもなら逃げる。でも今の僕は逃げる気なんてちりさらなかつた。不思議と涙は出なかつた。いつたん叫べば、

隠れた言葉がするすると手繫り寄せられて、強烈な矢に化けた。何かが僕の芯を熱く燃え立たせていた。

「違うよ、違う、俺はおとひっちゃんの親友だよ。絶対に、それだけは変わらないからね。けど、ただ」

翳つていた表情が、光の加減で一瞬はっきりと映った。

血の氣の引いた、うそじやない顔。

僕の言つことを否定できずにいる、わかりやすい表情のおとひっちゃん。

ちらりと光つた目の光沢。

それにぶつけるため、僕はめいっぱい、叫んでいた。

「俺はこれ以上、おとひっちゃんが逃げてくる、見たくないよ。不信任されるのは仕方ないけど、生徒会からも、総田からも、青大附高からも逃げていくおとひっちゃんなんて、もう見たくないよ!」

不意に、僕の中の潮が引いていた。熱に浮かされたような言葉の波が收まり、僕はおとひっちゃんが表情を完全に隠したのを見た。白いシャツ姿のまま、背を向けた。窓際に手がかかった。

「そんなに、今の俺が惨めに見えるのか

吐き捨てるような声。テーブルの向こうにからりじて聞こえる声で僕も言い返した。

「見えるよ。おとひっちゃん」

それ以外の言葉をかけたかった。

でも、それ以外、何を言えばいいのかわからずじまいだった。

黒い影は全く動かず窓枠を掴み、うなだれたまま。

僕は、そのまま生徒会室を出た。

おとひっちゃんを残し、僕はひとりで展示をぼんやりと見て回っていた。仲間がないわけではない。たぶん一年三組に戻つたら男女なりとも誰かは遊んでくれるだろう。でも、この顔で、この形相で帰つたもんなら、何つこまれるかわからない。

僕が間違つているとは思つていない。

嘘をついているわけでもない。

後悔してるのは、ああいう言い方で精神ぼろぼろ状態のおとひっちゃんに叩き込んで、何がしたかったのかってことくらいだった。

少しずつだけど、僕も気付いてはいた。

おとひっちゃんの様子が、中学入学当時から少しずつ変わつてきただことを。

成績優秀なおとひっちゃんが、なぜ公立の水鳥中学に通つているのか。小学校時代を知らない人は不思議がるものだつた。水鳥中学で一年間首席を守つておとひっちゃんが、なぜ、青大附中に進まなかつたのかと露骨に訊ねる人も多いと聞く。

落ちたからだと答えれば、またひとつ質問が増える。

なぜ、「青鴻の成績優秀な小学校六年生が一度は通る関門」青鴻大学附属中学入試におとひっちゃんがすべつてしまつたのか。

全くもつて、ミステリーだつた。

試験当日におなかを壊したわけでもない。それどころか噂に聞いたところによると、ペーパーテストでは全く非の打ち所がない得点だつたという。

考えられることといえば、面接の時にありふれた答えを返してしまつたらしい、くらいだともいう。小学校の先生と、おとひっちゃんの両親が青大附中に問い合わせたが、納得できる説明はなかつたところ。

総田がいつか話していた通り、「他人の価値観をそのまんま、鵜呑みにしてしまって自分の考えにしてしまつ、そういうおめでたい奴だつてことさ」というのがひつかかつたのかもしれない。

僕の方にもそういう噂が流れてくるくらいなのだから、当の本人おとひつちゃんが知らないとは思えない。また聞いて傷つかないわけがない。総田が見抜いていることを、うつすらにしひ、おとひつちゃんが気付かないわけがない。

青大附中入試失敗に関する愚痴をこぼされたことはなかつた。知つてゐる奴らは氣を遣つていたし、おとひつちゃんも言い訳めいたことを一言も言わなかつた。

がむしゃらに成績にこだわり、生徒会役員に未練がないわけでないくせに引退を決意したのは、理由ひとつ。

青潟市ナンバーワンのヒリート校・青潟大学附属高校合格を勝ち取るため。

三人兄弟の真中で、余裕のある家の育ちではないおとひつちゃんが、月の小遣いから将来の学費を貯めていることも僕は知つていた。

そんなおとひつちゃんが、あえて内申書にも行動記録にも響きそうな賭けをやつてのけたのは、なぜだろつ。

座談会の間、そればかりを考えていた。

で、たどり着いたのが生徒会室でわめきたてた事柄というわけだ。おとひつちゃんは一切言い返さなかつた。もちろん言いたいことはたくさんあるだろつし、よくわ僕も殴られなかつたものだと思つでもだ。

そうとしてもだ。

もう座談会は終わつてしまい、結果は明白となつてしまい、おとひつちゃんは生徒会を逃げるよう引退することを決めてしまつてゐる。

なんとしても、あいつを生徒会に残してやりたかったのに。いや、生徒会長として、立たせてやりたかったのに。

すでにさつきたんを使った工作劇をおとひっちゃんは見抜いているだろうか。見抜いていないことを願いたい。それがばれてしまつたら、僕はおとひっちゃんの親友ですら、いや友達ですらいられなくなるだろう。総田に惹かれている自分がいる一方で、隠しつづけたのは、おとひっちゃんの親友でありつづけたかつた、それだけだつた。さつきたんに慕われているらしいといつ、未確認の直感をえて無視したのだつて、おとひっちゃんを優先したからだ。

しかしすべてが裏目に出てしまった。

今ごろどうしているだろうか。

おとひっちゃんがひとり落ち込んでいる生徒会室に戻り、フォーケダンスの準備をばたばたしているだろうか。また無責任なことを川上女史に言われて、傷ついているんじゃないだろうか。

もう友達になれないかもしぬないつていうのに、まだ僕はおとひっちゃんのことを心配している。小さい頃からの仲良しだつたおとひっちゃんを、僕はある意味、わかりすぎていた。だから、見る必要がないところまで観察してしまつた。片思いの気持ちなんて意味不明のくせに、他人のことはよく見通せる僕の感覚がまずいのだ。バザーで投売り状態だつたドーナツを一袋まとめ買いし、僕は外出した。外履きに取り替えるのさえ面倒だつた。グラウンド隅に見えるのはしだれ柳の高い木だつた。ちょうど坐りこむちいいい場所だつた。田陰にもなる。ひとりにもなる。僕はそこで、しばらく時間をつけふすことにしてた。

計算違いだつた。

日陰で居心地のいい風が吹く場所、ということになると、同じことを考へている連中がたくさんいるわけだつた。よりにもよつて、いつもたむろつている奴らが、とつておきのしだれ柳下を占拠していた。

一年二組の連中。男女混合の一年生集団。六人くらい溜まつていた。

「よ、雅弘も混じるか？ でももうトランプはやらねえぞ」

「なんだよ、不景気な面してるよな。ま、こっちに来て坐れよ」

「佐川くんも一緒にジュークス飲む？」

「今ね、水野さんに、ドーナツ買い出しに行つてもらつてるんだ。

今投売りやつてるつて情報が入つたんでね」

さつきたんが来るのか。

少し気が重かつたけれど、連中はちつとも僕の様子を気にしていなかつた。

今ならトランプでぼろぼろに負ける自信、あるけどな。。

無理に笑顔を作り、座り込んだ。敷物をしいてあるとこじろみると、前もつて計画していたらし。クラスの学級委員も、座談会の活躍お疲れ様、といつた風にお茶を飲んでいる。

「どうした、雅弘。元気ねえなあ」

「ちょっとな。おとひっちゃんとけんかした」

それだけ言つて、ドーナツの袋を開けた。でも生徒会室ですでに三つ食べた後で、食欲はない。他の連中にやつた。

「めずらしいなあ。何か？ 今朝のことを打ち明けられなかつたらつてか」

「そんな女子みたいなことなんて、しないよ

ただ、と僕は続けた。

「俺、縁を切られて当然のこと、言つちまつたよ

生徒会次期選挙のからみについては触れず、僕はかいつまんでけんかの内容について説明した。小学校が同じ連中だから、青大附中入試失敗のこととか、その理由とか、基本的情報はみな持つていた。難しく説明しなくともみな頷いてくれた。

「そうだよなあ、おとひっちゃん、自爆行為だよな

「でもしちゃうがないよね。関崎くんは自分でそれを選んだんだもん。私なんかは、よくやつたつて思うけどね」

「ただなあ、おとひっちゃんは立ち直れないだろうな。総田はとも

かくとしても、いかに自分に全校生徒の支持が集まっていなかつたかを、証明するよつなもんだもんな」

「そしてこれからが問題よ。第一部

「……」総田副会長がどれくらい盛り上げるか、成功させるか、がかぎじやないかな。今の佐川くんの話からすると、かなりいいところまで企画が進んでいるようじやないの？ ほら、今、総田くんたちが準備してゐる。関崎くんもこるよ」

パー・マ頭が爆発しているから、すぐ総田だと分かる。続いてすぐ側におとひつちゃんがペットボトルを運んでいる。僕がここにいることに気付かないだろうか。気付かないでほしい。

「おとひわちゃん」と素直に声を掛けられない。今僕は、

「佐川くんもわざわざおもひあわせにきつたら？」「

「そうだよ、お前らが仲良くないとさ、今度の実力テストの黒バイ
ンダーが手にはいらねえよ」

「切実な問題ですな」

軽くいなす連中のありがたみが、よくわかつた。

僕も目を伏せたまま何度も頷いた。

「うそ、早くなんとかするよ。ナビ、おのまがじやあ、おじひか
やん、狂つちがうよ」

膝を抱え、ジュースを飲みながら、僕はしばらく同じデーナツを何度も噛んでいた。飲み込むとしゃべらなくてはならなくなる。少しだけ、じつと考えていたかった。

卷之三

さつきたんがドーナツ袋を五つばかり抱えてもどってきた。僕がいるのにびっくりしたらしい。でも、学級委員の奴がわざわざ僕の隣にスペースを作ってくれた。余計なことしなくともとむかつくところけれど、素直にさつきたんが来て、笑顔を見せるのでそのままにしておいた。

「今聞いてたのよ、佐川くんがね、関崎副会長と大げんかしたんだ

つて

「あら？」

僕の方を、心配そうに、じっと見つめてくる。

「そつなんだ。俺、馬鹿なこと言つたからさ」

隣の学級委員は、僕の代わりに説明してくれた。

「雅弘はさ、おとひつちゃんが自分で自分を罰するためにさつきの座談会みたいな真似をしたんだろって責めたらしいんだ。おとひつちゃんも図星刺されたみたいで落ち込んでしまつたってことなんだ。ほら、おとひつちゃん、青大附中落つこちてるだろ。再挑戦を賭けて、青大附高を目指しているからガリ勉してるんだと思うんだ。話に聞いたとこによるとな、青大附高の試験つて、普通のペーパーテスト以外にも面接があつて、それで落とされることが多いんだって。内申書や行動記録なんかで少しでも行動点をよくしておきたいのが本音だよな。でも、今回のことでの先生たちからは要注意人物つてことでチェックされる可能性大。それを捨ててだ。おとひつちゃんは、座談会で勝負に出て玉砕。結局自分は出来そこないなんだって思い込んでしまつたってこと」

あらためて説明されると、僕も本当に何を考えているのかと情けなくなつた。

さつきたんはふんふん頷きながら、僕の顔と学級委員の顔を交互に見て、首をかしげた。

「関崎くんは、辛かつたろうな

「あれだけ俺がひどいこと言つて傷つかなかつたら、あいつ人間じやないよ」

「佐川くんは謝りたいと思つていいのね」

「おとひつちゃんを元気にしてやりたい、それだけなんだよな」

「関崎くんはずつと、味方がいないつて思つてているのね」

「そう。さつきたんが一生懸命、生活委員会で努力してくれたけど、どうしても伝わらなかつたみたいなんだ」

本当のことは、怖くて言えない。

僕はさつきたんの表情を窺つた。もしかしたら、さつきたんにも見抜かれる可能性があることに、気付いた。さつきたんは僕に多少なりとも好意をもつてくれているから、なおさらまずい。親友のために自分を利用されたと知つたら、僕なら激怒する。

さつきたんはジュークをもらつて一口飲んだ。ほんの口を示す程度だった。おちよば口で、ちよつと尖らせたまま。

「今夜のフォークダンスは、関崎くんどうするのかしら」

「下準備はすると思うけど、座談会が中心だった。たぶんその辺でうるうるするだけだと思つ」

「そうなの。それで、佐川くん」

僕にさつきたんはもう一度尋ねた。

「私たちは関崎くんの味方だつて、どうすれば伝えられるのかしら。佐川くんだけじゃなくつて、私とか、他のみんなとか」

次の言葉は、僕にしか聞き取れなかつた。

「私に、できることがあつたら、言つてね」

はつかねずみが見上げるようなまなざしで、確かにそう言つた。

僕たちだけではなく、他の学年、クラス連中もグラウンドの周辺に敷物を敷いて、それにだべつていた。天気もいいし、なんとなく教室でうるうるするのも飽きてしまつたし、といつことなんだろう。中にはそれにひつぱられたのか、近所のおじさんおばさんたちの姿もあつた。運動部が通らない木々の木陰は、ただいまちょっとした休憩スポットになつていた。

さつきたんは僕の返事を待つてゐるようすだつた。いつもの僕だつたらいくつか案を出して、さつきたんにしてもらつよう頼んだだろう。実際頭の中にはいろいろなものが出てゐる。

でも、俺はしごじつたじやないか。

さつきたんにこれ見よがしに、好意を示してもう一つ方法をやってみて、しつべがえしを食つたじやないか。

そう思つと、何も言えなかつた。

「それにしてもなあ、ほんと雅弘はおとひつちゃんのことが好きなんだなあ」

ふたたび膝を抱えて考え込んだ僕に、ひとつ間を置いていた学級委員がぽんぽんと僕の背中をたたいた。

「そういえば、午前中の座談会前におとひつちゃんが発言しただろ。関心のない奴は出て行けって。まあ内申書がどうとかこうとかつていうのは別としてもさあ、それって、フォークダンスにも通用しないのかね」

軽く、質問を投げかけてくれた。ほつ、とか、それいえてるとか、仲間内でほわつと声が挙がった。

「つまり何か？ フォークダンスそのものに意味を見出さない連中は、勝手に抜けてもかまわないとか？」

「ううう、そうだよ。座談会に意味を見出さなくって、フォークダンスを楽しみにする奴もいれば、その反対だつているわけだろ？ もしそういう奴が無理やり、流れに従つて参加させられているとしたならば、それはまずいよな。自分の意志でもつて、フォークダンスをボイコットすることも、許されるんじゃないかなあ。どうなん？ 雅弘、生徒会側は？」

僕にはわからなかつた。おとひつちゃんはともかく、総田がそこまで考えていると判断しずらかつた。

「ま、ここにいる男子はあんまし、燃えてないようだからね。女子と手をつないでわくわくするような、ときめきもないみたいだし」「あんたさんみたいに、お目当ての男子と手をつなぎたい人はとにかく頑張つて、『オクラホマミキサー』踊つてくれればいいさ。でも、これだけの大人數で、一時間半、踊りつづけるのか？ 僕は疲れのから少し休みたいつて奴、出てもおかしくねえよ」「要するにだ。ボイコットまでいかなくともいいから、疲れた時に休むことくらい、許してくれよ生徒会、つて言いたいだけなのね」「それがかなり近い！」

僕は黙つて聞いていた。

ここにいる連中は、たまたまおとひっちゃんと同じ小学校出身だといふことで、身びいきめいたものはあるだろ。また、男女問わず仲のいいグループでもあるので、フォークダンスそのものにべたべたした期待をもつていもないのも、確かに思う。

もし仮に、この中におとひっちゃんがいてだべつていたとしたら、全く違和感なく溶け込んでくることだろ。五年生のキャンプファイヤーの夜のように、炎を見つめながら、語り合つていられるだろ。う。

いつから、おとひっちゃんは、あんなつてしまつたんだろう。

もしかして俺が追いこんだんぢやないだろか。

総田を支持する奴は圧倒的に多いかも知れないけれど、おとひっちゃんの味方でいるという連中だつて、今、ちゃんとここに坐つているのに。

無意識に口からもれた。

「今のは、全部おとひっちゃんに聞かせてやりたいよ

「え？」

さつきたんだけが気付いたらしい。僕の側にそつと寄り添つた。

「おとひっちゃんは味方がいなつて勝手に思つて、それであんなことしかしたんだ。でもわ、ここにいるのはみんな、おとひっちゃんのことを分かつてやつてる連中だろ。俺、しつこいくらい、おとひっちゃんを評価していいる奴がたくさんいるつて、いい続けてきたのにわ」

じつと僕を見上げ、小首を傾げて、聞いてくれた。

もし僕がさつきたんのことを、ひとりの女子として意識することができたなら。でも、それはまだ、今の僕にはできないことだつた。まださつきたんは、おとひっちゃんの片思いしている女子の一人だつたし、僕にとつては友達以上のなものでもなかつた。

僕への特別な感情を利用して、さんざんおとひっちゃんを舞い上がらせる計画を立てていたくせに。僕はもう何もできなくなつてしま

まつた。

さつきたんの瞳の表情が微妙に変わったような気がする。すっと離れ、また一口、ジュースを飲んだ。

こつくりと頷いて、僕以外の連中に向かって口を開いた。

「実はね、今、生活委員会で話をしていたところなの。フォークダンスって手をつなぐでしょ。でも、いろいろなクラスでは、手をつながれたくないって言って、無視したり、小指で避けたりするところもあるって問題が出てきたの」

この前、さつきたんが僕に話してくれたことだつた。

「でもみんなが楽しみにしているし、生徒会の人たちもがんばつてるからってことで、あまり口には出さなかつたの。でもね、フォーカダンスが全校生徒の意志つてわけじゃないってこともあると思うの。いやでいやでならなくつて、でも無理やり踊らなくちゃいけない人もいるかもしれないし、逃げられない人もいるかもしれないって」

「そうつか。いじめられてる子とか、大変だよねえ」

「ばい菌扱いされてる奴もいるしな」

いつか見た、凜とした声が空気を軽く、揺らした。

「そうなの。でも、今日の座談会の様子みてて思つたの。そういう人たちにも、逃げ場所が必要なんじゃないかなあって。自分たちにも参加することを選ぶ、権利があるんじゃないかなって」

向こう側の奴が、「ナイスナイスナイス」と言いながらさつきたんにジュースのおかわりを注いだ。

笑顔で受け、さつきたんはさらに続けた。

「だから、これから生徒会の人たちのところに行つてこようかなって思つてるの」

「え、水野さん、生徒会の人つて、今準備している連中のどこへか

？」

僕が声を出せないでいる間、学級委員がファイヤー近辺を指しな

がら叫んだ。

「うん。佐川くんの言つとおり、たぶん関崎くんは自分のしたことには意味がないんじやないかって、落ち込んでいるんじやないかしら。でも、味方だつてたくさんいるんだつてことを、いくつも言つておひんとこないんじやないかな。だつて、佐川くんがいくつも言つても、伝わらないって……」

頬を赤らめた。色白のさつきたんは、すぐにわかる。

「そのままそのまま。今日は行動記録につかねえから」「さつきたん、がんば！」

もう一口すすつた後、あえて僕の方を見ずさつきたんは宣言した。「私、今から生活委員長のところに行つてくる。そして、一緒に生徒会室に行つてもらつて、フォークダンス時の自由退出を許可してもらえるよう、お願いしてみるわ。できるかどうかわからないけど、関崎くんにも、はつきりと、伝わるよう」「うん！」

小さな拍手。さつきたんはそれを背に、すつと立ち上がつた。僕の方を最後に伏せ目でちらりと見た後、校舎の方へ駆け出していく。た。

さつきたんはそれつきり戻つてこなかつた。

一年連続の女子生活委員かつ、行動服装共に先生受けのこゝさつきたんが話を持つていつたら、ほとんどの委員長、先生はこゝりと参つてしまつうだらう。

無理難題では決してない。

でも本当にさつきたんは、生徒会室に行つたのだろうか。

いつのまにかグラウンドでファイヤー準備をしていた生徒会役員は校舎に戻つていつしまつた。さつきたんが行つたとしたら、その後だらう。

あれからしばらく、ドーナツをえたまま進路の話とか、テレビ番組のネタとかで軽く盛り上がり、あつといつまに五時過ぎ近くなつた。夕暮れも少し抑え目の中、そろそろ片付ける準備をする連中

も増えた。

「どうしようか、五時半にグラウンドの各クラス待機所へ集合だよね」

「水野さんの持つていった企画が通れば、敷物そのまんまでしておいてもいいんだけどな。場所取りとして」

「でもさつきたん遅いよ。またもめてるのかな。関崎副会長と総田副会長あたりのことだ」

結果がどうなったのかは僕も知りたかった。

さんざん僕に言いたいことをぶつけられてぼろぼろになつたおとひつちゃん。そのおとひつちゃんのところへ、さつきたんは生活委員会という委員会名を武器にして、訴えに行つた。

もしかしたら、さつきたんは僕が何をさせたいのかを敏感に察知してくれたのかもしれない。今回に限つては、そうしてほしいとか、そう狙つたわけではない。

さつきたんは勝手に僕の本音を読み取つてくれた。僕が、いくら口で言つても伝わらないという悔しさを、代わりに伝えに行つてくれた。

今度こそ、僕はひとりになりたかった。

「ちょっと、トイレ行つてくれる。まだ時間あるよな」
上履きのままだし、靴も取り替えたかった。
三十分くらいだったら、まだ時間はある。

校舎に入つてから十分も立つていないので、外の空氣はだんだん青みがかつてきた。まだ光の透ける空を見上げた。展示を行つている教室では、ほとんど後片付けが終り、ごみ袋を抱えて走る生徒の姿も見受けられた。僕が上履きを外に履いてしまい、泥がついていることも、誰一人気付かないようすだつた。

二年三組の教室を覗いたけれども誰もいなかつた。

がらんとしたくせに、上方からは片付け指示の声が聞こえた。まだいるんだろうな。生徒会室。

階段を昇るうかどうじょうか迷つていると、誰かが降りてくる気配がした。

ばたばたと、つるやこくらの足音。何かの拍子で、すとんと転がつた。

「お前大丈夫か？ 来週大会なんだろ。無理するなよ」

おとひっちゃんの声だつた。身を小さくして隠した。

「関崎先輩、すみません」

「今のはすぐに返事なんて出さなくていいからな。無理になんて絶対に言わないからな」

「はい、来週中にはお返事します」

僕は手すりの陰に隠れ、降りてくる足音が通り過ぎるのを待つていた。丸いがぐり頭とめがねをかけた顔、そして胸につけたバッチ『学級』のバッヂ。生徒会室にいた時、見たことのある奴だつた。そうだつた。一年一組の学級委員だ。

小学校時代、おとひっちゃんの陸上部後輩だつたという不器用そな奴だつた。彼は僕に気付かず玄関に向かい、すぐに見えなくなつた。

確かあの時、総田に細かいところをたくさん指摘され、困り果てていたのがちょっと哀れだつた。最後には階段から滑り落ちるくら

いショックを受けて、帰つていつた、あいつだつた。

「どうか、陸上部か。来週大会があるんだ。

時間稼ぎをしたかったわけじゃない。あれから四時間以上経つて、頭も冷えた。僕なりに結論も出た。だからこそ、今のうちに会つて、おとひつちやんにあやまりたかった。

ただ、またわきたんが生徒会室に行つたとしたら、たぶん総田もいる前でなにかかしらの問題が起つて、いる可能性がある。紛れ込んだら、修羅場になることは間違いない。帰つてことを面倒にしてしまいそうで、僕はまだためらつていた。

「おい、佐川、じんなとこりでなにふらふらしてるんだよ」「階段に座り込んでいると反対方向から呼ばれた。僕の情けない格好が丸見えだつた。

総田がトランシーバーを持つて玄関に出るとじりだつた。こいつも足元を見ると、外履きのまま上がつていた。まさに校則違反そのものだ。

「総田。忙しことこいろ聞こいで」めん。今、おとひつちやんどうつくる?」

おそるおそる僕は尋ねた。

おひおどしてこるように見えたまつともなこと思つてつ。

「生徒会室で待機してゐる。話しえこもひと段落したしな。あとは本番さ」

「他の生徒会一門は?」「とつぐの昔に降りてつた。たぶん待機テントの中で音響とかなんかやつてゐはずだ」

「じゃあ、おとひつちやんは何をしてるの?」

「わざわざここまで校内の放送委員とか、先生たちヒトトランシーバーで打ち合せして、それからテントにもどるつて言つてたぜ。いろいろあるんだる」

「ほそつとつぶやいた後、思い出したように付け加えた。

「しかし、お前、最後の最後でどんでんがえしを食わせてくれた

な。たすがだぜ」

「どういふことだよ」

「詳しく述べは関崎か、もしくは水野さんに聞いてみるんだな。ほら、

今なら関崎ひとりだけだぜ」

それ以上は何も言わず、ピースサインで一本指を立て、総田も生徒玄関の方に姿を消した。

どういふことなんだろうか。

総田の機嫌はすこぶる良かつた。

最後の最後でどんでん返し？

さすがだぜつて、総田にとつてプラスになったことなのかな？

おとひつちやんにまた、何か動きがあつたのだろうか。

僕には全く読めなかつた。今ならまだ一人で生徒会室にいるという。

もしかして、さつきたんが生活委員長をひっぱつていつて話をしたということが、少しでも前向きな動きをみせたのだろうか。総田も「詳しく述べは関崎か、もしくは水野さんに聞いてみるんだな」と言つていたことだし。

あと二十分くらいしかない。

聞くなら今だ。

腰を上げて、僕は駆け上がつた。踊り場で息をつかず、一気に階段を一段どびして生徒会室に向かつた。薄暗く、窓からは寒いくらいの風が勢いよく飛び込んできた。

引き戸の前に立つても、人の気配は感じられなかつた。でも南京錠は外れている。僕はノックをしないでがらつと開けた。おとひつちやんが、片手にトランシーバーを持って窓辺でなにやら通信していた。

僕の姿を見つけ、はつとかたまつた。

「おとひつちやん、俺さ」

それ以上は言えなかつた。僕は背を向けたまま引き戸を閉め、す

うつともたれた。

「雅弘、こっちに来い」

有無を言わざぬ口調だった。一発くらい殴られるのは覚悟していた。おとひっちゃんを見つめたまま、おとひっちゃんの腰掛けている椅子に坐った。近づくにつれておとひっちゃんの表情はいつも通りに見えてきて、僕はほんの少しほつとした。怒つていないうだつた。

「さつときは「めん。俺も言い過ぎた」

早いうちに謝つておくれりだつた。僕の方から最初に頭を下げた。

おとひっちゃんはすぐに返事をしなかつた。ひらりと皿で合図をした後、トランシーバーに向かい、

「それではあと五分くらいしてからもう一度連絡を入れます。以上です」

先生たちに連絡をしていたのだ。スイッチを切つた。

「もう誰も聞いていないから、話しておいていいよな」

おとひっちゃんは僕の目を、じいっと見つめ、また外のグラウンドに顔を向けた。

「雅弘、俺は生徒会長で次期改選に出来るつもりは、今のところない」

つぶやきよりも、もつと確固とした声だつた。

「今日の座談会だけじゃない、この一ヶ月、ずっと考えていたんだ。俺には、水鳥中学の生徒全員をひっぱっていくだけの、人望がないつてわかつっていた。だから、総田にどちらにしろ、会長を任せせるつもりでいたんだ。でも、さ

言葉を切つて、うつむいた。

「つじさつき、総田とも話をして、向こうは向こうなりの考え方で、副会長でいたいという理由が、よくわかつたんだ。一番手でないと力を発揮できないっていう気持ちも。だから、こっちから案を出すことにしたんだ」

「案? つてなに?」

おとひつちやんは目を閉じて、間を取つた。そのまま続けた。

「今年の一年で一人、見所のある奴が学級委員にいるんだ。今日の座談会にも顔を出していた。俺の後輩なんだけど、すげえ不器用でしゃべるのも下手で、でも、ひたむきで一生懸命なんだ。そいつ陸上部に入っているんだけど、どう考へても地区大会を突破できる脚なんしてないんだ。なのに、一番稽古熱心なのはあいつなんだよな。裏方も全部やって、それでいて周りにはにこにこしてゐ。いつのまにか、周りに仲間が集まつてくる。どんなうるさい先輩でも、あいつには協力しようつて言つてくれる。すげえ、いい奴だよ」

「俺、見た事あるかもしね」

「あいつを、来月の生徒会改選で、会長候補として出す」としたいたいんだ

「うそだろ？」

声が出ないくらい、驚いた。「会長候補つて、おとひつちやん、それ本気かよ」

「総田も了解した。あとはあいつの返事待ちだ」

びゅょんと、電波の乱れる音が空からした。

校内放送が流れた。

「校内に残つてゐる生徒のみなさんは、至急、各クラスの待機所に集合してください。なお、総田生徒副会長から、今夜のフォーカダンスに関する諸注意があります」

僕は動かぬまま、おとひつちやんの話を聞いた。あとで担任に怒鳴られるだらうが、どうでもよかつた。

「奴には言つておいた。ちゃんと俺も、生徒会副会長として残るから。お前ひとりに責任を負わせるようなことはしないからつてさ」

おとひつちやんは最後の部分を、早口に消えるように、つぶやいた。きちんと俺も、生徒会副会長として残るから。

ちゃんと俺も、生徒会副会長として残るから。

「やつこつこと、なんか」

「もう一年、生徒会で勝負する」

頭の中が混乱してまとまりがつかなくなっていた。

僕と言い合いをした後、総田となんらかの話し合いが行われ、一年生生徒会長擁立ということに話がまとまつたといつことだひつ。

全く聞いていないからあくまでも僕の想像だ。

おとひっちゃんの言葉をそのまま信じるならば。

おとひっちゃん自身はすでに、自分を生徒会長の器じゃないと決め付けている。また総田は自分が一番手でこれを輝くタイプだということを自覚している。だからお互に次期生徒会長の座を押し付けあつていたということだろう。いわば、不毛な押し付け裏工作を試み、互いに失敗していたというわけだ。

一年生会長擁立案がおとひっちゃんか、もしくは総田か、どちらの発案なのは判断できない。総田が匂わせたことを自分が思ついたと早合点してしまつた、おとひっちゃんのかも知れない。また、何にも知らない一年生を無理やり押し込むのも不安がある。ベストの方法とは、言い切れない。

僕からすると、どうも総田の計画がはまつたのではないかといふ気がする。

なんとしてもおとひっちゃんを、生徒会に残すための。

総田幸信最大の譲歩策だったのではないだろうか。性格の不一致や、恋愛観の違い、そういうものをとっぱらつても、おとひっちゃんを水鳥中学生徒会に欠かせない人間として認めたからこそ、できしたことではないだろうか。勝手な想像だけど僕はそう思つ。

おとひっちゃんの一聲で、水鳥中学生徒の一部が確實に動いたのを僕は見た。

みずから意志でもつて、体育館を後にした三年生たち。

座談会の壇上で、討論に加わつていつた学級委員たち。

そして、生活委員会を代表して単身、話し合いでかけたさつき

たん。

「でこ」とは、おとひつちやん、副会長で次期改選に立候補するんだね

確認する意味で、僕は訊ねた。

振りむくことなくおとひつちやんは頷いた。

「もし俺が生徒会長になつてしまつたら、総田のやりかたとぶつかりあう以外方法を見つけられないけれど、あいつだったら、もとつまくやつていけると思つ

もつと何か聞きたかった。でも、すでに五分以上経過している。

僕は素早く立ち上がつた。

「おとひつちやん、どうせ下に降りてくれるんだ」

「連絡関係がひと段落したら」

「じゃあ、もう一度、こくよ

おとひつちやんに僕は答へ、もうひとつだけ質問をした。

「さつき生活委員会の人たちが生徒会室に来たつて聞いたけど、あれどくなつたの」

背を向けたままおとひつちやんは、身動きひとつせず答えた。

「三十分くらい前からグラウンドの側に、大きい遠足用シートを敷いておいてもらつてこる。疲れた奴はそこで勝手に休めつて」とになつてゐる。雅弘、どうしてそれ知つてるんだ?」

「いや、あのひ、俺もよくわかんないんだけど

もうぼろが出てもいい、僕は覚悟を決めた。

「さつきたんが自分の意志で、生活委員長に話を持つていつたんだ。僕だけじゃない、二年三組の一部連中がさつきたんの宣言を聞いて、びびつてた。おとひつちやんたちに、ちゃんとやるべきことをやるつて伝えるために行へつて。あんなにおとなしそうな顔してこるのでございよな」

ゆつべつとおとひつちやんが僕の方に向き直り静かな表情で尋ねた。

「雅弘、お前気付いてないのか」

僕は、気付いていない振りをした。

「いつたい、何にだよ」

「いや、それならいいんだ。ほら、雅弘、そろそろ整列だぞ、急げ！」

帰り際、僕は窓辺の景色をもう一度確かめた。

黒い煙がうつすらと空をかすませている。藍色の空に白いものがふんわりと浮いていた

「では、みんなながらくお待たせいたしました。本日、水鳥中学学校祭第一部、友情と愛情をテーマといたしました、フォーエクダンスを開催させていただきます！ 今夜の司会進行は私、生徒会副会長の総田幸信が勤めさせていただきます。どうかよろしくお願ひします」

相変わらず軽妙なりの総田だ。側でマイクがからまないよう余計の川上さんがほどいてひっぱっている。総田のお膝元、二年五組でひゅうひゅうと声がかかる。一年あたりからも「そうだせんぱーい」と甘い声援が飛ぶ。いつちゃなんだが、一部とはのりが全く違う。

「午前中はみなさん、かなり衝撃的な出だしで、みなさん退かれたんじゃないでしょうか。いや、それは生徒会一同もみんなおんじです。まあそのことについては、もうひとりの生徒会副会長に後始末をお願いするとしてもです。ですが、今回の学校祭、自分の意志を自分で表明するというテーマにいつもなにか変わつていつているようく感じるもの、これまた事実。ということで、生徒のみなさんにお願いがあります。いえいえ、火には注意しようとか、ファイヤガ燃えているところに不必要に近づくなとか、そのことについてはすでに、青湯東消防署長様からのお言葉を頂戴します」

髪を直す総田。そりゃあたりまえだ。あれだけ走り回つてたら髪が乱れるだろ？

「みなさん、お気づきでしょうが、グラウンドの周りに青いシートが、ところどころ敷かれているのを変だと思った人も多いんじゃないでしょうか。前代未聞です。これは、みなさんの中で、フォーエクダンスにはちょっと乗り気じゃない、もしくはエキサイトしそぎで脚を折った、いや痛めた方、また友情を高めるためにちよつと語り

たい、そんなみなさんのために『ご用意したスーパーシートで、『ございます。生活委員のみなさまから、本日、ご意見をいただきまして至急用意させていただいたしだいです』

僕は、昼間たむろつていた場所を振り返つた。しだれ柳の下には、ちゃんと小さめながら、シートとジュースの空き瓶が転がつていた。疲れたらあそこにいこう。

「あんまり長くしゃべつていると、僕の方が引きずり降ろされると思うので、『さいご』に一つだけ。このフォークダンス中に誰かが火のなかに『ファイヤー！』とか叫んで飛び込んだり、原始人の踊りみたく服を脱いで『王立ちでもしない限り、今年の学校祭は情熱の色、『紅』に染まつて大成功を収めた、ということになると思います。

水鳥中学生徒会の総力を結集してまとめた学校祭代三日目、みんな、狂おうぜ！」

わあつと、口笛、歓声の嵐。すでに整列状態は乱れていた。体育委員の数人がもう一度、一列にまとまるよう指示をしていた。いきなりシートに滑り込もうとする人はまだいない。言われたとおり、まずはファイヤーをぐるっと囲み、両手を広げて感覚を取つた。僕の斜め前にさつきたんが位置していた。僕の方を見て、小さく頷いた。

「さすが生活委員」

「ええ」

生徒会役員がたむろするテントの中に、たぶんおとひつちゃんは待機しているのだろう。姿が見えなかつた。

木々の重い陰の合間に、ちらちら覗く紅の炎が空をなめまわしていた。オクラホマミキサーが三回くりかえされ、総田の一方的DJトークが炸裂している。

「じゃあ、次は、スピードを上げていくからな！ レコード75回転バージョンでいくぜ」

前もつてスピードを速めた音楽を用意していたのだろう。いきな

リストップが混乱し、少しずつ輪から離れていく連中が出てきた。脚をくじいて横になつている奴もいる。体育委員か、保健委員か、誰かがしつぷをもつて走り回っていた。輪は思いっきり乱れ、ずんずん半径は狭まつていった。中にはそれを利用して、場所をお目当ての人の近くまで移動しようとする女子の姿も見られた。

僕はというと、誰でも合わせられるので平気だった。間違つて反対側の足を出してしまつたという失敗はあつたけれども、気にする奴なんていない。たまには男子同士当たつてげらげら笑いながら、ぐるぐると火の粉飛びそうなところまで近づいていった。さすがに先生たちが注意する。

「あまり近づくなよ、やけどするぞ！」

三十分くらい踊りつづけるとさすがに僕も疲れはてた。ちょうどしだれ柳の下にはひとり、誰かが坐つている。女子らしい。

お下げ編みだ。

たぶん、さつきたんだ。

ジュース、一杯もらえるかな。

僕はそつと抜け出した。

膝を抱えて、さつきたんは空をずっと見上げていた。

秋の星座がどんなものなのかわからない。僕が見分けられるのはオリオン座とカシオペア座くらいだった。

「さつきたん、疲れてるね」

「うん、ちょっとだけ」

僕だけというわけではなかつた。ほとんどのシートでは人が数人、ねつころがつたり、かたまつたりしていた。しだれ柳の下は夜になると小さな虫が飛んできて、はらうのにうつとおしかつた。なんだか風がそいで落ち着く。離れたくなつた。

再び『オクラホマ・ミキサー』が流れかけた。でも、最初の一秒钟

らこでレコードの針が飛んだ。かけなおしている。じりじりと古いレコード特有の雑音が響いていた。

総田は落ち着いている。ちやんと合間にトークを入れている。

「ちょっと、レコードものりきつちやつて、しつかりブレークダンスしてるとかね。まーよくあることさー。さあて、またもや一人の世界を作れるBGD、それがオクラホマ!!キサーつてわけだけど、ちよつとマンネリかな？ じゃあ、飛び込みで行きますか。体育の授業でこれはできるよね、みんな一気にジョンカでGO！ みんな、近くの人の肩を誰でもいいから掴んで、踊つちやおつせー！」

炎が空の真上をほの白く照らした。猛獸の舌のようにならぎ、躍り上がった。

「そういえばわ、さつきたん星が好きだつたんだよね」

「ひつやつて星を見上げてる方が好きなのよ」

さつきたんは輝きの違う星ひとつひとつを指でなぞりながら、僕にいくつかの星座名を教えてくれた。カシオペア座、オリオン座、天の川。

「今は太陽が隠れているけれど、それは太陽の位置の問題であって、突き抜けたら、雲ひとつない青空が広がつているはずなの」

「太陽は今でも、燃えているんだね」

「そうなの。フレアはすべてのものを焼きぬくから、熱く、燃えているの」

さつきたんは覚えているだらうか。

小学校五年生の時に、おとひつちやんと一緒に話した『紅炎』のことを。

「さつきたん、五年生の時わ」
僕がそこまで言いかけた時、さつきたんはすべりこいつと微笑んだ。

「宇宙旅行に行こうつて

「覚えていたんだ」

「うん。関崎くんがずっと、太陽系宇宙の話とか、星座の話とかして、いた時、佐川くんが一緒に行こうって言つてくれたこと」
さつきたんは天を見上げていたが、だんだんファイヤーの炎にもどしていった。

「まだ五年生の頃の話だから、忘れていいでしょう。佐川くん」

「つうん、覚えてるよ」

おとひつちゃんのことを思い出させたかった。

「私、星の話が好きになつたのは、あの時からなの。関崎くんの話がおもしろくて、いつか佐川くんと一緒に宇宙旅行に行けたら、いいなつて、思つていたの。でも、五年生の秋以降、関崎くんも佐川くんも、星の話や太陽系の話してくれなくて、淋しかつた。だから、自分でいろいろ勉強していたの。いつか、夢が、かなうかな、つて思つて」

「あの時から?」

口もとをきゅっと閉じて、肩をすくめて笑つた。

「あの頃みたいに、関崎くんも、星や宇宙の話してくれればいいのにね」

さつきたんの表情は、もう一度僕の方に向いて、ささやき声に代わつた。

「佐川くんといつか宇宙旅行、行けるくらい、物知りになつたいから」

立ち上がり生徒会テントを見渡した。

なんとなく、膝にこぼれたパン屑のようなもの、かげろうみみたいな虫、くつづいているような気がした。払い落としたかった。

トランシーバーを持つて走り回つている奴がいないか、もしくは暇を持て余していないか。たいして広くないグラウンドだ。白いワイシャツ姿で様子を見ながらゆっくり歩いている姿を見つめた。

「ほら、関崎くんがいるわ

さつきたんも見つけていたようだつた。

「さつきたん、結局生徒会室で、何を話したの？」

さつと聞いた。

「シートのことを委員長に話して、すぐにOKが取れたのよ。急いで」ということになつて、すぐに生徒会室に向かつたの。さつしたら、関崎くんと総田くんが話をしていたから、思い切つて聞いてみたの。うちの委員長、他に用事があつたみたいなので私ひとりで

「さつきたん、ひとりでか？」

「私を見て二人とも、かなり驚いていたわ。フォークダンス担当は総田くんだと聞いていたし、そのことについてはすぐに話が通じて、指示を出してくれることになつたの。でも、関崎くん、元気がなかつたから」

さつきたんは、背を向けてしゃべつてくるおとひつちゃんを見ながら、ささやいた。

「佐川くん、めんなさい。私、生徒会の選挙に出でましたって言つちやつたの」

僕のようすを窺つみつけて、怒つていないかを確かめねばついただつた。

あわせて聲音を変えて答えた。

「やつぱり言つちやつたんだ」

「じめんなさい。でも、こうしないと、関崎くんには伝わらなうこと思つたの」

すでにばれてしまつてたか！

心中、慌ててしまつた。

でも、もう終わつてしまつたことだつた。

「で、おとひつちゃんはどう答えた？」

「びつくりしてたわ。でも、ありがとうって言つてくれたの。その後すぐに総田くんを呼び寄せて何か、話し合ひをしていたから、どうなつたかはわからないけれど」

最後の最後の大逆転。

僕は五メートル先に見えるおとひっちゃんの背中へ、つぶやいた。

「気付いてたんだ」

僕が何をたくさんだか、ビビリてこりこりとをしたかつてことだけじゃない。もしかしたら、さつきたんが僕のことを、さつこうふつに見ているつてことも気付いているのかもしれない。でも、もしそうだつたら、僕はビビすればいいんだが。もし、さつきたんと付き合いたいと思うのならば、僕はそれなりの言葉で返事をしたがう。

僕はただ、おとひっちゃんとさつきたんと、五年生の夏と回じう、星の話をしながらファイヤーの炎を見つめたいだけだつた。それ以上のことなんて、今の僕には、ビビりでもよかつた。僕は、どうすればこままでどおり、おとひっちゃんと呼んでいられるのだろう。

おとひっちゃん、こっちむけよ。
おとひっちゃん、気付けよ。
心で念じながらじつと見つめた。
おとひっちゃん、こっちに来いよ。
僕の中で激しく声が響いた。

さつきたんは、小学校五年の時の僕たちに会いたがつてゐるんだ。ばかばかしきくらい夢物語の、宇宙旅行をまだ、信じてゐるんだ。俺と一緒にいることは、分かっている。何を言いたいか、わかっている。でも、今は、おとひっちゃんと一緒にいたいんだ。

僕は坐つたまま見つめ返すさつきたんの前にしゃがみこんだ。

「あのさ、さつきたん、ひとつだけ頼んで、いいかな」「どうしたの?」「どうしたの?」

さつきたんはとまどうふうに首をかしげた。音楽がうるさくて聞こえないから、もつと近くに寄った。ちつとも、びっくりしていいようすだつた。

「今から俺、おとひつちゃんを呼びたいんだ」

「関崎くん、あそここにいるからきっと、気付くわ」

「ちよつとだけ、おとひつちゃんと話してほしいんだ。さつき生徒会室で話したことでもいいし、ほら、今の星の話でもいいんだ。とにかく、おとひつちゃんに、ふつうの顔して、しゃべってほしいんだ」

わけは言いたくなかった。僕ができる精一杯の、想いを込めた。知らず知らず、両膝をついて、ぐつとさつきたんに接近していった。恥ずかしくなんて、なかつた。ただ伝えたかつた。

「佐川くん、それってどうして？」

「おとひつちゃんを、俺、どうしても」

深く息を吸つた。一度だけ顔を伏せてみた。さつきたんの目をじつと見詰め返した。はつかねずみのよつた表情のさつきたんは、何かをわかつてくれたみたいだつた。

「おとひつちゃんを助けたいんだ。どうしても」

瞳の光が、ちらりと白く掠めたよつに見えた。きゅうと唇をかみ締め、さつきたんはうなづいた。

「佐川くんがしたいことなら、いいわ。言われたとおりにします」

とうとう、おとひつちゃんも足を僕たちのいるじだれ柳の方に向けた。

「いきなりであります、予定変更。人数も少なくなつちまつたことだし、次は『トロイカ』に突入だ！ みなさん、三列に並んでくださいねん。真中の人だけが前に流されてしまつという、実にジブシー、でも両脇のみなさまは曲が終わるまでずっと一緒にいられるという、ナイス。グットなダンスだね。用意はいいかな？ そこ

の体育委員のみなさんもどうが、一と一緒に。では、トロイカにGO !

煙臭く、咳き込みそうなくらい空気が濁った。しかしこまだ夜は半ば。総田の咽もまだ元気だ。ジュースを差し入れしてやりたい。早いテンポの局にあわせて、忙しそうに人が入れ替わる。この頃になると、列がどうの、学年がどうのとかまつているひまはない。ごった煮状態のグラウンドは、完成と汗と、紅い炎のみで埋め尽くされていた。

あの中に溶け込んでいる総田だつて、これから先の不安を隠している。今夜の総田はスターでいられるけれども、いつまで続くかは誰にもわからない。いつづぶされるか、そんな不安に負けたくないから、必死に走りつづける総田。ほんの一時、祭りの華やぎで先の見えない不安を覆っている。

予定変更、予定変更、予定変更。

おとひつちゃん。総田も、根っここのとこひなー一緒になんだかう。だからおとひつちゃん。

僕と目が合つた時、おとひつちゃんはふたたび、凍りついたように動かなかつた。口もとで何かをつぶやいているが、聞こえない。

「おとひつちゃん、ひなーよー。」

両手を上げて叫んだ。

「疲れただろ、ジュース飲んでいけよ」

隣のさつきたんに目で合図をし、僕はもう一度叫んだ。

さすがに人前であれだけ叫ばれると、おとひつちゃんも無視するわけにはいかなかつたんだらう。急ぎ早にシートの間を縫つてやつてきた。

「雅弘、なんでこんなところにいる?」

「疲れたから、ほら、飲む?」

さつきたんが紙コップに注いでくれた。そのまま渡してくれた。生ぬるくなつたオレンジジュースだつた。

「あ、水野さん」

答えずにさつきたんは小首をかしげた。やわらかい笑みだった。

「わつきは、どうも」

田を合わせれ戸惑い、おとひつちやんは受け取りながら少しびもつた。

「今さ、さつきたんと一緒に、五年生の夏、キャンプファイヤーの時のことを話してたんだ。おとひつちやんもあの時いただろ、それで、あの時話したこととかいろいろ思い出して、またおとひつちやんから星とか銀河系の話、したいねって、言つてたんだ」

さつきたんは素直に頷いている。嘘はない。僕も続けた。

「ほり、覚えてないかな。やつぱり今日のように、ファイヤーの炎が燃えていて、それをおとひつちやん見ながら、太陽の周りで燃えているフレアについて説明してくれたよね。ええと、あれなんだつけ、日本語で……」

「『紅炎』か？」

僕があいづちを打つ前に、さつきたんがこつくりとして、そつと指を指した。

「『紅炎』よ。あの時、関崎くんが話してくれたこと、今でも全部覚えているの」

横から覗くとさつきたんの瞳には、おとひつちやんが映っていた。困ったように唇を噛み、どう答えていいのかわからぬふうにでも、田はそらせないおとひつちやんだった。かすかに後ろでさわさわと、しだれ柳が揺れる。しばらく動かないでいたおとひつちやんはすっと田をファイヤーの向こうに移し、もういちどさつきたんの方に視線を戻した。

「きっと、あんな感じなんだろうな。太陽のそばって」

「うん、熱くてすべてのものを焼き飛ばしてしまって。でもいつか、太陽の近くまで宇宙旅行できたらいいなって、夢があるの。そういうの、五年生の、あの時から」

さつきたんの声は夜空の煙にぐるまれたように、かすかに響いた。

片手で紙コップを持ったまま、おとひつちゃんは息を呑んで立ちはぐんでいた。

体育すわりで膝を抱えてこらえつきたんを、じっと見下ろしていた。

やがて、意を決したように、すうっと指を、ファイヤーに向けた。

「水野さん。それなら、もっと近くまで、行って見ようか」

「近くって？」

さつきたんには意味が通じなかつたようだ、おとひつちゃんも困惑っていた。

「ぎりぎり、火の粉がかからないところまで、近づいてみようか。輪も小さくなつていて、たぶんめだたない」

「いいの？ 注意されない？」

「どうせそろそろ火も弱まつていて、大丈夫だ。近づけるといつまで、行つて見よう」

生徒会副会長にあるまじき危険行為発言。

僕と目を合わせたさつきたんはにっこり頷いて立ち上がつた。

僕も釣られて立ち上がつた。さつきたんに聞かれなにようにおと

ひつちゃんの顔を覗き込んで訊ねた。

「おとひつちゃん、どうしたんだ？」

「なんか、むしょうに、火の近くに行つてみたくなつただけなんだ」おとひつちゃんは炎を吸い込もうとする風に深呼吸し、僕に笑いかけた。

まだ何もなかつた頃のおとひつちゃんと、同じ表情だった。

軽くおとひつちゃんは僕の肩を叩きファイヤーに歩み寄つて行つた。芋虫のように『ジエンカ』を踊る連中の間を縫つて、ファイヤーの影に立つた。ちょうど生徒会テント側からは死角で、踊つている連中がすれ違う以外、目立たない場所だつた。

僕はさつきたんとならんで、ついていった。振り返つたおとひつちゃんは、僕とさつきたんに横顔を見せたまま、すうつと炎を見上げた。火の粉が飛びそうなぎりぎりのラインだつた。熱くて、汗が

流れそうで、ふたりの顔も橙色に染まっていた。すべてのものが焼き尽くされるような情熱。近づけないくらい熱い炎。紅く、黄色く、暖かく、明るかつた。

おとひっちゃんのかすかな声が聞こえた。

「なんか、あの炎がまぶしすぎて、変になつてるんだ」

あの炎か。

あれが、おとひっちゃんにはまぶしすぎたんか。

三人、フォークダンスの輪の外で、ずつと見つめた。でも僕には目を焼くようなまぶしさではなく、もつと温かくやわらかく、燃えているように見えた。すべてのものを焼き尽くすのではない。遠くに見える太陽の光、のようだ。

おとひっちゃんはひとり、さつきたんに何かを語り始めた。僕には聞き取れなかつた。天文関係のさうに詳しい話だつた。素直にうんうんと聞いているさつきたん。夢中になつて十歳の頃のように語りつづけているおとひっちゃん。

僕はそつとその場を離れた。

ひとりで祭りの輝きを見つめた。

「いよいよきましたラストナンバー。これぞまさしく天下のマイムマイム！みんな知つてるよね。あの、誰でも手をつなげば十分踊れるつていう、あのばんざい踊り。これを三発やつて今夜は締めようぜ！あ、忘れちゃいけない。ゲルマン人の大移動みたいに、あちこち突進したらこまるよ～ん！そいじゃ、いくぜ！」

僕は一步、二歩、離れて一人を見つめていた。総田の叫び声も限界まで来ている。輪の中にいきなり乱入する奴もいた。踊りも入り乱れていた。シートの上でそれぞれの時を過ごす奴もたくさんいた。その中で、僕はおとひっちゃんとさつきたんが炎と夜空を指差しながら天体について語り合つようすを見守つていた。

さつとせつきたんは、僕の頼んだことを素直に実行してくれただけなんだわ。わかっている。どこかでまた、僕のたくらんだことがばれてしまふかもしだれなにってことを。いつか僕も、さつきたんへなんらかの答えをださなくてはならなにってことを。おとひつちやんにいつかは、本当にこのことをぶつけなくてはならなにってことを。

おとひつちやんはおとひつちやんのことを好きになるかもしない。おとひつちやんはわつきたんが僕のことをどう思っているか知つているかもしない。

僕もさつきたんのことを、おとひつちやんと同じ感覚で好きになれるかもしない。

また僕も、総田の方についていろいろ裏工作するのかもしない。先が見通せないのは、僕もいつしょだ。

でも、今、この時だけは。

おとひつちやん、勝負はまだまだ、これからだ。
つぶやき、僕は、紅炎を囲む輪の中に飛び込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6789e/>

紅炎があかるすぎる～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日15時28分発行